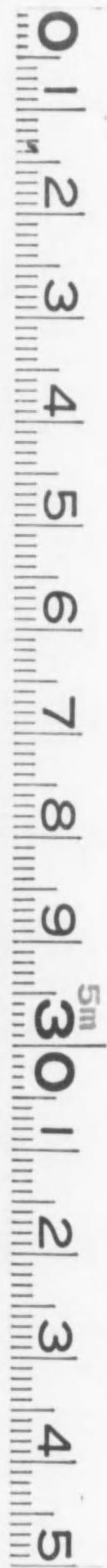


生田葵著
和氣清磨

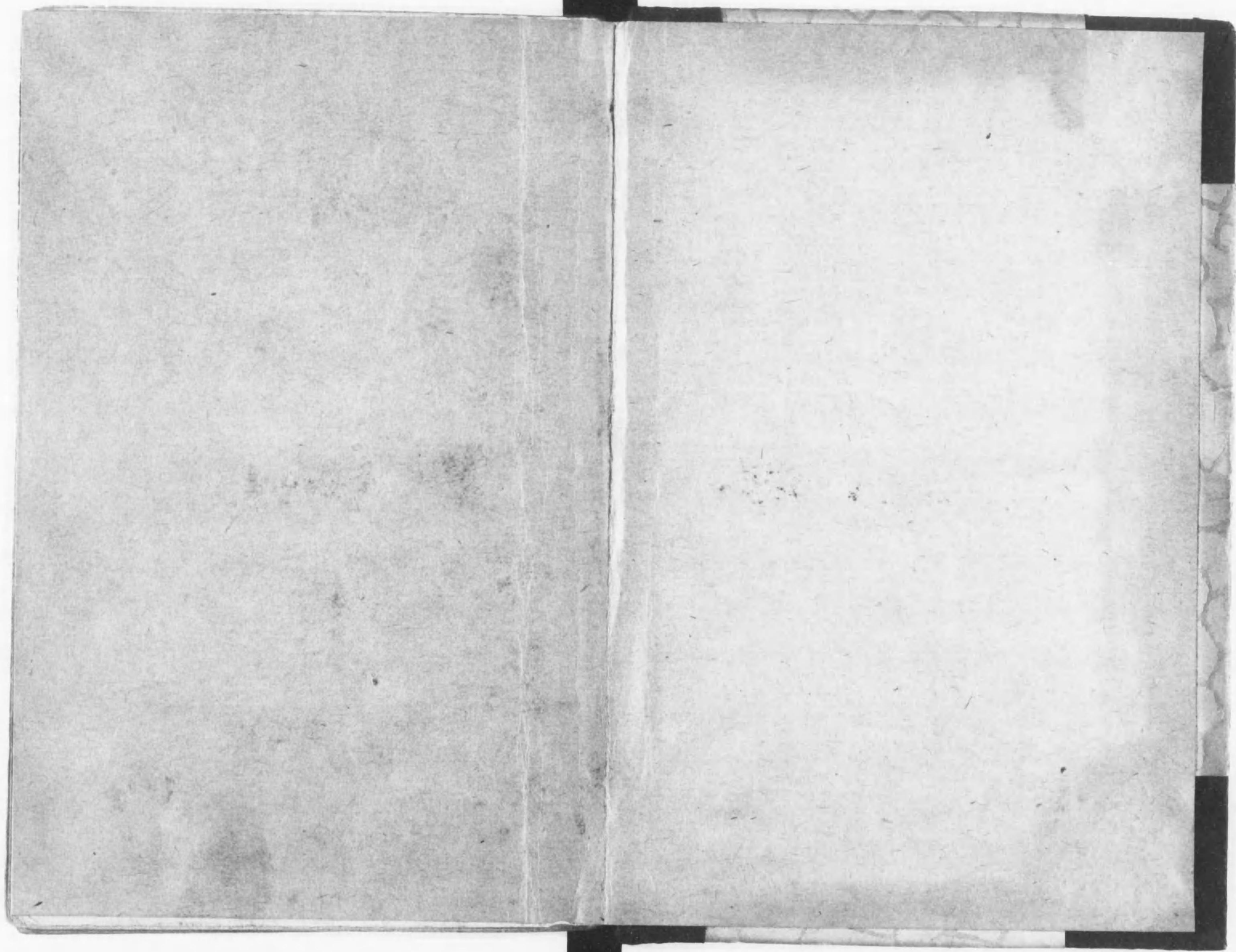
特277
650

特277-650
76W10589



始





289

和



生田葵著

和氣清磨



本
田
林

76W10589



法王祝賀式

一

弓削道鏡が聖上より賜つた赤色の法王服に紫の袈裟を着け終り、侍童が捧げ持つて來た木碗に盛つた白湯を、呼吸息めに飲んでゐると、庭に面した廊下傳ひに、法參議の基眞禪師が這入つて來て、其處へ手をつかへながら、今日の祝賀式に連なる人達は、一人残らず正殿に來集したことを告げた。

「ではお出ましになるのがお宜しうお座いませう」

先刻から道鏡の側に侍して、表と裏と今日の祝賀式の準備に只管心を配つてゐた法臣の圓興僧都がこゝろもち頭を下げて言上した。法王は鷹揚に無言に頷いてから、やをら身體を起上らした。

外の廊下に立並んで、法王が姿を見せるのを待つてゐた式場へ繰込む行列を嚴にする先導の

僧一人、樂僧八人、薰香の振り壺を持つ侍童四人、散華の役を受持つ八人の小童、それに殿りを司る八人の役僧達は、それと心附いて威儀を正した。

法王出場を報知す半鐘の音が、彼方の廊下の端れで、鏘々と鳴り響くにつれて、行列は内房の廊下から表の正殿の方へと動いて行つた。樂僧の奏でる樂の音は、四邊を法境とし、振り壺から立昇る香の烟りは、霞と棚曳いて、蓮華王座のいみじき薫りを漂はせ、散華役の小童の撒く金、銀、紅、白、黄の紙花片は、此世ながらの極樂淨土の姿を現出さすのであつた。

法王服で盛装した豊頬美男の道鏡は、然うした華やかな行列の中に位して、いつもよりは遙に照り映え、宛ら唐の佛畫から脱け出して來た如く麗しく、悠然とした足取りで、正殿へと這入つて往つた。

彼は既に視界内へ顯はれて來た今日の祝賀式に參集した人々の、顔や姿を見やらうとはせず、無心らしい容貌を取繕つて、自分が座す法王椅子の側迄進むと、跪いて先づ正面の壁間に掲げられてある如來像へと、合掌して恭々しく一揖し、それから向直つて衆人に對した。其間に彼を守護り、彼の威容を飾つて來た行列の人数は、順序よく右と左に別れて、定め席に着いた。腹心である法臣の圓興と、法參議の基眞禪師とが、法王椅子に腰を降した彼の直ぐ背後に立

ち並んで侍立した。

式は先着して座してゐた卅人の僧侶が、釋尊出現經を、低い聲で誦し出したのに始つた。道鏡はやはり 聖上から賜つた黄金の法杖を、兩掌の指の間に捧げ持つて、衆僧と共に經文を誦じた。口に經文を唱へながら、彼は自分の方へと眼を注いでゐる殿内の、それ／＼位階に依つて別れた場席に、衣冠を正して扣へてゐる左方の朝臣の群や、色彩鮮な儀式服を着けた僧侶の大勢が靜肅に立並ぶ右方の席と、睥したのであつたが、眞實今迄に覺えたことのない愉快の情が胸に込み上つて來るのを如何にしても壓へ得られなかつた。

彼の座席から數步隔つた左方の朝臣席の一番前面に立つてゐるのは、左大臣の藤原永手と、右大臣の吉備眞備であつた。それに續いて中納言藤原眞柄、參議の藤原清河、藤原繩麿、栗田朝臣道麿と、時の内閣員が立並んでゐる末席に、同じく參議である彼の弟の弓削淨人の姿も見られた。左中辨で河内國守護の代行をしてゐる藤原雄田麿が新進氣鋭の颯爽たる容姿を見せてゐるのに隣つて、惠美押勝誅伐で功勞を立てた藤原藏下麿や日下部子麿、授刀部廣成、佐伯三野等の軍部の輩合が肩を連ねる背後に、今宮中でお覺えの目出度い法均尼の弟の近衛將監藤野和氣眞人清麿が、いつもながらの謹嚴剛毅な容子で、清しい眼を輝かしてゐた。猶後々へと續

く大勢の群臣のいづれもが、云合したやうに恭謙な態度で、恰も彼に對して臣下の禮を取つてゐるかのやうに眺められた。右側の僧侶席の先頭に立つのは、東大寺の良辨大僧都であつた。次には興福寺の良興少僧都が扣えてゐた。唐招提寺、西大寺、大安寺の住職を初め、下野國藥師寺の住職、筑紫の觀世音寺の住職、それから諸國の國分寺の住職、別當、それに準じた尼僧と、今日此儀式に連なるのを、無上の光榮としてゐるらしく、鞠躬如として居流れる中に交つて、最近唐から歸つて來た學問僧の戒融の日拱けした顔も見られた。

「何と云ふ壯嚴な權威を、此殿内に集つた人達に見せてゐるのであらう。臣下の者としてこれ丈けの權威を見せ得られるのは、天下廣しと雖も、自分ばかりなのだ」

道鏡はかうした自己満足の思ひに陶醉して、思はずも口に唱じてゐた經文の聲を低めた時、不圖良辨大僧都の眼に、或る陰影が動くのを發見して、はつと我に回つた。

「良辨大僧都は、自分を批難してゐるのではなからうか、新に法王と稱す位が位人臣を極まると云ふ大政大臣の上に設けられ、その大政大臣をも兼て、法王の椅子に就いた自分を、大僧都は心の中で批難してゐるのではなからうか、若しそれが然うであるのだつたら……」

彼は少し憤つとした氣分になつて、更に凝視すると、もう一世に徳望高き良辨大僧都の瞳は、

常住の穩な澄んだ色に變つてゐた。

彼が今此殿内に集つた人達の中で、一番憚つてゐるのは、良辨大僧都丈けであつた。それは天智天皇の御代から數朝の間を歴仕した高僧とも云はれ、名僧とも云はれた義淵僧正の同じ弟子であつて、義淵僧正の亡くなられた後、彼は四年以前迄は良辨僧都に對して殆ど弟子の禮を取つてゐたからである。外の朝臣であるところの左大臣藤原永手にしても、右大臣吉備眞備にしても、彼は二年以上も其上に立つて大政大臣の職務を取行つて、彼等二人を仰がしめ來たのであるから、何等恐るゝに足りなかつたのであるし、總體に朝臣には身分相應の威光を附けてやつた上、榮華な生活が出来るやうに財物を絶えず與へてやれば、それで服従もし、統御し得られるものであると、高をくゝられたのであるが、良辨僧正は然うはいかなかつた。佛教の心髓を把握する聰明、叡智を有して動かす可からざる信念の上に立ち、物慾にも恬淡であるので、略はすに利を以てすと云つた彼の常套手段ではどうにもならなかつた。

其れのみならず宮中の御覺えは目出度く、帝都の民草は擧つて良辨僧正の徳望に懐き、慕ひ、僧正の指差す方へ向ふ有様だつたので、彼としては出来る丈けその意に逆はぬやう、妥協していくより外に方法のない存在だつたのである。

釋尊出現經はその中に終つたので、いよく彼が殿内の朝臣や法臣から、祝詞を受ける場面を展開せねばならぬやうになつた。

二

道鏡は椅子に腰を降ろしたまゝ、一段と威容を繕ひ、一つ瞬きしてから潤と大きく眼を睜いて殿内を盼した。彼の背後に立つ基眞禪師が動いて、彼に一揖した後、前に進み出ると、性質の皺枯聲で、祝賀参列人へと呼懸けた。

「これから法王御自身のお言葉があります」

言葉少なに然う云つて、基眞法師は更に彼へと一揖した後、以前の位置に回ると、道鏡は口を開いた。

「今度私が 聖上のお思召に依つて、新に設けられた法王の位置に就いた祝賀式に、かうして大勢の方々が集つて下さつたことを、悦しく思ひます。聖上が私を法王の位にお登し下さいましたのは、日本國をば極樂淨土そのまゝの生活し易い御佛の國にしようとお思召し給ふ、有難

いお思召の顯れなのであります。先々代の御代から、諸國に國分寺が設けられ、政治と佛教とを合致せしめて國家を治めて來たのを、此際一層成績が上るやう、政治が整頓するやう、此都に建つ寺々を初め、地方にある大きな寺並びに諸國に建てられた國分寺の働きや職分を統轄する爲に、法王廳は設けられ、法皇の位は設置されたのであります。私は畏き極みの 聖上のお思召を、不肖ながら此身に服膺して、粉骨碎身に盡しますことを、今日此處へ御参集の諸賢達の前に、お盟ひいたします。一言附加へて申上げ置きたいのは、法王廳が設けられ、法臣や法参議の職が出来まして、今後は國を治め、人民を治める法の職分に於て、朝臣の方々と法臣や法参議は頻繁に、接觸せねばならないと思ひますから、それも御諒承を願ひます」

道鏡は他人からいつも賞められてゐる麗しい艶のある聲量で、淀みなく述立てた。彼が斯く述立てゝゐる間に、咳き一つするものもなく、殿内は寂として、彼の聲のみが森嚴そのもの、やうに、いや深山の奥で聞く量の多い溪川の水の音のやうに、四邊を威壓して傳はつていつたのである。彼の儀式の言葉が終つたと知つて、誰も彼もその趣意を腹の底迄も飲込んだ顔付きになつて、禮儀正しく頷いて見せた。

彼は直ぐチラと瞳を良辨大僧都の方へ向けた。大僧都は口元を引緊めたまゝ、平心な容貌をし

てゐた。良興少僧都も同じであつた。學問僧戒融が稍々上氣した面地になつて、我が意を得たりと云はんばかりの愉し氣な眼色を見せてゐた。

朝臣の方へ眼を廻すと、左大臣藤原永手も、右大臣の吉備眞備も、了然りと彼の言葉を快く受納したかのやうに、落附き拂ひ、敬虔な容子をさへ示してゐた。若し朝臣にしる、僧侶にしる、彼の言葉に對して反抗の態度なり拒否の容子を見せた者があつたなら、此場では見逃すにしても、後で手嚴しい報仇をしてやらうと、橋慢不遜な強い決心を持つてゐた彼ではあつたが、兎も角も表面に顯はれた和やかさは、彼に取つては満足であつた。

良辨大僧都が一足前に進み出て、彼へと慈悲心に満ちた温顔を向けて一禮し、

「我が日本國に法王の位が新に設けられ、大政大臣弓削道鏡禪師が、其の職にお就きになつたのは、佛法がますます榮えて往く證據でありまして誠に目出度いこととあります。道鏡禪師は必ずやその職分を光輝あるものと爲し給ひ、我が國に平和と榮光を齎し給ふことと存じます。僧侶一同を代表いたしまして、此言葉を法王へ捧げます」

良辨大僧都はかうした祝賀辭を述べ終ると、手にした念珠を上げ、一揉みして彼を拜した。彼は手にした法杖を上げてそれに應へた。

大僧都が席へ戻ると、左大臣藤原永手が代つて、つと前へ進み出た。永手は漸く五十歳を越えたばかりではあるが、痛風の惱みの爲に、軽く跛足を引くので、かう云ふ場合態度が少しばかり醜くかつた。彼へと恭く一禮してから、

「佛法の行はるゝ國に、法の王が無かつたのは、國法の不備と云はねばなりません。それを畏くもお心附き遊ばされた當御代至尊に於かせられましたは、新に法王の職を設け給ひ、大政大臣弓削道鏡禪師をその位にお据ゑ遊ばされましたのは、誠に以て政治の機宜に適したことであつて、萬民共に悦び合ひ、此後はいや増しに國は榮え、治ることと信じます。必ずや大政大臣道鏡禪師は、その職責を果して、大御心の存するところを、萬民に輝かし給ふと確信いたします。謹んで法王へと内閣を代表して御祝詞を申し上げます」

聲量が低いので、殿内へ徹し兼たが、それでも道鏡の耳へははつきりと聽取られた。左大臣はそんなことを氣にしたかして、冬の最中の十二月初旬であるのに、額へと汗を湧かしてゐた。永手が退くと、今年七十二歳になる緒頼豐頼の右大臣吉備眞備が動き、法王の椅子に直面すると、それにつれて會衆一同は動き、同じく道鏡の顔を仰ぎ見て、眞備が頭を下げて禮を行つたのに習ひ、恭しく禮拜した。

祝賀式はそれで終り、着席僧の讀經の中に法王は退席する順序になつてゐたので、彼はその心算で身體を動かしかけると、會衆の中から、

「しばらくお待ちを願ひます」

と、聲を懸けて、内閣員の次の席から突如として前に進み出た者があつた。彼は初め會衆一同の眼は期せずして其の方へ向けられたが、それは由義宮御造營主任で河内守を代行してゐる藤原雄田麿であつた。

三

左中辨侍従で河内守を代行する藤原雄田麿は、藤原宇合の第八子で、まだ卅歳をやつと越えたばかりであつたが、才氣喚發の手腕家であるとの聞えが、世上に高かつた。道鏡にしてもかう云ふ男を平生の中に手馴附けて置くのが可いと思ひから、自己の出身地の河内國に權力を持たしたのであつて、現今御造營最中の由義行宮の事務を統轄せしめ、それから自己の出世の根元になつた弓削寺をも、守護せしめてゐるのであつた。

道鏡は屹となつて進み出た雄田麿へと眼を注ぐと、それを受けた雄田麿は先づ異心のない恭しい禮を施してから、

「法王の御出身地である河内國の人民は、一世の徳望を集め給ふ法王と、同じ國土に生れたのを名譽とも、誇りとも思ひ、今朝突然私の手許迄、法王の昭徳表を持参してまゐりました。前以て申上げる時間もなく、それを披露いたさないのは、河内國守護の代行をしてゐる私の職責を盡さないことになりますので、此席で披露させて頂きます」

清やかな聲で述べ終ると、委細かまはず懐中へと手をやり、一通の書狀を取出すと、繰りひろげて朗々たる聲を張り上げ讀出した。書狀の文面は昭徳表と名づけられた通り、徹頭徹尾道鏡を賞讃した言葉の連続であつた。彼を御佛の再來であるとも書かれてあつた。慈悲の權化であるとも書かれてあつた。彼の如き高德深才の禪師が朝廷に大政大臣としてお在したればこそ、山科寺の臨寺の毘沙開天尊像の胎内から、世にも尊き佛舍利が発見されたのであるとも書いてあつた。それ故に畏くも詔書が天下に下り、道鏡禪師が法王の位に就かせられたのは、正しく萬民の願ひの顯れで、限りなき大御代は彌榮えに榮えんと結ばれてあつた。敬白と雄田麿は昭徳表を讀み終つた。

道鏡は眼を睜り、耳を聳立て、聽いてゐたが、顔の線を緩める程のさもしい容體は見せなかつた。しかし心の中では雄田鷹をば、場合に取つて氣の利いたことを爲る男であると、嬉しく思つたのであるし、今日の祝賀式に一段の榮を添へてくれたのであると思ひもして、我知らず微笑を唇邊に浮べ懸けたが、會衆の前に自分を安つぽくしてはならないと、思回して壓へて了つたのである。然うして背後に立つ法參議の基眞禪師に、雄田鷹の掌から昭徳表を受取れと、眼で指圖した。

基眞禪師は進み出て、昭徳表を受取つたが、それと同時に道鏡は椅子から立上り、會衆一同へ目禮を濟すと、來た時と同じやうに正面の如來像へと一揖してから、徐に歩き出した。著席僧達は既に次の讀經を始め出してゐたし、左右に別れて扣へてゐた行列組は、少しの混雜もなく、順序よく動いて、樂僧、散華、薰香と法王の威儀を飽迄も調へたのを従へながら、しづしづと道鏡は内房の方へと歸つて行くのを、祝賀式に連なつた會衆一同は謹嚴に目送した。

行列の後端が殿の外へ出て了つたと見定めると、殿内の人達はざわめき出したが、まだ大臣や大僧都がゐるので、無暗に動かうとはしなかつた。大臣や内閣員の一行と、良辨大僧都や良興少僧都を始め、大寺院の住職等の一行とが、二列になつて入口の方へと歩み、正殿の外へ出

て往つて了ふと、初めて其處に蘇生つたやうな嘯き聲が起り、可なり足音を亂して思ひ／＼に入口の方へと流れ出た。出口には法王廳の役人が扣へてゐて、官位につれてそれ／＼の今日を記念する贈物や、紅白餅などを、一人／＼に残らず手渡すのであつた。

道鏡法王は内房の自身の居間へと歸り着くと、法杖を床の間に置かれた臺の上に置き、侍童を手傳はして儀式の法王服を脱ぎ初めた。然うして寛ろいだ平常服に着換へて其處に座してゐると、弟の弓削淨人が這入つて來た。

「お兄上さま、何の滞りもなく、日出度く祝賀式が済みましてお祝ひいたします」

淨人は先づ祝辭を述べて、兄弟とは思へない町重さを見せた禮を行うた。

「有難う。しかしお前は どうして大臣達と一所に内閣へ歸つて往かなかつたのだ。夕方には私の催す宴會に、お前も出席するのだし、それ迄に内閣で會議があるやうに聽いてゐたが」

道鏡は上機嫌だつたし、然うした言葉の中に、肉身に對する優しい感情が漂うてゐた。

「はい、會議は午後延びたのです。それよりも私は至急お兄様のお耳に入れて置かねばならない重要な事件があるので、かうしてお伺ひいたしましたのです」

「重要な事件……」

道鏡は餘りに弟の淨人が眞剣な容貌付きになつてゐるので、些か眉を潜めながら聞回へした。
「はい、全く重要な大事件です。どうぞお人拂ひを願ひます」

淨人は他へ聽かるゝのを恐れるやうに、聲を潜めてゐた。

「法臣圓興、法參議基眞禪師もか」

圓興と基眞禪師が次の室で、何か指圖して侍童達に立働かさしてゐたので、彼は念を押すやうに訊いた。

「はい。然うです。圓興大僧都も基眞禪師もです」

彼は進まぬ態ながらも領いて、圓興と基眞とに、座から遠距るやうに命じた。其處に全く人影が見えなくなつて了ふと、淨人は一膝乗り出し、聲を低めて語りだした。

「お兄上さま、基眞禪師が毘沙門像の胎内から發見け出したと云ふあの佛舍利が、全くの偽物で、作り物であると申す訴人が、私の許へ顯はれて参つたのです」

猥りにものに動ぜぬ道鏡ではあつたが、流石に此言葉には驚いたらしく、ビクリとして顔の色を變へた。しかしそれも一瞬で直ぐもとの平然たる容子に回つて、

「その訴人した男は、どんな態の男なのだ。此都の者か、それとも他國の者か」

聲は少しも亂れてゐなかつた。

「他國者です。昨夜私がいともよりは早く寢所へ這入つて行かうとしてゐると、國家の重大事件で是非直々お目に懸りたいと申して参つた者があると、用人が取次いで参つたのです。人相の良くない、賤しい身柄の男だとも申しましたが、夜陰を撰んで参り、何か理由がありさうに思ひましたから、兎に角逢つて見たのです。初め其男は少し云ひ淀みましたが、聽てのこと自分分は、基眞禪師が山科寺にゐる頃に使つてゐた馬鷹と云ふ者の友達の犬鷹と申す者だと名乗つた上、今東大寺に納つてゐる佛舍利は眞赤な偽物で、馬鷹の指圖で自分が、紀州の海から拾つて來た貝を原料として、丹念に工作した品物であると、何様國家の一大事件をことも無げに話すのでした」

「淨人、其方はそんな訴へをして來た者を、どうした。放して歸して了つたのか」

道鏡は弟の言葉を遮つて、稍急ぎ込んで訊いた。

「いえ、このやうなことが若し世人に流布せられたならば、それこそ人心が惑亂すると存じましたから、その儘館の中に引留めて置きました」

淨人はしたり顔に云つて、兄の面色をうかゞつた。

「只引留めて置いた丈けなのか。通けられたならどうする。何故引縛つて牢舎入りをさして置かない」

「御心配お無用でお座います。其處に氣の注かぬ私ではありません。直ぐと引縛つて牢舎へ入れて置くやうにいたしました」

然うと聞くと、道鏡は安らかな眼色になつて、大きく頷いて見せた。

「お兄上には、あの佛舍利が贋せ物であるのを、初めからお存知なのでしようか」

「痴けたことを申すな。何で知らう。聴くのは今が初めてだ。一體訴人して來た其奴に、どんな目的があるんだ。贋せ物を製造へたとすれば、事柄が明みに出る目になると、自身も罪を受けねばならないぢやないか、それをお前は糺したか、そればかりではない、訴へ出るのならそれ／＼の道があるのに、特に其方の宅を撰び、しかも夜陰に來るなど、お前は然うした理由をも糺したか」

「訊きました。犬麿の申しまするのには、基眞禪師は伊勢生れの馬麿一人で製造へ上げたものだとはかり、思込んでゐるのださうで御座います。それが腹立たしいので、どうかして基眞禪師にお目に懸つて詳しいお話をし、大方今度の法王様のお祝ひで、基眞禪師には澤山の御褒美が出たでしょうから、その分前に預りたいと、三日程續けて基眞禪師の宅へ足を運んでも、馬麿が遮ぎつて逢はさず、果ては馬麿は犬麿を誘き出して殺さうとしたのださうで御座います。危いところを通れると、もう何としても辛抱が出來ず、最初は法王様にお目通りを願つて訴へやうと思つたのだが、それは何としても難かしいので、種々と思案した擧句に、私の許へ參つたのだと、話の筋道は立つてゐました。之も犬麿が申したんですが、伊勢生れの馬麿は、今此法王廳に移れてゐるんださうです。お兄上にはお存知でしょうか」

「うむ。法參議基眞禪師が、用人として召使つてゐる。私にも目を懸けてやつてくれいと云つて、紹介したことがある」

道鏡はそれなり言葉を切つて、何事をか考へるかのやうに挹鬱な表情を見せて眼をつぶつた。

「基眞禪師を此處へお呼びになつて、お聴き糺しになつては如何でしょう」

淨人は一かどの智恵を藉すかのやうな云振りだつた。

「莫迦な」

道鏡は眼を大きく睜いて、一言の下にその言葉を蹴った。

「淨人考へて見い。佛舍利は贋せ物であつたにしても、今更それを偽せ物であると、證據立てたところで何になる。基眞禪師が献上したその佛舍利に對して、畏くも詔勅が下り、私は其の爲に法王となつたのである」

其方も聞傳へて知つてゐやう。孝徳天皇の御代大化五年二月に穴戸國から白雉を献じた者があつて、奇瑞と賞でられ、白雉と改元せられて大赦が行はれた。それ以來國に奇瑞が顯はれると國民は、悦び競つて朝廷へ献納するやうになり、元正天皇の御代には兩眼の赤い白龜を献納するものがあつて、翌年聖武天皇御即位の日に、神龜と改元せらるゝ基ひを爲した。それから五年を経た同じ御代に長さ五寸三分、廣さ四寸五分の龜の背に「夫王貴平知百年」と文字の顯はれてあるのを献納した者があつて、瑞祥として迎へられ、天平と改元あつて、種々の行事が執行はれた。近くは天平勝寶の年號が天平寶字と改元せられたのは、主上の御寢殿の承塵に「天下大平」の文字が自然と顯はれ、續いて「標知天皇命百年」との文字が蠶兒の背に顯はれた奇瑞に依つてゝある。

大和守大伴稻公は天平寶字二年二月に、城下郡大神山に不思議な藤が出来、その根には「王大則竝天下人此内任太平臣守曼命」の十六字が、蟲に啄まれて自ら現はれてゐると奏上し奉つたので、博士に下して讀ましめ、郡司には位一級を加へ、貢瑞人には叙位賜物の恩典があつた。之等の事柄に就て、當時何人かゞ、その眞偽に就て、やかましく詮議立てしたものがあつたか。一つとして無かつたのは、朝に立つ施政家が奇瑞を奇瑞として、國民の心を把握し、治國太平の政事の具に供したからである。基眞禪師の佛舍利にしても同じこと、偽物を造つて眞物であるとして献上したのは憎む可き處爲ではあるが、その心根の奥には御代を謳歌し、以て民心を依らしめようとしたのであつて、假令それに依て恩賞に預からんとする賤しい思ひがあつたにしても、今となつては功勞の方が大きく、深く咎むることは出来ない。それよりも眞物として東大寺に納められ、諸人に拜觀せしめて、由々しく御治世に役立つてゐるものを、自己の慾心の爲に贋せ物であると名乗り出た其奴こそ、猥りに人心を惑亂し、國家の和平を搔き亂さんとする徒者であつて、罪は正しく死に處す可きである。

淨人其方は何と考へる。若し其奴が基眞禪師が朝廷へ献上した當座、佛舍利に就て何事も定まらぬ以前に訴へ出たならば、多少は國家のお爲になつたではあらうが、最早遅い」

道鏡の言葉は雄辯と思はるゝ程に、滑にその唇からすべり出で、眼には一種の情熱とも思はるゝ強い輝きが見られたが、豊かな白い頬には冷たい無慈悲な陰影が漂うてゐた。

五

「仰有る通りで御座います。能く解りました」

弓削浄人は口に溜つた唾を、ゴクリと音を立て、飲込み、理に伏した如く神妙な容貌付きになつたが、兄道鏡を凝と瞞る眼に、次第に涙を湧上らし、溢れて頬に一と筋傳はらした。

「何を泣く。何が悲しいんだ」

法王は不機嫌な顔になつて、叱るやうに云つた。

「濟みません。今日のやうなお目出度い日に、涙をお見せ申すなど、濟まないと存じますが、私は心寂く悲くなつてまゐりました。慈悲の相その儘でお有りにならねばならない法王御自身の口から、悪人であるとは云ひ條、犬鷹を殺せとばかりのお言葉は、私には此後お身上に、何か凶事が起る前兆ではないかしらと、案じられて參つたので御座います」

「何を莫迦な。取越し苦勞も程にせい」

弟の言葉が終るか終らない中に、道鏡は怒鳴りつけた。怒鳴りつけはしたが再び口を開いて語り出した言葉調子は柔かゝつた。

「お前は軍人出でありながら、氣が弱い。悪人一人を誅すること、そのやうに心怯えるやうな根性骨では、之から先き大きな責任を取る地位に立たれないぞ。今お前は私のお蔭で正三位の位に昇り、參議の職を忝うしてゐるのではないか、私は此上にもお前を中納言ともなし、大納言の地位に登してやらうとも思つてゐる。お前ばかりではない、お前の息子の廣方、秋鷹、鹽鷹、それに娘の美努久賣、乙美努久賣と、總て現在の官位を此上にも昇ぼしてやらうと思つてゐる。弓削一族の榮えの爲に、私は姉の廣津を初め他の姉や、姉の娘の東女にも官位を頂けるやうにしてやつた。私が私の血縁一同に對して、どんな心地であるかは、お前には解つてゐる筈ではないか。それであるのに私が命令ける高が下人の生命一つ取るのに、涙を落すお前の氣が知れぬ。いや私はまだお前には命令けてはゐない。しかし命令けずとも、私には害になる悪人と知つたなら、進んで處理するのが弟としてお前の當然の務めであらう」

其處迄云ふと道鏡はきつと口籠つたが、浄人が無言で大きく頷くのを見ると、直ぐ先へと言

葉を續けた。

「此間からお前に遇つたなら云聞かしてやらうと思つてゐたが、序でだから話さう。美努久賣姫と乙美努久賣姫とがつれ立つて、私が法王に昇された翌日、此處へ祝ひ言葉を述べに参つた時、姉姫は妹姫には内密で、お前は私が法王に昇つたのを、藤原家の人達から一層妬み嫉みを受けやしないかと、心遣ひの度を過して恐ろしがつてゐると告げて往つた。お前が美努久賣姫の口を通じて、私に云はしめたのかもしれないが、淨人、他人の嫉みが恐ろしくて何が出来る」

「いや、私が姉嬢に云はしめたのではありません。姉嬢が一了見で申上げたのださうで、歸つて来て遂一私に語り、お兄上からお叱りを受けたと申して居りました。それでも私は、お兄上はもつと藤原一族の人達に、氣をお付けにならねばならないと、只今でも信じて居ります。廿年以前の玄昉僧正のことなど考へますと、いつ何時どんな隠謀が飛出すやらと、それが氣遣ひでなりません」

「玄昉僧正は良辨大僧都にも私にも兄弟子、宮中一お覺えの目出度かつたのを藤原一族の讒言で筑紫の觀世音造營を董督しろとの名目で左遷され、其の開眼の日に當つて、藤原廣嗣の死靈に取殺されたなどと云觸らされて、非業な最期を遂げられた。何れは藤原一族の隠謀の手に

罹られたのは間違ひのない事實だ。それは聖武天皇の御代、今は世が變つてゐる。藤原一族にしても、何人にしても、指一本私に觸れることは出来ない。殊に私は玄昉僧正のやうに、藤原氏一族を侮りも、壓へ付けやうともせぬ。藤原一族は門地ばかりか、政治を行ふ才幹は勝れてゐるので、私には猫のやうに溫柔しい永手は左大臣となつてゐる。才氣のある若い雄田鷹すら左中辨侍従で由義宮御造營主任となり、その上に河内國守護代行の役さへ持つてゐる。二人共に私が推舉したのだ。それ故に腹心を披瀝して、私の云ふことは能く聽いてくれてゐる。お前はそれは面従で、内心は解るものでないと云ひたいのだらう。しかし藤原一族は玄昉僧正をしりぞけたので、了然り民心を失し、續いて押勝の謀叛で宮中の御信任を失ひ、當分蟄伏せねばならないのだ。然うしたことに心の至らない私ではない。お前は安心してゐるが、いゝ」

「はい。然うした處へお心を配つてお出でになれば、それでよろしいので御座ります。何處何處迄も御油斷のないやうにお願いいたします」

「お前が然うして、私の身上を心配してくれるのは、弟であればこそと忝く思ふ。私は唯恩師で有つた義淵僧正や、無慙な最期を遂げられた玄昉兄弟子の志を繼いで、此上にも佛法を擁護し、益々榮えるやうにしたいのが念願である。藤原氏一族の欲がるのは、強い權力一つのみで、

佛法と結びついてゐるのは、單に方便に過ぎないんだ。私達僧侶は、治國太平は佛法に依てのみ得られるので、億兆民衆の心を國土の上に和げ、佛心に濟度する眞理として佛法を信奉してゐる。其故に私は大政大臣になり、法王ともなつて、私達僧侶の望む政事を行はうとしてゐるんだ。良辨大僧都にしても、其他の大寺の僧侶にしても、私の然うした心地を知つてゐてくれるので、批難する者は一人もない。皆心から味方になつてゐてくれる。此一事を特にお前に話して置く。外へ往つて何人にも話してくれ。

それから今一つお前を安心さす爲に云つて置かう。右大臣吉備眞備のことだ。吉備眞備は玄昉僧正とは唐へも一所に往き、特別の親友であつた。藤原氏一族の爲に玄昉僧正が滅亡んだのを、どんなに嘆いたであらう。それから後藤原氏一族をどう云ふ態に考へ、見てゐるかは、お前にも解つてゐるであらう。私が推舉して右大臣にしたのだ。それで私と吉備眞備右大臣とは格別な仲善しぢやないか」

然う云ひ終ると、初めて道鏡の頬に快心の微笑が浮んだのであつた。淨人にはまだ云足りない思ひが數々ありはしたが、餘りにも兄が自信に傲り切つた容子を見せてゐるので、この上言葉を盡したなら、徒に心地悪くさすばかりであらう。又の機會にと思回へして、僅に、

「はい、よう委細心得ました」

と、大きく頷くと、歸途につく爲め、慇懃な禮を行つた。

和氣清麿の邸宅

一

法王就任祝賀式の參列を済して、表の道路へ歩み出た和氣清麿の心は、今日天平神護二年十二月初旬の小春日に温く空は晴れて、雲影一つ見られない清々しきとは、大凡そ裏側の愜々として樂まない思ひに閉されてゐた。其邊りには同じやうに法王西殿から退出して來た百官有司が右往左往し、その中には親しい人の顔も見られて、幾度となく禮をかはしたが、そんなことで紛れはしなかつた。寸刻も早く邸宅へ歸つて、自分の居間へ立籠り、靜に考へて見たいと思ひで胸は一杯だつた。

「法王とあるからは、一世に徳望の高い、假令へば前朝時代の義淵僧正とか、行基僧正とか云

ふやうな人でなくてはならない。今此寧樂の都では、高位高官の人も、下庶民に至る迄も、道鏡禪師を幸運の人であるとは口にするも、それと同時に唇の外に出すのを恐るゝ批難の色を眼に見せるのである。その道鏡禪師が法王に……」

清鷹は顔を擧げてゐやうと思ひながらも、自づと憂國の情に垂頭れて来て、足許の先きを凝視するやうになる姿勢を、どうすることも出来なかつた。然うして頭腦の中には、今眼にして来た法王の前に昂然と肩を聳かし得ない大臣初め百官、僧職にある大僧都、少僧都の姿が腫の奥に描き出さるゝのであつた。

「清鷹殿、お家へお歸りか、御一所に参らう」

背後から聲を懸けて近寄つて来たのは、自分よりは遙に年上な路真人豊永であつた。

「豊永殿、先刻お殿の中で、距つた處にお顔は見ましたが、お挨拶もせずに失禮しました。今日の祝賀式、さて／＼前代未聞、盛大なものでした」

「うむ。大臣初め百官、大僧都や少僧都が、餌に有り附かうとする犬のやうに、尾を振る姿は、誠に盛大で見事なものでお座つた。定めし道鏡法王は満足してお出でになつたことであらう」

四邊憚らぬ聲高で、唇邊には皮肉な微笑を浮べてゐた。清鷹には餘りにも不謹慎な言葉だと

感ぜられ、思はずはつとして、周圍へ眼を配つたが、幸ひ築土の蔭で、人影は聲の届かぬ距つた處に見えるばかり、自分の従者と豊永の従者は、笑ひながら挨拶を交してゐたので、それにも耳に入らなかつたのが確められた。

「相變らずの飄輕なものゝ云ひやう、だがそんな皮肉を、他人に聽かれたなら、お身上の障りとならう。誰聞くまいものでもない往來端での話としては、たしなみがなさ過ぎる。慎みなされたが可い」

清鷹は心安だてに軽く非難するやうに云つたが、それを和ます微笑は忘れなかつた。しかし心の中では眉を潜むる心地になつてゐた。

路真人豊永は宮中へ微官として出仕してゐるが、漢學の學殖は深く、漢詩の創作には巧妙であつて、贊を拂つて門下生となるものは少くなく、嘗ては道鏡禪師すらも師と仰いで然うした方面の教へを受けたことすらあるのである。それにもかゝはらず深く用ゐられないのは、全く狷介不羈な性質のいたすところであつて、近頃は徒に他を刺諷して、自ら快となす癖が生じてゐた。

「清鷹殿のいつに變らぬ慎重な態度振り、豊永感心いたしますが、今日の祝賀式に連なつた人

達の中で、心ある者は必ず私が今云つた言葉と同じ考へを持つてゐたに違無いと思ひます。然うお思ひにならぬか」

「その話はもう止ませう。お互に仕官してゐる身には、よしんば心で考へてゐても、口にすべき事柄ではないと信じます。卑怯でなく、慎みなのです」

「それではこの話は止すことにして、近頃お前様は、お姉上の法均尼殿にお逢ひでしたか、お姉上は基眞法師が献上した佛舍利をば、殊の外崇信せられ、此國に佛舍利が顯はれたのは御代が治まる證據の瑞祥だと、彌勒菩薩が再來でもしたかのやうに歡喜して奏上なされたので、その爲に大政大臣道鏡禪師は法王に昇られたのであると、専ら世上で噂して居ります。それに就てお前様は、お姉上法均尼殿から何かお話を聞いてはお出でになりませぬか」

「姉とは暫時逢ひませぬ、職務が忙しいので、此間中からは是非一度逢はうと思ひながら、延びのびになつてゐます。姉とても忙しい身上なので、遠慮する心地も私にあるのです」

「女性の身であつて、宮中第一の御信任を忝うしてゐらるゝお姉上、定めしお忙しいことであらうと察せられます。しかしそれ丈に寧樂の都に住む程の者は、羨望の眼を向け、お役目大切に務められるやうに願つてゐます。お姉上は押勝の亂で、家を焼かれた上、兩親を亡くした憐

れな八十三人の孤兒を引取つてお養ひになつた、佛の再來のやうな慈悲深いお方、私はお姉上葛木戸主殿の妻女としてお出でになつた頃からの知合ひなので、人一倍法均尼殿が、他人から譽められるのを悦びます。どうぞ今度お逢ひの節は、くれぐれもお勤め大事に、お自愛あるやうにと、私が申して居つたとお傳へ下され」

「必ず申傳へます」

「餘り喋つて行過ぎやうとした。私の宅へは此小路を曲つて行かねばならない。では清麿殿、其中又お目に懸りませう。老人は兎角に口が悪い。口敷を餘計に引き過ぎる悪く思はれるな」

豊永は右へ曲つて往つて、清麿は一人となつた。豊永の口裏から考へて、姉の法均尼に對して飽足らぬ思ひを抱いてゐるらしいのは、想像せられた。世上の噂として豊永が話した佛舍利への姉の狂信は事實であるが、其れから捲起つた顯象に就ては、必ずしも姉一人に責任がある譯のものでない。姉の言動が多分の影響を齎したことは認めはするが、佛舍利の鑑定には良辨大僧都を初め良興少僧都や其他の僧侶が當つたのであるし、其後のことは道鏡大政大臣に藤原永手左大臣や吉備眞備右大臣が、膝を交へて協議したのである。それを姉の法均尼に最も責任のあるやうに云ふのは、世上の噂としても、路真人豊永の言草は間違つてゐると、清麿には考

へられた。

一體豊永は漢學に秀でゝゐるだけに、儒學の思想を多分に持合し、全智全能のものとして今の世に信奉せらるゝ佛の教義に就て、少なからざる疑惑を抱いてゐるのを、清麿は能う知つてゐた。併し唐から歸朝した學問僧や漢學者達が、言合はしたやうに鬼もすれば堯舜の事蹟を述べて、尊い高御位も、堯舜の如くに御代變りしても可いやうな、唐にかぶれ切つた言論を吐くには、強い反對態度を取り、

「皇國は何であらうと、日の御子の御子孫を上仰がなくては治まるものでない。萬世一系は動るぎなき國の掟である」

と、神祇を重んずる國學者が述べる所説と、所信を同じくしてゐるので、その點で清麿は豊永と共鳴してゐるのである。垂仁天皇の皇子稚鐸石別命、稚鐸石別命の王子が弟彦王、弟彦王から十一代目の子孫たる清麿には、姉の法均尼とは違つて、御佛よりも神祇を重ずる傾向があつたのである。

「豊永は狷介不羈の人ではあるが、それだけに曲つたことの嫌いな、物事に隠し立ての出來ない正直者である。姉に對して或る一部分の智識階級や民間人の中に、非難の思ひを抱いてゐる

者があるのを、明白に私に告げるのは、豊永であればこそ爲し得られるのである。天の聲として聞いて置いて、折があつたなら姉に言傳へて置かう、恐らく姉は意外の面地をして、不愉快に思ひなさるであらうが」

清麿は然うと思ひを定めると、足早になつて歩き出した。大路を眞直ぐに、小路を二つ程越へて右へ曲つた町に、築土を圍らした一構へが其邸宅であつた。清麿は門を這入つて、館内への入口に立つと、氣配でそれと知つたのであらう、閉されてあつた扉は内部から開かれて、姿を見せたのは清麿の妻の嗣子であつた。嗣子の背後には廣世、眞綱、仲世の三人の男子達が顔を並べてゐた。

「お歸りなさりませ」

嗣子の迎へ言葉に續いて、三人の子供達も順々に禮儀正しい迎へ言葉を述べた。

二

清麿は奥の廣間へ通ると、先づ其處に設けられてある祭壇、――それは、繩を張つて天照皇

大神を祭つた家の中で一番神聖な場所であつた。其前に跪いて恭く禮拜し、續いて其れに隣つた觀世音を祭祀つたお厨子に合掌し、更に續き合つた場所に置かれた數多くの祖先の靈位を拜した後、妻が差出してくれた圓座の上へ、どつかと座した。然うして腰に佩びてゐる劍を解いて、父を追つて廣間の中へ這入つて來た三人の子供の中の長男の廣世に手渡した。やつと十歳になつたばかりの廣世は、重さうに受取ると、いつも劍を置かれる場所へ運んで、其處に在る臺の上へと置いた。其處へ婢が木椀に白湯を注いだのを運んで來たので、嗣子が受取つて良人へと捧げた。

「定めし今日の祝賀式は華やかでもあり、嚴かでも御座りましたらうな」

良人が一口白湯を飲んで、木椀を下に置いたので、嗣子は訊いた。

「うむ。嚴なもので、——何事もなく滞りなく濟んだ。御代太平のしるし、先はお目出度いとであつた」

「定めし法王様はお満足でお座いましたらう。貴方様お顔の色が、お悪いやうですが、お氣分が悪いのではありませんか、其れともお出先きで何かあつたのではお座いませぬか」

「氣分も悪くない。出先きで何が起らう」

清鷹は妻の案じ顔に、些つと困つた思ひをしたが、恰度折善く婢が従者の持參して歸つた法王廳からの贈物を手にして、廣間の中へ這入つて來たので、それへと眼を注ぎ、

「嗣子、法王からの賜り物だ。神前へは淨めのものでないから避けて、いつものやうに佛前や御先祖の御位牌の前に供へ、それから後を、子供達に與へるがい」

嗣子は立上つて婢の持つて來たのを受取ると、包を開けて、佛前と祖先の靈を祭祀られた前へと供へてゐる間に、清鷹は其處に座してゐる子供達へと話懸けた。

「廣世其方はお父様の留守中何をしてゐた。お稽古事を勵んでゐたか」

「はい、私は今日は法王様のお祝ひごとで、お師匠様のお教授がお休みでしたから、昨日教へられました日本書紀の素讀をして居りました」

「然うか、然うして眞綱は何をしてゐた」

「私はお手習ひをして居りました。知らない字があつたので、母上から教はりました」

眞綱は兄より二歳年下の八歳であつた。

「それから仲世は何をしてゐた。いつもの通りいたづら遊びをして、お母様を困らしてゐたのであらう」

「いえ、いたづらなどはいたしません、繪本を見て、母上からお話を聞いてみました」
六歳の仲世は笑ひながら答へて、同意を得たいやうに母親の方を見た。

「然うであつたか、それでは三人共に、よう留守をしてゐたのだな。その御褒美に、今お供へしたお餅を、後で母様から貰ふがい。お父様は之から御用があるから、三人共にお前達の部屋へ往つて勉強なり、遊びなりするがい。」

それで三人の子供は父に一禮して、自分達の部屋へ下つて往つた。

「嗣子、留守中何事もなかつたか、其處に置かれてあるのは何ぢや」

清麿は彫刻物や其他の貴重な部屋飾り品を置く壁際の板敷に、嵩高く布帛を懸けた下から、白木臺の脚がのぞめてゐるのを眼にすると、妻に訊いた。

「申遅れて済みません。お留守中に御所のお姉上様から、お手紙に添へてお使ひに持たせてお寄越しになつたものでお座います」

然う云ひながら嗣子は、その嵩高な布帛の懸つた白木臺を持出して来て、良人の前に置いた。布帛の上には姉法均尼からの一通の封状がのつてゐた。

清麿は手早くその封状を取上げ、上包を披開いて中の書状を讀出した。

清麿が暫時訪問して来てくれないので、いろ／＼話したい事柄もあつて、待詫びてゐる旨が先づ書かれてあつた。嗣子が甥達を連れて逢ひに来るのも遠退いてゐるので、近い中に折を見て、甥達を連れて嗣子にも来てくれるやうにと、伯母心の優しさが浸み出た文字が、その後に関連なつてゐた。贈物とした呉服物は、法王様が今度のお就任のお祝ひとして自分に下されたものであるが、尼の身としては、身につけやうもないので、嗣子の着料にしてくれるやう、それから甥達の着料にと、兼々心懸けて買調へて置いたものをも添へて置く。お菓子や餅はやはり法王様からの頂戴物で、とても自分の許では食べきれないから、お裾分けをすると、弟の家を思ふ姉の温い情愛が、墨色濃く巧な文字で書き綴られてあつた。書状の文字は猶續くのである。此間に嗣子は贈物の上を蔽ふた布帛を取除いたので、清麿は書状から些つと眼を放して、其方へと踵を向けた。可なり大きな白木臺の上の一方には、文面通りに數多くの丸餅や、紙包み

の菓子積重ねられ、一方には呉服物が四巻、その一つづつに嗣子殿、廣世殿と、各自の名が記されてあるのが、新しい呉服物の匂ひを發散して載せられてあつた。

「姉上のいつに變らぬ手厚いお心盡し、此家は幸福だ、嗣子、その嗣子殿と書いてあるのは、姉上がお前にくだされたのだ。それから子供達一人づゝにも」

「有難いことでお座ります。お姉様からはいつも頂いてばかり、ほんにお禮の申上げやうも御座りませぬ」

妻の言葉を聞流して、清麿は書狀の先へと読み進んでいつたが、読み進むにつれて、今迄の和かな表情は少しづつ、搔消えて、硬ばつた頬の肉の動きが見らるゝやうになつた。

法王様は今度法王にお就任になつたのを、殊の外お満足にお思召して、宮中にお仕へする私達女性一同へ、數々お優しい仰せ言がありました。取分け尼へは慇懃なお言葉を下され、尼の生家の和氣の家が、畏くも垂仁天皇の皇子様の王子を御先祖と仰ぎ、それから連續して十一代目、清麿の世になつてゐるのを、能く御承知であらせられました。然うして序のやうに御自身の弓削家の御血統のお物語りがありました。

法王さまは、畏くも天智天皇の御孫王子様の第六子としてお生れあそばしたのださうですが、

故あつて他家で生、長くなり、御父君が法王様がまだお年若であらせらるゝ中におかくれ遊ばしました頃には、おくらし向きも豊でなく、其後法王様は佛門に入り、いろ／＼とお苦勞遊ばしまして御修業を積み、今はこうして法王に迄なり得たとお笑ひになりました。然うして清麿も今は官位は低い、血統は立派な正しい家柄、心構へ一つで立身も出世も出来る。此後は法王が目懸けて、役柄も官位も昇れるやうに肝煎つてやらうと、人前で仰せられて、尼は面目を施しまして嬉しうお座いました。法王様のお言葉を、お前様は心の中にしつかと納め込み、國家への忠勤はもとよりのことであるが、法王様へも忠勤を勵むやう、姉から申入れます。まだ／＼申上げたいことは數々ありますが、今度訪ねて来てくれた時にいたします。先はかしこ。法均尼。

と終つてゐた。読み果てた清麿は、思はずもうむと呻り聲を出した。それを聽いて側にゐた嗣子は吃驚りしたやうな眼で、良人の顔を噴つた。

「お姉上は私に種々と話したいことがあるから、来てくれいと仰せられてお申越しになつた。

今日法王は祝賀式を済した後、宮中御参内になると聞いてゐる。今から往けば姉上は忙しい最中に訪問るやうなもの、明日務めの歸途にしよう」

去り氣なく清麿は云つて、妻の怪訝顔を避けたが、道鏡禪師に對する飽足らぬ思ひが胸の中に、先刻よりも一層高く渦を捲いて巻き起つて來てゐた。

先づ思はれたのは、姉はかくも道鏡禪師に好感を持ち、尊んでゐるのであるから、豊永が云つた言葉を天の聲などとして、話されるものでない、話す時は今迄姉とは一度もしたことの無い多少の論争も避け難いであらうと考へられた。

それよりも大事なものは、法王自身が宮中女官達の前で、姉に法王自身の家系と血統を、天智天皇御孫王子の第六の御子として生れ來たと述べたのに、大きな不審と不満があつた。いつ頃から何人が云出したのか判然しないが、道鏡禪師が然うした尊い血統の人であるとの噂が、有司百官を初め、寧樂の巷の人の耳に傳はつて來てゐた。しかも何人もそれが偽りであると云つた者のない代りに、眞實であると云つた者も一人もないのである。然うしてその恐れ多い次第を、何人も究めて、確めやうともせず、曖昧模糊の中に過されて來たのである。いや確めやうとしなかつたのではない。或人は熱心に探究したのであるが、時代は然う舊くないのに、法王の父君が然うした尊貴な御身分で在はしたとの、明白な證據が上らなかつたのであると云はれてゐた。のみならず弓削家の血統を尊ぶ可きものとする言説であるから、何れは弓削家の一族

か、法王に阿諛の忠勤を勵もうとする輩合が、かうした宣傳をして歩くのであらうとの考へが、何人も云はず語らずの間に認めてゐた常識であつた。それが今法王自身の口から語られたのであるから、無理にも眞實とせねばならないのである。

「無理にも眞實としてよいものであらうか、眞實であるのなら、法王は先づ以て家系を白日の下に明瞭にして、世人の疑惑を解いてかゝらねばならない。然うでなくて猥りに宮中女官の前に私語して、家系を世人に認知させようとするのであつたなら、いや更に疑惑は高まり、それにつれて不祥の憶測は流言蜚語を生んで、天下の人心を掻き亂すものである」

清麿の思ひは其處へ落附いていつて、肩で大きな呼吸をした。

「お召し變へなさいましては如何で御座いませう。もう直ぐ晝の食事の準備が調うであらうと存じます」

嗣子は良人が手紙を読み果てたと知つてかうも云つた。

「おい、それでは着換へよう」

清麿は書狀を手にしたまゝ立上つたが、折柄晝の御佛への御供を報知す東大寺の鐘が緩く鳴り響いて來た。

弓削淨人の驚愕

一

法王が居住する弓削殿では、今朝の法王廳正殿の祝賀式に引續いて、法王が百官有司を招待した祝賀の夜宴が行はれてゐた。招待を受けた者の範圍は、今朝の祝賀式よりは狭少で、より身分の高い六十人程の人と法王の血族に限られてゐた。宴は今しも正しく酣であるらしく、興を添へる樂人の奏する樂の音が、脈々として外へと洩れ、庭で焚かるゝ篝火の明りが、ぼうと紅く、弓削殿の空を染めてゐた。

夕暮れ頃から急に雲が出て、一時は全く空は黒雲で蔽はれ、烈しい雨になるのでないかと思はれたのが、また少しづつ晴れて来て、西寄りの空には七日頃の月が覗いてゐた。東大寺の高い藁や、天皇の御座所となつてゐる藥師寺の棟や、興福寺の塔や、其他の寺々の大きな建築は、墨繪の陰影を作つてゐたし、猿澤の池は鈍色の光りを放つて在所を示してゐた。

法王の弟の弓削淨人の邸宅は、弓削殿から前面の大路を東へ五町程行き、右へ小路を曲つて二町程の處にあつた。其の邊りは大官の邸宅ばかりが立ちならび、各自の家の庭の巨木が枝を延ばして月影を遮ぎつてゐるので、眞の闇夜の暗さに異ならなかつた。主人の淨人は三人の子息共々に、大勢の家來を連れて、兄の法王の夜宴に列してゐるので、表門は嚴重に閉されてあつた。留守を預かるのは、折悪しく風邪で床に就いてゐる夫人の外、姉の美努久賣姫、妹の乙美努久賣姫、老人の用人二人に、婢七人、それ丈けが奥向きで、外廻りには門番と庭の見廻り役を兼た下男二人が、門番小屋に詰めてゐる限りであつた。

下男の一人は火鷹と云ひ、一人は灰鷹と云つた。今しも火鷹は邸内を見廻りに出懸けて、門側の自分達の部屋へ戻つて來たばかりであつたが、いつもはこんなお目出度のある夜など、寒さ凌ぎに酒を飲むのを許されるのに、今宵に限つて許宥されなかつた。それと云ふのが大切な囚人が、庭續きの米倉に厳しく縛つて繋がれてゐるので、萬一逃げられるやうなことがあつてはならないとの配慮故であつた。

「莫迦／＼しい。酒を飲んで、あんな囚人位ゐ、取遁す氣遣ひはないのに、酒を飲んではないとお命令けは、俺達の方が餘程酷いお所刑だ」

火鷹は見廻には提げて行く用心棒を、其處の壁へ立懸けながら呟いた。

「内密に飲むにしても、聽て御歸館になるだらうから、呼吸が臭さけりや、またお叱言だ。そんなに迄して飲むにも當るまい、まあ辛抱なさい」

灰鷹は火鷹を慰め顔に云つた。恰度その時であつた。小屋の入口の扉がもの靜に外から開けられたので、二人は誰が來たのであらうと、其方へ顔を向けると、顔を黒布で包んで、眼ばかり光らした人影が三人、しかも三人共に手に抜放した劍を提げてゐた。

「靜にしろ、聲を立てたり、騒いだりすると、生命が無いぞ」

先頭に立つたのが早口に云ふと、早くも進み寄つて火鷹の胸倉を捕へ、劍を上げて咽喉へと擬した。續いたのが土足のまゝで板間へ飛上り、其處に座してゐる灰鷹の衿首を押へて、之も鼻先へと劍を突附けた。灰鷹も火鷹も初め人影を見た時から呆氣に取られてゐたのが、かうなつては最早ぐうの音も出なかつた。すると残りの今一人は、入口の戸を内部から閉めた後、

「昨夜から此邸宅に、捕はれてゐる者がある筈だ。その囚人は何處にゐる。それを云へ、云ひさへすれば其方達を、斬らうとも、殺さうともせぬ。云へ」

二人の下男は怯えきりながらも、お互に呼吸を飲んで一語も發しないであつると、火鷹の胸倉

を取つてゐたのが、氣短かさうに劍を動かして、火鷹を刺さうとした。

「待つて下さい。云ひます。囚人は其處の庭の米庫の片隅に繋がれてゐます」

生命惜しさにぶる／＼慄へながら火鷹が告げると、三人の曲者は眼を見合して頷き合つたが、灰鷹を押へ付けてゐたのは、手早く其處にあつた繩で灰鷹を後手に縛上げ、聲を立てられないやうに、之も其邊にあつた布切れで口へ猿轡をはめて了つた。火鷹の方も同じやうに縛られましたが、後手ではなかつた。口に猿轡もはめられなかつた。その代りに、

「米倉へ案内しろ」

火鷹にも灰鷹にも手を觸れないであつたらうやら、三人の曲者の中の頭分らしいのが、火鷹へと劍を動かして命じた。否やを云へば直ぐその劍光が身體を突通すやうに思はれるので、火鷹は素直に頷いて見せた。すると曲者達も頷き合つて、一人は灰鷹の見張りの爲に番小屋の中に残り、二人の曲者は火鷹の縛り繩の先端を握つて外へ出た。

四邊は暗かつたが、まだ月は落ちずに樹立の間に懸つてゐたので、ものゝ影は物色せられた。頭分らしい曲者の手には火繩が握られてゐたが、振り回さうとはせず、火鷹が動くまゝに従ひ、足音を忍ばして、庭の彼方に夜空へと四角な陰影を見せてゐる米倉の方へ近づいて往つた。聲

を擧げたなら直ぐ聞き附け得られる母家は眼の前に見られて。戸の隙間からは灯影さへ洩れてゐたが、外部でかうした異變のあるのを、少しも心附かぬらしく、コトリとの物音もなく静まり回つてゐた。

火鷹の案内で曲者二人は漸く米庫の前に立ち得たが、その米庫には外部から大きな門くわんが懸つてゐて、動かぬやうに錠が下されてあつた。錠を開く鍵を曲者は火鷹に手眞似で求めると、火鷹は小屋に置いて來たと同じやうに聲を立てずに手眞似で示したので、一人の曲者は小屋へ戻つて往つたが、程なく引回して來た其手には、重さうな鍵を握つてゐて、直ぐ開けにかゝつた。少しも物音を立てない巧さで、錠は外され、門は抜かれて、米庫の兩扉は左右に開かれると、頭分の曲物は初めて火繩を振つて内部へ入込んで往つたが、稍しばらくしてから、もう了然り繩目を解かれた囚人を連れ出して外へ顯はれて來た。然うしてそのまま立去つて往くかと思ひの外、囚人から外づした猿轡を否やを云はさず火鷹の口にはめ、米庫の中へ押込むと、以前通り、兩扉を閉め、門迄もかけて、風の如く引上げて行くのであつた。

總ては通り魔であるかのやうな迅速さと、物音一つ立てない注意深い企圖で行はれたのであるにしても、眞人の留守の母家の者達は、餘りにも油斷が多かつた。用人二人は表入口の側の部屋で、其日の金銭出納や農奴等が納めて來た米や雜穀表の取調べに没頭してゐたし、七人の家婢達は、厨房の側の部屋に集つて、夜業として宛がはれた針仕事や、糸紡ぎに、時折聲低く雑談を交しながら餘念がなかつたのである。

二日以前から輕微な風邪で夫人が臥してゐる次の部屋で、姉の美努久賣姫は菜種油を盛つた火皿に燈心を五本も入れた明るい灯影の下で、嗜好な縫取りの手業てわざを楽しんでゐた。妹の乙美努久賣姫は直ぐその側で、手球を色彩美しい絹糸でかゞつてゐた。美努久賣姫の縫取ぬい框の中には、牡丹や芍薬の花模様はなもようが描かれてあつて、最早七分通りは出來上つてゐた。

「お姉上様、その縫取の布帛ぬいを、一體何になさるお心算こころざしりで御座います。衿飾りには大き過ぎますし、衣裳の何處かにお用ゐになるには小さ過ぎますし」

手球への糸かゞりの手は休めようとはせず、妹姫は性質の清しい聲できいた。

「さあ、何にしませうか、出来上つて見ねば解りませぬ。出来上つてから用ゐやうを考へて見ようと思つてゐます」

姉姫は縫取り臺から眼を放さなかつた。

「意地悪なお姉上、お自身ではちやんと用ゐようを心づもりしてゐながら、私には話して下さらない、それなら私から申上げます。お婚禮の時に用ゐになる髪道具や、髪飾物を納れる宮藏ひになさるお考へで御座りませう」

「乙美努久賣姫としたことが、私にはまだ嫁入つて往く對手のお方は定まつてゐず、結婚するなど、話も氣態りもないではないか」

縫取りの針の手を止めて、笑ましげに美努久賣姫は妹姫の方へ眼を向けた。

姉姫は豊かな頬を持ち、女としては稍廣濶い額ではあつたが、それに釣合ひの取れる肉厚な高い鼻は、廣量の大きい高貴な相を見せ、口元は引緊つて、賢い理智の閃きを湛へた上、聰明さと溫柔しやかな情感とを覗かしてゐる切れの長い大きな眼から受ける印象で、何人の瞳にも眞盛りの牡丹のやうな美人であるとの感を抱かしめるのであつた。妹の乙美努久賣姫の方は、稍面長

の顔立ちで、恰好のいゝ高い鼻、口元と姉姫に能く似通うてはゐるが、言語を云ふと珠玉を並べたやうな奇麗な白い齒が隠見するのと一所に、片笑靨が唇邊に刻み出され、それ丈けに表情の變化が烈しく、それに之も姉姫と能う似た切れの長い大きな眼は、稍潤味を帯びて、奔放な情熱の所有主らしくも見えるが、また何處かに意志強い隠影が浮んでゐて清楚な感じを與へ、恰も櫻と梅とをつき交ぜたやうな美人に見らるゝのであつた。

寧樂の大宮人の中では弓削館の二佳人と稱して、評判は姦しく、まだ見ぬ人は一目見たいものとの憧憬を持つ程なのに、どうしたものか、姉姫にも妹姫にも縁談の申込みはなかつた。なかつた譯ではないが申込んで来る對手が、云合したやうに弓削家の現在の華々しい權勢とは釣合ひの取れない、低い地位の人が、昔時は名門であつたが、今は零落の道を通つてゐるやうな對手のみで、弓削家に氣に入らなかつたのである。それが最近になつて、一つは左大臣の藤原永手の口から、一つは右大臣の吉備眞備の許から申込まれて來た。恐らく娘の結婚に就て焦り氣味になつた弓削淨人が、兄の法王に依頼し、法王のお聲懸りで、永手と眞備とが幹旋に乗出したものらしかつた。左大臣の方の申込みは、同族藤原家の京家の二男で、中務省に務めてゐる官位はまだ低くはあるが、名門の出だけにその將來には約束せらるゝものがあつた。右大臣

の方からは、吉備家の遠縁に當る昔時は父祖に赫々たる功勞のあつた難波家の嫡男で、現在は紫微少忠（皇宮職の一員）の役を拜してゐる才幹の勝れた廿四歳の若者であつた。乙美努久賣姫が姉姫にそれとなく揶揄したのは、この二人の若者の縁談をさしたのである。

「まあしら／＼しい。縁談の話も氣態りもないなどと、私はお母様が、用人の桎鷹希さんとお話しになつてゐたのを聽いて、縁談の一つは吉備様から、今一つは永手様からお申込みがあつたのをよう知つて居ります。それを私に隠さうとなされても無駄なこと、それ／＼その眼で笑つておいでになるのが何よりの證據です。おほ／＼／＼」

妹姫は大袈裟に笑つてから、

「姉上様、お前様は永手様の藤原良鷹様の方にお心が傾いてゐるか、それとも吉備様の難波様の方にお思召があるか、云ひ當てゝ見ませうか」

「まあ、はしたないものゝ云ひやう、よしや然うしたことがあつたにしても、娘の私達が口にする可き事柄ではありませんぬ。何もかもお父上や母上に任して置く可きものでせう」

姉姫も妹姫も最早お互の手業は止して、顔と顔を對向合してゐた。

三

「何のはしたないことがあります。縁結びは女の一生の大事、それに依て身の行末の幸福と不幸福とが定まります。當の本人のお姉上御自身であれ、これとお考へになるのが、當前過ぎる位のもの、お姉上は永手様からの藤原良鷹様へお興入したいと、思つておいでになるのでせう」

「どうしてお前様は然うお思ひになります。まるで占師か何ぞのやうに、私の心を見抜いたやうなもの云ひやう。それが然うでなかつたらどうなさる」

「いゝえ、それ／＼そのお顔色、眼の中に見られるお心の陰が、然うでないとは云はしませぬ。お父上初め母上にしても、門地の高い藤原家の人と縁組するのを望んでお出でになることは、それとなしに今迄にお話しになつたお言葉で解つて居ります。弓削家は今こそ伯父法王のお蔭で、世間の誰からも羨まれるやうな尊い地位になりましたが、伯父様がお出世にならないついで、此間迄は、朝廷に仕へてゐる大方の人から、冷たい眼を向けられてゐました。さればこそお

父上なり母上にしても、他の氏族よりも一段と高い地位に座して、朝廷の政治に深い根を張つてゐる藤原家の一族と、今の中にお姉上にしても私にしても縁組さして、何があらうと弓削家の礎が動かぬやう、後々迄も弓削の榮えを圖らうとのお思召なので御座います。お姉上は然うしたことは何もかも御存じの辭に、然うしてお姉上お自身もそれと同じお心地になつてお出でになるのでせう」

「お前様がそれ程迄に深く知つて云ひなされるのなら、姉も隠さずに云ひます。お前様の云ふ通り、私はお父上や母上のお心地を考へて藤原家の人と縁組したいものと考へてゐます。お父上や母上のお考へに従ふばかりでなく、弓削家の娘の私もお前様も然うせねばならないものだとも思つてゐます。藤原家の人と縁組するのは、末々の榮えを望むのではなく、藤原家の人々は今は伯父法王の威勢に伏してはゐるものゝ、内心にはどう思つてゐるのやら、聽ては地位を變へる日が來ると、鋭い爪を磨いてゐるのかも知れませぬ。私は藤原家へ縁附いて行つたなら、娘の私達の持つ眞心や純情、貞節、慈悲心や善根と、御佛の經卷の中に示されてある通りの諸々の善行を、藤原氏の人達に示して、弓削の血汐の清らかさ、從順さ、尊さを認めさせたいのです。然うして若しかしてそんな爪を磨いてゐるのであつたなら、鋭くさせずに圓くなるやう

に務める役目が、弓削の娘にはあるのだと考へてゐます」

「それではまるで人身御供に上るやうなものぢやありませんか。しかしそれを悪いお考へだとは思ひませぬ。私にしても若し藤原家の門地の高い家へ興入れしたなら、然うした役目を果しませうが、それと一緒に少しは藤原家の夫人としての誇りや譽れやらを身に帯びて、榮華もして見たいと思つてゐます。人間は老少不定とお經に書いてありますが、伯父様がいつ迄も長生なされ、いついつ迄も法王様であつたなら、私の此願ひは、吃度叶へられると思つてゐます」

姉妹がかうした話に餘念のない折柄、不意に夜陰のものの靜寂さを破つて、

「御歸館」

と、聲高らかに門外で呼はる聲と一緒に、表門をどん／＼と敲くのであつた。門番小屋に下人はゐるのであるから、門を敲くなどあるまじき事柄なので、姉妹二人は吃驚りしたやうに眼を見合して、表門の方の氣勢に耳を敬てたのであつたが、その中に用人が忙しく足音を立てて外へ出て往つたのは、門を開ける爲だとは判つた。すると直ぐがや／＼といつもの父の歸館の折とは全く別な騒ぎ聲が聞かれ、續いて何か下知するやうな一番上の兄の廣世の怒鳴り聲が

耳に這入つて来たばかりか、米庫の方へ走る足音、それから姉妹のある部屋の外迄へも足音は入込んで来て、

「怪しい人影は見えぬか、氣をつけて探せ」

などと、聞知つてゐる家來の聲が夜陰に響いて、何かと起つたとは姉妹にも解つた。

「姉上、何事が起つたのでせう。お歸館と呼ばはつて、兄上のお聲も聞かれたのですもの、お父上は館へお歸りになつたに違ひないでしょうに」

乙美努久賣姫は顔色を變へてもう立上つてゐた。

「あれあのやうに兄上様のお聲ばかりか、お父上の聲も聞えて來ます、私達が騒いで何になりませう。私達は靜にしてゐた方がよい。それよりも母上様が聞附けて心配してお出になるかも知れない。私達は母上のお側へ」

然う云ふと初めて美努久賣姫は立上つて、次の間を一つ隔てた母の病室へと、妹を誘うて這入つて行かうとした時、父の淨人が、息子の秋鷹、鹽鷹を後に從へて、彼方の廊下から此方へ近寄つて來るのが眼に捕へられた。

「お父上が」

姉妹も妹姫も同時に呟くやうに云つて、其方へと進んで往つて迎へた。

四

「お歸り遊ばせ」

其處へ跪いて娘二人は禮をした。

「其方達には何事もなかつたか。母上は」

淨人は事もなげに娘達に聲を懸けて妻の容子を訊いたが、その顔は蒼白となつて、その唇の邊りは怒りに引攀つてゐた。

「母上を先程お見舞いたしました、氣分もいゝ、熱も醒め加減だから、明日は起きられるだらうと仰有つてお出でになりました。只今はお寢つておいでになるだらうと存じます」

姉妹は父の顔を仰ぎ見ながら答へた。

「然うか、秋鷹も鹽鷹も自分の部屋へ行くがいゝ。美努久賣姫も乙美努久賣姫も部屋へ行つたがよからう。然うして母上へは、私が後で其方へ往くと傳へて置くがいゝ」

淨人は子供達一同を退かして、廣間へ這入つて往つたが、御主人の御歸館と知つて、もう其處には婢達の手で明るい燈火が灯つてゐた。淨人は婢の差出した圓座の上へどつかと座すと、我れ知らず太い溜息を洩らした時、父を追うて長男の廣世が、家臣二人を従へて廣間に這入つて來た。廣世はすつと父の側へ、家臣は遙か下手に座した。

「犬鷹を奪取つて往つた奴の、何か手懸りになるやうなものは發見からなかつたか」
淨人の顔は家臣の方へ向けられてゐた。

「はい念入りに、何か然うしたものはなにかと、庫の内外、門番小屋の周圍、表の道迄も松火の明りで隈なく探しもとめました、然うと思はれるものは何一つ眼に入りませなんだ」

「庫の中、外とそれらしい足痕が二つ三つ眼につきました限り、火鷹や灰鷹に猿轡をはめた布帛^ハとてもお館のものばかりで御座いました」

家臣二人は交々に述べた。

「火鷹にも灰鷹にも、曲者は顔を包んでゐたので、人相の見覚えは少しもなく、只強迫した言葉の聞覚えで、下民の仕業でなく、確に大官の館に仕へてゐる者に相違ないと申して居ります」
之は廣世が述べたのである。

「下民の仕業でなく、大官の館に關係ある者の仕業とすれば、猶更以て大事である。犬鷹等の下民仲間が、犬鷹救助けたさに奪取つたのであれば、捕へ得ることも容易であらうし、奪取られたにしても、大した障^{サマ}碍はなく濟みもするが、大官が關係でもしてゐるのであれば、容易ならぬ企圖^{たくま}みが潜みあると思はねばならない、何にしても面倒なことが起つたものだ」

淨人は沈痛な眼色を見せたが、

「今となつては云うて甲斐ないことではあるが、囚人を手弱い者と侮り過ぎて、警固に念が足りなかつた、家來の者を今三四人邸に残して置いたなら、かうは易々奪取られなかつたであらうに」

「お父上そんなに落膽なざるに及びませぬ。若し大官が關係してゐるのであれば、何れは寧樂の都の中に隠匿^{かく}ひ置くに定つてゐます、伯父法王に申上げ、法王の威光を藉つて、大官の邸宅残らず探し廻れば、譯もないこと、明日一日でも再び犬鷹を捕へ得られます。その役目には私が當りませう」

「理由あつて然うはなり兼ねるのぢや、私は此事を法王のお耳に入れたくない」
猶も云懸けたが、家臣二人が其處にゐるのを見ると、

「其方達は下つてもいい」

言葉短く命令して、家臣二人が一禮して退出して行くのを見送つて了ふと、眞人は廣世をすつと前に、身近う進ませてから、廣世にはまだ話してゐなかつた犬鷹の罪の次第を語り、それから法王が暗に命じた犬鷹の處置方法に就ても聲を低めて語り聞かした。

「然うでしたか、なる程然う云ふことであれば、伯父上法王に中上げて宜いやら悪いやら考へねばなりません。昨夜あの囚人がお父上に會つたのを、私は早く寢所に入りましたので、今朝になつてから知つたのでした。しかもお父上はあの犬鷹と對座なされた中途に、お人拂ひを爲されたと用人から聞きましたので、不思議なことに思ひ、おたづねいたしましたのに、父上はお話し下さいませなんだ。私が承つて居り、然うして今朝の祝賀式からお歸りになつた後、伯父上法王のお話を聞かして置いて下さいましたなら、日が暮れぬ中迄に、法王のお考へ通りに、家臣の手で犬鷹の處置は附いて居りましたのに、残念なことを致しました」

「今日は兄上法王のお目出度い日、供養の爲め一日の生命を延ばしてやつて、成敗は明日のことにとしよう、慈悲心を持つたのが悪かつた。然りながらあの囚人を此儘とり通して了つては、兄上法王の爲に悪いばかりでなく、天下の御政治向きにも亂れの基となる。草の根を分けて

も探し出さねばならない。何人か陰で糸を曳いてゐたのであれば、其奴も共に刳取つて了ふ手段を取らう。廣世三四日の間、其方は家臣と共に有る限りの智慧を働かして探索してくれ、刑務省に居る腹心の者にも命令けて手を借りよう。法王の耳に入れるのは、然うした手段を盡しても發見らぬ時にせねばなるまい。今夜はもう遅い。何事も明日のこと、其方も下つて早う眠るがいい」

淨人は思案が定つたので、稍元氣を取戻してゐたが、眉の間に寄せてゐる憂鬱らしい二筋の立皺は消す由もなかつた。

永手左大臣と雄田鷹

一

「犬鷹もそつと側へ寄れ、然う離れてゐては話が出来ぬぢやないか」

「はい。有難う存じます。殿様にお目に懸れば先づ何よりも此四五日來の、私奴の身分に餘り

まず御手厚いお褒應のお禮を申上げねばなりません。有難う御座いました」

「何の／＼その禮に及ぼう、其方は私の頼みを聽入れて、酷い苦勞をして来てくれたのだから、禮は私の方から云はねばならない。それでは約束通り弓削淨人の許へ訴へ出てくれた褒美の一貫文、受取るがいゝ、それから今一貫文、これは其方が思ひも寄らぬ捕はれの身となつて、憂目辛い目を見た慰め料として添へて遣はす」

藤原の雄田鷹は自身の前に置いた二束の青銅錢を、側に控へてゐる家臣の松鷹へと眼くばせで命じて、犬鷹の手に渡してやつた。

庭の立樹の中から頬白が高音で囀つてゐるのが聞かれた。南向きに高縁の廣間は、晴れた蒼空からの陽が温くさし込んで、藤原の一族でも名家らしく備へつけてある古雅な飾り棚や、置道具を明るく見せてゐるのを背後にして、雄田鷹は今しも外出から歸つて來た正装のまゝで座してゐた。

「こんなに頂きましてよろしいので御座いませうか。何だか恐ろしいやうな気がいたします」

雄田鷹から一丈程も離れて俯向き加減で座してゐる犬鷹は、渡された錢の重みで自づと降した掌を、畏こまつた膝の上で支へながら、滑るさうな賤しい眼で雄田鷹の顔を窺つたが、其の

頬には愁心を満たし得た悦びを、隠す術なく顯はしてゐた。

「恐ろしいなどと、何でそんなことがあらう、遠慮なく取つて置くがいゝ」

「左様で御座りますか、それならば有難く頂いて置きます」

犬鷹は重い青銅錢を手にしたまゝで、ピョコリと禮をするのを、雄田鷹は微笑を含んだ眼で見据ゑてゐたが、犬鷹が懐中から布帛を取り出しその錢を包み終ると、

「犬鷹私が一旦口に出した約束を、間違へないのが解かつたであらうな。其方は最初淨人の邸宅へ、私が訴へ出よと申した時恐ろしがつて、そんなことをいたしますれば、飛んで灯に入る夏の蟲、牢獄入りに進んで行くやうなもので御座いますと、拒んだのを覚えてゐるであらう。然うした事態に立ち到つたなら、必ず救助ひ出してやると申した通り、その約束も果してやつた。私は約束したことを間違へるのは大嫌いの男ぢや」

「左中辨様のお義理の堅いには驚きました。偽りの多い今の世にあるまじきことのやうに考へられます。その上お慈悲深くゐらせられて、私が河内國で犯した罪で捕へられ、殿様直直のお調べを受け、隠し切れずにも何もかも白状いたしましたことの序に、然うした罪を犯すやうになつたのも、原因はと云へば基眞禪師や馬鷹に欺されて貧乏になつたが故だと申上げます

と、能くお承知下さいまして、それからは私の罪を憎まうとはなさらずに、繩目も解いて錢も下され、衣類も下され、御家來同様に幾日かを氣樂に暮させて頂きました御恩、お慈悲深い御佛のやうなお方様だと存じ申上げます」

「お前は心から私をそのやうに思つてくれるか」

「はい、心から然う思つて居ります。それなればこそお命令けに従ひ、寧樂の都に舞戻つて来て、一旦はねつけられた馬鷹に、法王廳へ出懸けて往つて、復ぞろ嫌がらせを云つて喧嘩を吹懸けたり、それから弓削淨人様のお館へ訴人いたしましたので御座います」

「其方が私をそんなに迄も思つてゐてくれるのは能く解つた。それも其方に最初に云聞かした通り、其方を盗みする程に零落れさせた、基眞禪師や馬鷹の天も許さざる罪を憎むの餘りである。基眞禪師や馬鷹は其方にも敵であらうが、國の政事を明るく正しくしようと日夜に思ひを凝らしてゐる私等朝廷に仕へてゐる者に取つても敵なのぢや、賈せの佛舍利を獻じて、眞の佛舍利であると朝廷を欺き、天下を欺き、然うして己等はその偽瞞の上に立つて、高位に昇り、榮祿を貪り居るのを許宥して置かれようか。定めし今頃は其方が訴へ出た弓削淨人殿から、基眞禪師は問ひを受け、いや取調べの形式が取られたかもしれない。悪事が露顯したかと慄へ上つ

てゐることであらう。小氣味のよい事である。其方も小氣味よく思ふであらうがな」

「はい。仰せらるゝ通りで御座います。私が河内國であんな罪を犯しましたのも、法王廳の法參議などゝ威張つて、世間から尊まれてゐるが、根を洗つて見れば賈せ佛舍利獻じの詐偽師ぢやないか、そんな方法で世間を渡つて行くのが伶俐者の爲ることで、汗水づくになつて地道に働く者は莫迦の骨頂だと、つい大外れた心地になつたので御座います。それが今殿様の仰せられました通り、慄へ上つてゐるのだとすれば、天道様は惡を許さず。此後は以前の私に回つて、眞正直者になつて稼いで往かうと思ひます。どうぞ河内國で犯しました罪をお忘れ下さいませやう、重ねてお詫びいたします」

「よい／＼。其方はもうそんなに河内國で犯した罪を、氣に病まずともいゝ。基眞禪師を慄上らした今度の功勞で、償ひは済んでゐる。其處で私は其方が眞人間になつたのを見込んで、一つ頼みがあるが、聞入れてくれまいか」

「左中辨様が頼みたいと仰せられますことなら、生命をくれいとお頼みの外なら、何事でも聞入れます」

犬鷹は地金を顯した不敵な面魂を見せて、雄田鷹の顔を瞞つた。

「あはゝゝゝ」

と雄田鷹は聲高く打解けきつた笑聲を上げてから、

「そんな理不盡な頼みごとはせぬ。貝細工職人である其方に取つては何でもない業である。基眞禪師の爲に其方が造つてやつたあの贗せものの佛舍利、あれと寸分違はぬものを今一と組こしらへてくれまいか。代物はもとより、出来栄えが良ければ褒美の金も遣はす。どうぢやな」

「贗せの佛舍利を造れいと仰せられるので御座いますか、それならば何でもないこと、喜んでお引受けいたします。屹度殿様のお氣に入るやうに仕上げ御覽に入れませう」

犬鷹は大呑込みに吞込んで領いて見せたが、直ぐ言葉を續けた眼に不審氣な色を湛へ、

「殿様私に贗せの佛舍利を拵へさせて、それを一體どうなさるお心算りなので御座います。殿様もそれを朝廷へお献上になつて、基眞禪師同様に、失禮な申分ですが、何か善いことにお有り付きなさらうとなさいますので御座いませうか」

「こりや犬鷹、口が過ぎるぞ、餘り失禮なことを申上げるな」

側に扣へてゐる家臣の松鷹が、怵へず犬鷹をたしなめた。

「よい／＼松鷹扣へて居れ、早速承知してくれて忝けない。私が贗せの佛舍利を手に入れようとするのは、其方の云ふやうな何か善いことに有り附かうとするのではない。やはり基眞禪師の罪を發く道具に使ふ爲である。基眞禪師は弓削館へ訴人した其方が、居なくなつたと知つたなら、いくら淨人殿が責立てても、頭を左右に振つて、そんなことが有らう筈はない。嘘ぢや偽りぢや、佛舍利は紛れもない眞物だと、眞顔で云張るに定つてゐる。其處で私が其方にこしらへさせた贗せ佛舍利を眼の前に突附けて、證據は之ぢやと見せたなら、最早基眞禪師の云分は立たなくなつて了つて、天下を欺いた罪に伏すは必定である。國家の政治は明るくなつて、法王様もお悦びにならう。其方はまた一つ功勞を立てることになるのぢや。解つたか」

「なる程、然うしたお考へで御座りましたか、殿様のお智恵には感心いたします。屹度拵へて差上げませうが、もう一つ私はお尋ねいたします。弓削淨人様は殿様のお話では、基眞禪師を責めてお出になつてゐるとのこと御座りますが、訴人いたしました私を縛り上げ、米庫へ閉ぢ込めなさいましたお容子では、私の生命を取らうとお思召したやうに考へられます。基

眞禪師の罪を發き、天下の政道を明るくなさるお考へで御座いましたなら、殿様と同じやうに、私にお褒美を下さいましてもよさうなものなのに、其處のところは私には少しばかり合點が参りかねます」

「あはゝゝゝゝ」

と、雄田鷹は又もや大きく笑つてから、

「其方はなか／＼ぬかりのない男だな。その不審は尤な次第である。有様は其方が弓削館へ訴入いたした時、淨人殿は天地も顛覆り回る程お驚きになつて、法王へも申上げなされましたが、一旦眞物の佛舍利として天下に告知され、其爲に道鏡大政大臣禪師は法王の位に昇られたのであるから、大業に騒立てるよりは、世に云ふ大の蟲を活かして小の蟲を滅する譬言葉の通り、其方の生命を取つて、世間を誤魔化さうとなされたのである。それが私の手で其方を弓削館から奪ひ出すと私の行爲だとは今以てお存知なく、犬鷹が何人かと連絡があつて通れて了つたからは、最早伏せて置くことはなり兼ねる、いつ何處から發き立てられるかも知れないと大周章に周章られ、基眞禪師を強く詰問せらるゝ一方、飽迄も其方の行衛を探出し、ならば今申した大の蟲を殺して小の蟲を滅する政策を、取らうとしてゐるゝのが間違ひのない今の状態である。

だが、安心せい。其方の生命は此左中辨が飽迄も守護つてやる」

「有難う存じます。それで私の不審は晴れました」

殊勝氣な顔に回つて、犬鷹は町重に頭を下げた。

「そこで犬鷹其方が、此寧樂の都に止つてゐるのは危い。私は四五日すると河内國へ歸つて往く、其方を河内國へ連れて往つて、其處で佛舍利を造つて貰ふことにする。細工小屋を建て、も遣らうし、住居とても家來同様充てやらう。河内へ往く時は私の家來として衣服を調へ行列に加つたが可い。然うでないと鶴の眼鷹の眼となつて、其方の行衛を探し求めてゐる弓削淨人方の眼を掠めることは難しい。窮屈であらうが、今四五日、私が河内へ出發する日迄、今迄通りに外出せず、他人の眼に止まらぬやう氣をつけて、此館の中に蟄居してゐてくれい」

「何から何迄お殿様のお心配り、犬鷹奴は冥加に餘ります。仰せの通り殿様のお出發の日迄、人目につかぬやう氣をつけて、お館の中に閉ぢ籠つて居ります。有難う存じます」

「うむ。然うしてくれ。之で話は済んだ。松鷹、犬鷹を部屋へ連れていつて、酒でも振舞うてやれ、しかし度を過ぎぬやうに」

松鷹は主君の言葉に立上つて犬鷹の側へ行き、二人並んで雄田鷹へ跪座の禮を行つてから、

彼方へ去つて行くのを、一役目済した晴れやかな顔で雄田鷹は見送つたが、昵つと沈吟して次に起つて来る想念おもひを纏めるらしく見えたが、突と立上つて壁際に置かれた大きな几帳を片寄せ、

「定めしお窮屈で御座いましたらう、さあどうぞ此方へ、火桶の方へお進み下さいませ」
慇懃な聲に連れて、几帳の背後から立ち顯はれたのは、左大臣藤原永手であつた。その顔には明に驚愕の色を浮かばせ、雄田鷹が招するまゝに、今迄雄田鷹が座してゐた火桶の邊りへ歩み寄り、雄田鷹がすゝめる圓座へと座した。

三

「委細お聴きの通りの次第です。叔父上も定めしお驚きになつたことだらうと存じます」

雄田鷹は稍下手よりに座を構へて、永手の顔を瞞くらつた。

「ふむ」

と、永手は大きな溜息にも似た呻り聲を立てゝから、

「佛舍利が贋せ物であらうとは、思ひも寄らぬことであつた」

僅に云つたきり、次の言葉を續けようとはせず、眼に困惑の影を見せたのは、自身の左大臣の地位を自覺して、責任があると感じたのであらう。

「基眞禪師は悪い奴で御座ります。幸ひ犬鷹奴が河内國で盗みを働き、私の手で捕へられて白狀致しましたので、宜ろしかつたものゝ、之が地方廳下で捕へられ、犬鷹が贋佛舍利に就て一切のことを申立てたと致しますれば、地方廳ではどう取扱うて可いかと判らず、自然と外間に洩れ、今頃は天下の大騒ぎになつてゐたであらうと存じます」

「然うであつたかもしれない。まだしも其方の手で犬鷹を捕へたのが幸福せであつた」

「叔父上、貴方はどう處置したらいいと思ひになります、お考へを承はり度う存じます」

雄田鷹と永手は血縁から云へば従々兄弟に過ぎないが、永手の年齢が雄田鷹より遙に上であり、今永手は大臣職を永く勤めて藤原家一門の長者の地位にあるので、雄田鷹はいつも叔父上と尊稱してゐるのであつた。

「何と處置していいか、餘りにも重大事なので、直ぐには思案がなり兼ねる。先づ以て右大臣吉備眞備殿と相談を遂げねばならない。其上で法王に申上げるとも、申上げぬことにすると、

と申して、やはりお耳に入れずには済まされぬであらう。雄田鷹お前は今犬鷹に、東大寺に納つてある佛舍利と寸分違はぬ贋せ佛舍利一組を造れと命じたが、その贋せ佛舍利を其時犬鷹に申聞かした通り、眞實基眞禪師に自白を強ひる證據の品とする爲なのか、それとも外に考へがあるのではないか」

「お察しの通り、外に考へがあります。基眞禪師に自白を強ひるのでしたならば、犬鷹と云ふ生き證據を彼の面前に引据ゑて、對決させたならば、それで澤山で御座います。叔父上、貴方は此事件を法王は既に知つてゐらるゝとお思召しますか、それともまだ耳に這入つてゐないと思召しますか。犬鷹奴が弓削淨人の館へ訴人したのは五日以前、その翌日淨人は、祝賀式の後法王に遇つて、人拂ひの上、二人で密々の相談をしたことは、法王廳に入込ましてある私の腹心の者から、私の許へ報知してまゐりました。その相談がどのやうなことであつたと思召します。淨人の耳に這入つた贋せ佛舍利の話であつたとはお考へになりませぬか」

「さあ、それは判然とは解らぬが、然うしたお話であつたかもしれない」

何事であれ、他人より前に發言せず、種々と他の者に意見を述べさしてから、漸く一言二言其場に合ふやうな言葉を吐くのが賢い遣り方であつて、今の政廳では保身の術であると心得

てゐる永手は、相も變らぬ煮え切らない返辭をするのであつた。

「叔父上には、よしや然うであつたであらうとお思召しても、法王に對しての遠慮心から、そのやうに仰有るので御座いませう。あの氣弱い、未熟者の淨人に、犬鷹の訴へを聞いてそれを自分の腹一つに納め込み、決斷善く當座の處置が取られるやうな、そんな氣の利いた才覺は持合して居りませぬ。今迄が然うであつたやうに、何事も兄法王の指圖の下に動き、兄法王の聲懸りでなくては何一つ爲出かし得ない、無能者の標本のやうな淨人は、早速法王に申入れて、指圖を受けようとしたのは、間違ひのないことです。日は東から出るやうに此私の見透しに間違ひはありません。既に法王の耳に這入つて五日になるのに、左大臣たる叔父上にも、右大臣の吉備眞備殿にも圖らうとしないのは、其處に法王の心地の上に暗い影が翳します。淨人は犬鷹を米庫の中に閉ぢ籠めたのは、法王の指圖を受けて犬鷹を人知れず無き者にしようとしたのであつて、總てを暗から暗の中に葬らうとしたのに、間違ひはありません」

叔父上、政道は明かにした上にも明かにしなければ、萬民は伏さず、國の亂れとなります。法王が基眞禪師の奸惡を知りながら、その奸惡を發かず、罰しようとしなのは、國の政道を私するものであつて、それ丈けでも法王として、大政大臣としての道鏡禪師は、罪に償するも

のです」

雄田鷹の雄辯は滑かであつた。

四

「うむ。法王は佛舍利は既に天下に眞物であると公布して、萬民は治まる御代の證據の奇瑞である、隨喜の涙を流してゐるのであるから、猥りに改廢してはならない。此儘に自身の心一つに伏せて置く方が、國家の治安には善いと、お考へになつたのではなからうか。それ故に私にも、眞備右大臣にも御相談がなかつたのであらうと私は善意にお考へ申上げた方が善いと思ふが、間違つてゐるであらうか」

「善意に解しますれば、然うと考へられないこともありませぬ。しかしそれは公平無私の法王であるのを前提としての考へ方です。皇室へ忠肝の人であつて、民利民福を第一義として、その爲には自己の慾念を犠牲とするに躊躇しない、至誠至純の爲政者であるならば、然うと考へても可いでせう。叔父上は法王を然うした人格者であるとお考へですか。今迄法王が大政大臣

としての施政は、多少は國家なり、國民に寄與した點もありませうが、それよりも私心を盡して、自己並に弓削一族の榮譽と榮達をのみ謀るより、他に餘念なしと斷じてまいと信じます。國法として當然罰す可き基眞禪師を其儘にして置いて、犬鷹を亡きものとなし、總てを暗に葬らうとするのは、基眞禪師を罰し得られない弱身が法王にあるからです。その弱身は或は最初からの同心同腹の一味徒黨と云ふやうなものではないでせうか。國策として佛舍利を偽物であると證據立てるのは、徒に國民を刺激し、動搖さすものであるとの方針を取るにしても、基眞禪師は罰し得らるゝのに、法王は然うした手段を取らうとなさらない。左大臣右大臣の職分を無視して、何故に圖らうとはなさらないか、叔父上のお心の中には、疑問が起つてはまゐりませぬか」

「疑ひが起らぬ譯ではない。其れにしても其方の云ふやうに基眞禪師と一味同心などと、それは餘りに法王を誣ひるものである。基眞禪師が自己一人の心で献上してまゐつたのを、私は能う知つてゐる。それ迄法王は餘り基眞禪師を御存知ではお在さなかつた」

「それは然うで御座りませう。私の申すのは其後のことで法王の態度には數々の不審が數へ上げられます。先づ第一には佛舍利が献上せられたならば、良辨大僧都を初め、良興少僧都、並

に其他の僧職を集へて、眞實を定む可きであるのに、道鏡禪師一人眞物なりと認めて、直に天覽に供されたのであります。第二にはその眞實さへも定まらず、良辨大僧都、良興少僧都などの眼に未だ觸れない以前に、法均尼、並に明基尼、續いては吉備眞備殿の息女由利と、最高位に在る宮中の女官三人の口から、献上の佛舍利を隨喜湯仰する言葉が世上に流布され、その狂信的な言葉を否定し、若くば反對の言を爲す者は、不忠の臣の如く思はれねばならない形勢が醸成されて了つてゐたのです。然うした経過は私よりも叔父上の方が能く御承知でせうが、そんなことで良辨大僧都や良興少僧都やその他の僧職にしても、朝廷から御諮詢を受けても、云ふ可き言葉を封ぜられたのも同様で、佛舍利を眞實の物と認め、然うしてそれに依て道鏡禪師は法王になられたのです。叔父上、道鏡禪師に屈伏したお心地で、道鏡法王を庇護ふとするお考へも、ほど／＼の處で止めてお置きにならないと、朝廷へ對し不忠の臣とならねばなりません。法王は上 聖明を蔽ひ奉り、下萬民を晦す、一日も存在を許す可からざる人であるのを私は斷言いたします」

一語より一語は鋭く、時には舌端火を吐く如く熱心に説くのを聞いてゐるのか、聞いてゐないのか、永手は眼を閉ぢたりして、熱意のない顔附きをしてゐたが、漸くにして一つ大きく頷

いてから、

「お前の云ふことは能く解つた。その中でお前は今、良辨大僧都や良興少僧都は、口を封ぜられたも同様だと云つたが、それは間違つてゐる。今迄見たこともない佛舍利、それが天竺渡來の毘沙聞天像の脾腹の處から顯はれたと云ふのであるから、良辨大僧都も良興少僧都も意見の立てやうがなく、賛同したのである。あの達識な二人の僧侶の爲に私は辯じて置きたい」

「あの二人の僧都のことは、それであつたといひませう。法王に對しての叔父上のお考へを聞かして下さい。承はりたいのです」

それには永手は返辭をせずに、まじ／＼と雄田麿の顔を凝視してゐる限りだつた。

「何故返辭をして下さいませぬ。まさか私を不信にお思ひになつて、意中を打明けて下さらないのではないでせう。永く皇室の外戚たる榮譽を荷うてゐた藤原氏一族に、正しく今立つ可き時機が來たのです。河内國生れの祈禱師上りの破戒僧侶に、此三年間壓へ附けられてゐた家門の誇りを、今こそ取回す可き時期がやつて來たのです。私達の祖先の鎌足公は蘇我入鹿を誅伐して家門の基礎を立てられました。その役目が私達に廻つて來たのです。惡心の法王が冠ぶつてゐる善人の假面を剝し、その地位から退かせ得たならば、萬民は歡喜して、藤原氏の味方に

なります。然うして道鏡禪師に依て濁らせられた國の政治は清らけく明になるのです。藤原氏一族の爲ばかりでなく、國家の爲に法王をその地位から突落さねばならないのです」

「雄田鷹、誰もが云ふ急いで事は仕損ずると云ふ言葉を、お前はもう一遍考へて見る必要があらう。お前は時機が來てゐると云ふ。私は、まだその時機に達してゐないと思ふ。我等の一族の惠美押勝が謀叛人となつて、誅せられた死骸を埋めた墓所の土はまだ乾いてゐない。それ丈に國民は、押勝の行跡を心に銘してゐて、藤原一族に絶えず警戒の思ひを緩めず、忠誠一圖の念をもつて動くにしても、奥に野望を潜めてゐるのではないかと、猜疑の眼で見らるゝのは必定である。私達がお前が志すところに従つて動くのは、朝野の人の間から、然うした警戒心や猜疑心が拂拭せられた後にせなければ、猥りに宸襟を惱まし奉り、徒らに世を騒がしたのみで、失敗に歸して了ふであらう。」

私がかう云ふをお前は因循と見るであらうし、勇氣が缺けてゐると判断するかもしれない。或は然うであるかも知れないが、私が過して來た朝臣としての生活の經驗は然う教へてくれる。それに私はもう年齢を取り過ぎて、ものゝ役には立たない。今後藤原氏一族の繁榮を圖るのは、若い新進なお前の肩にかゝつてゐる。お前の考へを阻もうとするのではない。失敗をせぬやう、

細心な注意を拂つて、時機の熟するのを待つやうにと勸めるのである。專横はいつの世とて永續するものでない。

それから今一つ。然うしたお前の志を延べるのなら、押勝の謀叛で傷つてゐる藤原氏一族以外の忠誠な人々を、加擔人として味方につけて置く必要があらう。藤原一族以外の人の中には、存外法王に對して飽足らぬ思ひを抱いてゐる人が多いやうに見受けらるゝ、お前は然う云ふ人を物色するがいゝ」

永手はかうした意見を、淡々として述べて、その顔に少しだつて激情を示してゐなかつた。「叔父上がそれ丈け思慮をめぐらしてお出でになつたのを聞いて、私は嬉しう御座います。それで私は安心いたしました。時の來るのを待ちませうし、他氏族の忠節な人を、味方とするに力ませう。それから此事は私が専ら衝に當つて、叔父上はそ知らん顔で見えてゐて下されば、それで可いのです。屹度成遂げて御覽に入れます」

「それに就て聞いて置きたいのは、先刻お前は犬鷹に造らせる贋せ佛舍利の一組を、どう云ふ目的に使用するかを、はつきり話してくれなかつた。まさか法王の前に差出すのではなからうし、一體どんな考へがあつて造らせるのぢや」

「叔父上、そのことは私の一存にお任せ置きを願ひます。法王の前に差出して役立つ時が來ましたなら差出しも致しませうし、次第に依ては使用せず済むかもしれませんが、兎に角犬麿に作らせて置いて、使ふ場合には、叔父上に重ねて御相談いたしたいと存じます」

雄田麿は明答を避けたが、その唇邊には確とした畫策があるらしく、心豊に落附いた微笑を浮べてゐた。

法均尼の部屋

法均尼は毎日午後になると賜はる一刻間の休息を、自身の部屋へ下つて取つてゐた。自身が然うして休息を取つてゐる間は、畏くも法體であらせられ給ふ。聖上のお側近くには、彼女より年上である明基尼と、右大臣吉備眞備の娘の由利とがお仕へ申上げ奉つてゐるのである。

少女時代を越えた頃から、廣蟲の名の彼女は宮中の勤めをするやうになつたが、一旦お暇を

賜はつて、紫微少忠（皇宮職）の葛木戸主の許へ嫁いで行き、主婦の生活を送つたのも東の間、廿五歳で葛木戸主に死別すると、再び宮中勤めをするやうになつたのである。

髪を降してそれ迄の廣蟲の名を改めて法均尼となつたのは、一ヶ月以前で、畏くも此處法華寺を假の皇居となし給ひ、恐れ多くも御自身を佛弟子として法基尼と名乗らせ給ふ。聖上の御弟子となつたのである。もと／＼幼少から御佛信心の思ひは深かつたし、少女時代に父母を失ひ、良人とした葛木戸主とも死別れ、人の生命の無情迅速をそゞろに體驗し、御佛に絶つて心の安心を得たいと願つたのではあるが、その外に法體で有らせ給ふ。聖上の御側近くお仕へする身は、法體であらなければならぬとの、至純な忠誠の一念に起因するのであつた。然れば畏くも。聖上に於かせられては、側近の女官としての御信任のお眼を懸けさせ給ひしのみならず、弟子として法均尼に、特別な御慈悲の恵みを垂れさせ給ふて、從五位下を賜はれてゐるのであつた。その日も空は美しく晴れ渡り、冬とは思はれぬ程の暖い陽映しが四邊を輝かして、部屋の前面の廣庭の彼方に見える土塀の邊りに聳つ松樹を初め、その他の巨木の間には、種々の小鳥の囀り聲が宛ら何事かを語り、何事かを歌ふやうに交錯してゐたが、其れ迄座してゐた法均尼は然うした小鳥の聲を聞きつけると、

「お、いつものやうに小鳥達が、一點の邪氣のない御佛の國の歌を私に聞かさうとして唱つてゐてくれます。どれ／＼お褒美に餌をやりましょう。霜女、餌を入れた箱を此處へ持つて来ておくれ」

續く部屋に何か用事をしてゐた召使ひの婢へと聲を懸けた。

「はい、かしこまりました」

婢が稗や粟を納れた小箱を運んで来ると、法均尼はそれを取上げて、庭に面して降されたままになつてゐる葎の上半部にはめ込まれてある格子障子を、少しばかり押開き、顔を外へ差出すと眼敏くも小鳥達は發見けたらしく、法均尼がまだ餌を蒔いてやらぬ前に、雀は家根の上から、軒樋の邊りからと、地上に群がり飛降りて来て、馴れたのは法均尼の身近く餌箱や葎の端にとまるのもあつた。

「これ／＼餌箱の上にとまつては、尼が思ふやうに餌を投げる手が動かせぬ、降りてゐなさい。そんなに我慢を張らずとも、みんなと一所に仲善く餌を拾へばいいではないか」

人にでも言語云ふ如く雀に語つて、餌箱から、粟や稗を掴みだして、地上へ蒔いてやると、遠く松樹や其他の巨木の梢の間で囀つてゐた小鳥も、次第に啼聲を此方へ近く移して来たやが

て、地上へと舞降りて、先陣の雀に交つて同じやうに餌を啄み初めるのであつた。

それを樂しさうに眺めて次ぎ／＼に餌を蒔いてやる法均尼の顔は、此世からなる御佛の慈悲の相貌その儘であつて、高々しくも見られた。折柄東大寺の午後の看經時を報知す鐘の音が股々と傳つて来ると、彼女はそれと心附いて、もう半ば空にした餌箱を側に引添うて立つ婢の手に渡し、腕にはめた念珠を掌に直し、東大寺の方を向いて禮拜した。恐らくその眼の底には東大寺の毘盧舍那佛の尊像を描いてゐて、敬虔な思ひに心を引緊めたのであらう。

彼女が禮拜を終つた時、今一人の婢が側へ寄つて来て、彼女の弟の清鷹が訪問れて来たのを告げた。

「清鷹殿が来ましたか、直ぐ此處へお通ししておくれ」

然らば婢に伝咐けて、一旦其方へ向けてゐた顔を、又も餌を拾ふ小鳥の方へ回し、

「それでは小鳥達、明日お天氣でしたら、また逢ひましょう。今日は左様なら」

小鳥に別れ言葉を述べて、靜に格子障子を閉ぢて、以前の座に戻ると、もう和氣清鷹は婢に案内せられて、部屋の中へ這入つて来てゐた。

「姉上様つひ心にもなきお無沙汰を致して居りました。此頃は職務が忙しう御座いますので、申譯がありません」

姉と對向うて座した清麿は、其處へ手を突いて慇懃な禮を行つてから述べたが、姉に對すると云ふよりも、母に逢ふかの如き恭謙な容子が見られた。

「職務で忙しい中を、態々来てくれるに當りませぬ。閑な折を見てかうして訪問してくれるのが私の望み、私も毎日相變らずの忙しい日を送つて居ります」

法均尼が清麿に云ふ言葉にしても、姉と云ふよりも、母のやうな慈愛が籠つてゐた。それと云ふのが、年齢こそ二歳違ひであつても、父母亡き後は法均尼が清麿の世話を一切引受けてゐたのであるし、寧樂の都へ二人連立つて生れ故郷の黄備國和氣郡藤野郷を後にして出て來たのは、姉の法均尼の廣蟲は十五歳、弟の清麿は十二歳であつて、或人の許に寄寓してから、清麿が大學寮の下級に入學して毎日通ふのを、廣蟲は母代りになつて何から何迄面倒を見てやつて

ゐたのである。その間に廣蟲にしても尼院へ通つて、故郷で習つた読み書きをその上にも勉強し、女の手藝、佛書の講義を、課目として受けたのであるが、清麿は漸次に上級に進み、然うして清麿が首尾よく大學寮を卒業して官途に就た頃には、廣蟲は既に宮中に仕へてゐたのである。

「一昨日はまた種々と頂戴物を致しまして、妻も小兒達も一同大悦びで御座いました。厚く御禮を申し上げます」

「何のその禮に及ばう。其方の家は私の里、家族の者が家族の者に贈物をしたからと云つて、改まつた禮を述べるには當りませぬ。その時添へた書狀を、お前様は讀んで下されたか」

「はい、確に拜見いたしましたして御座ります」

「あの書狀にも書いた通り、法王様は特別に尼にお眼を懸け下され、引いては和氣の家のことをお心に止められて、種々とお慈悲深い言葉の數々、お前様は忘れぬやうにするが可い。御所へ忠勤を勵むのが第一であるのは云はずとも解つてゐよう。法王様は大政大臣を兼ねてお出で遊ばし、日本國中の政治を司つてお出でになるのであるから、その次ぎの忠勤心を以てお仕へするやうにしたがい」

「はい。そのことは姉上が仰せらるゝ迄もなく心得て居ります」

清麿は柔順に頷いて答へたが、直ぐしかしと云ふ言葉が舌の上のぼりさうになつたのを、ぐつと壓へて、今日姉に逢つて云はうとした思ひを、もう一遍心の中で吟味した。云ふ迄もなくそれは法王が姉に語つた、法王の血統のことや、それから豊永の警告を含めた言葉やらであつた、昵つと沈吟してゐると、

「お前様、法王様の血統に就て私が書状に書いたのを讀んだであらうが、其方は何と考えます、私もそのやうな噂を聞いたこともあつたが、法王様のお口から直かに聞きしたのは初めてで、やはり眞實であつたかと、私は吃驚りしたのでした」

姉の方から云出してくれたので、それを機會に清麿はその言葉に乗つて往つた。

「私の考へなぞ何がありません。然うであつたかと思ふばかりで御座います。しかし私は法王は河内國弓削寺の邊りでお生れになつて、筑紫國太宰府の主神である中臣習宜阿曾鷹殿と同じやうに、饒速日命のお子孫でおありになると承つて居りましたので、今後はそのやうに思直さうと存じます」

「有り様は私にしても饒速日命のお子孫であると、餘程以前に聞いて、然うとばかり思つてゐ

たのでした。氏素性血統は誰しもが、立派な上にも立派なのを望み、大勢の人の中には造り上げる人もあると聞いてゐます。苟且にも法王のお口から出た言葉であるから、間違ひのあらう筈はないが、其れにしても血統を誇る藤原氏の人達が聞いたなら、どんな批判をするやらと考へられもするので、先づお前様の思惑をきいたのでした」

「姉上のお心付きになつてゐるやうに、法王が法王御自身にお語りになつたお血統であるとするれば、普通朝廷にお仕へしてゐる者が、自分の血統の尊いのを明かにしたよりも、遂に影響は大きいと存じます。藤原一族はそのことを聽いて、然うであつたかと一應は承認して頷いて見せますものゝ、陰では何と申しますやら、いや藤原一族ばかりでなく、他の氏族の人の間にも、そのやうな人がないとは限りませぬ。この事はもつと／＼悉しく法王が事實を證明なさる方法を、お取りになつた方が可いやうに思はれます。法王がそのやうなことをお聞入れになつたら、お不興であらせらるゝでせうが、姉上様の前故に、齒に絹を着せず素直に中上げます」

法王に好意を寄せる姉であるので、かうも云つたなら、必ず不機嫌な顔を見せるであらうと、清麿は姉の顔色を窺つたのであつたが、意外にも法均尼は大きく頷いて見せた。

「姉上には私の考へにお同意下さいますか」

「はい。其方の考へが尤もだと思ひます。法王様は位人臣を極め、その上に今迄に人臣では日本國に一度もなかつた王と云ふ名のお就きになつたのであるから、何事にしろ輕々しう舉動ふてはならず、口にせられたことは眞實であつて、何人をも承服さすやうにせられねばならない。人心を安める爲に、證據をお立てになつた方が可いと存じます」

「然うしたお考へであれば、今一つ申上げます。姉上にしても私にしても、巫女の紀朝臣益女が粟田道鷹、大津大浦、石川永年等と結托して、道鏡禪師を呪咀して誅伐されたのを見ました。遡つては惠美押勝の謀叛、猶遡つては橘諸兄卿の子奈良鷹が、多くの朝臣を語らつての隱謀、二つ共に稜威の下に誅に伏しましたが、高樹は風に動搖らるゝ警言葉の通り、法王を首座とする現在の朝廷の政治に對し、いつ何處にどんな隱謀が潜んでゐるやも知れず、また位人臣を極めた例へば法王のやうな方が、次に如何なる榮譽を望み、榮達を掴まうとしてゐらるゝやらと、多少の危倶心は、朝臣庶民の間を通じて云はず語らずの中に動いてゐるらしく思はれます。治る太平の御代にかゝる忌はしい思ひを持ちますのを、姉上はお叱りなさるかも知れませぬが、事に先立つて憂ふるのが、朝臣の本分で御座いますから、私の心に浮ぶまゝをお耳に入れて置

きます」

「何の叱りなぞするものか、其方が朝廷へ御奉公の忠誠の志として私は喜びます。朝臣庶民を通じて、法王様に對し、然うした考へを少しでも持つてゐるのであれば、猶更以て眞實天智天皇の御孫の皇子の第六子であらせらるゝにしても、今迄餘り世間に知られなかつたお血統のと故、證據をお立てになる方が、法王様のお爲にも善いでせう」

法均尼は其邊迄云ふと、言葉を切つてまじく／＼と弟の顔を睨つたが、昵つと考へる態を見せ

てから。

「其方が今云つたやうな事柄に就て、法王様御自身にもお心遣ひがあるらしく思はれます。時折私達と輕くお話し遊ばすお言葉の中に、人間に若し嫉み心がなかつたなら、自身を勵ます術を半分は失ひはするが、嫉み心は本人に取つて辛いものでもあるし、況して嫉みを受ける者は猶更以て辛い。藤原氏でない自身が、かうした位に就いてゐるのを、妬み嫉みしてゐる輩合は數有らうとお笑ひになります」

法均尼は弟の言外の意を察してゐるらしく、眼は聰明に輝いてゐた。

「それに就て、私は一昨日の法王祝賀式の歸途に、路真人豊永殿と一所になりましたが、豊永殿は姉上にくれぐれもよろしく申傳へてくれと申された上、姉上が今後とも諸人に譽められるやうに忠誠を抽んじ給ふのを願つてゐると申し添へられました。その言葉の裏に、女官として高御位の側近に侍する姉上は、諸事慎重の態度を取つて頂きたい。古來から宮中の女官は得てして、時の權臣の隠謀の中に捲込まれ、自己は知らずして隠謀の手先となるやうな状態が度度あつたからとの意が讀まれました。忠誠に就ては何人にも劣り給はぬ姉上に、かゝることをお傳へいたしますのは、弟としても申上難く、止しに致しましょうと存じましたが、それは豊永殿の意蘊を中途に遮ぎる、友情に缺けた處置になりますので、お耳に入れて置きます」

然うと聴くと法均尼は、強い衝激を受けた容子を見せて、顔色さへ變へた。弟の顔を凝視つたまゝ直ぐ言葉を出し得ず、眠つと沈吟してから漸くに口を開いた。

「豊永殿は亡き良人とは尤も親しかつたお方、奇矯なお性質ではあるが、皇國を思ふお心の深いのを、亡き良人も語り、私も能う知つて居ります。その方が然うした思ひをほのめかされたのは、ひし／＼と私の胸にこたへます。豊永殿は佛舍利が世に顯はれた功德を、宮中にお仕へ申す私が崇め讃へ、その後になつて法王禪師が法王の位に昇られたのを諷されたものであらうと考へられます。清鷹殿、私は佛舍利の顯はれた功德は、今も變はらず讃へて居りますが、それに依て起つた出來事は、總て大臣參議の御方々の奏上に基づいて行はれたのです。それでゐるのに私が、聖上の御側に仕へ奉る恩寵に慥つて、恐れ多い内奏を遂げたなどと、世上に云ひ觸らされてゐると、先頃或人が親切心に告げてくれたので、私は内心安からず思ひ、恐懼して居ります。そんな女官の分限を超えた所業を爲る私か、私でないかは其方には解つてゐよう。此事を豊永殿に話してくれても善し、話さなくても關ひませぬ。忠誠の一念しか外に思ひのない私は、一切を歸依し奉る御佛のお加護に任して居ります」

「そうと承つて私も安心いたしました。姉上は佛舍利に就ては、今迄私に功德をお讃へになるお言葉の外、何事も聞かして下さらず、いろ／＼に傳へる世上の噂が耳に這入りましても、申上げてよいやら、悪いやらと、ひとり心を苦めて居りましたが、之で晴々といいたしました」

「今日は佳い日であつた。其方に今迄話さなかつたことも語り、其方も私の知らぬ事柄を話してくれました。時折はお互に時候の挨拶や、身の養生の話ばかりでなく、かうした話をした方がよいと思ひます。私が念を押す迄もなく、其方は飽迄も御奉公大切に、御先祖の名を辱かしめぬやう、和氣の家名を世上に顯はすやうに頼みます。私が手紙に書いた法王様へも忠勤を勵んでくれいとのこと、私は強ひませぬ。其方の正しい判断に任して、いゝやうにするがよい。私は唯法王様がいつも藤原氏に氣兼ねさるお言葉をお洩らしになるのを氣毒に思ひ、それから今迄の朝廷で藤原氏が餘りに専横であつた事蹟を知つてゐるので、女心の氣弱さから、其方は法王様のお味方になつて上げたが、と思つたのでした。宮中にては自然と世間の事情に疎くなります。之からはお奉公の爲にも、出来る丈け世の中の動きを知るやうに力めねばならないと、私はつくづくと感じました」

「姉上がものゝ理非曲直を、いつも明にしようと思懸けておいでになるお心を、清麿は感心いたします。それから私のことは、御先祖の弟彦王が應仁天皇の御代に、忍熊、魔坂の亂をお平けになつた功績を、いつも心の中に忘れずに刻みつけて居りまして、その血潮を受嗣いだ清麿は、いつ何時たりとも皇國のお爲に、生命を投出す覺悟で居ります」

法均尼は清麿が眉宇の間にも堅い覺悟の程を示して語る言葉を聴くと、愉しげに頷いたが、不圖氣を變へて、

「其方に聞いたなら判るであらうが、先刻お庭先で仕丁達が二月堂の枯野原の中に、何人か殺害されてゐて、鳥の立騒ぐので發見けられたと話してゐるのを耳にしましたが、そのやうな御佛のお心に背く無殘な出来事がありましたか」

「はい。御座りました。私は検視の役に參つた者から委細を聴きましたが、殺されてゐましたのは、法王廳の基眞禪師の家來で、馬麿と申す者ださうで御座います。平生から酒癖が悪く、身行狀も悪かつたさうで、大方他人に恨みを買ふやうな舉動ひをいたし、それでそんな非業な最期を遂げたのであらうと、申すことで御座いました。もつと悉しいことを申しますと、昨夜その馬麿が何れかの館の家來らしい男二人に、左右から手を取られて、其方へ引かるゝやうにして往つたのを、眼にした者があると、検視の役人は私に話してくれました。何にしても忌はしい事柄で、刑務局ではどうでも犯人を探出し、御法通りの所刑をせねばならないと、意氣込んでゐる模様で御座ります」

「殺害されたのは基眞禪師の家來であるとは、お氣毒な話。鳥犬の生命と雖も、猥りに奪うて

はならないと御佛は教へてゐ給ふのに、よしや恨みがあつたにせよ、殺めて人の生命を奪ふとは浅間敷い、此世ながらの地獄道。未來への成佛は愚か、生き永へてゐても御佛のお恵みはよも得られまい。諸人への見せしめ、殺めし悪人は捕へて、因果應報の教へを思ひ知らすやうにせねばならないであらう」

「姉上、それでは私に之でお暇をいただきます。折角の御休息の時間を長咄でお妨げいたしました」

「お歸りか、私ももうそろ／＼と出仕せねばならない。その中にまた来て下され、嗣子殿に子供達を伴うて見せに来てくれるやうに傳へて下され」

清麿が恭しく禮を行うて歸つて往くのを、法均尼は次の室の境迄見送り、後は客來の折には談話を耳に入れぬやう二室隔てゝ扣へてゐる婢達に任して、法均尼は座へ回つて往つた。

東大寺境内

一

姉法均尼の部屋を辭した清麿は、法華寺の門を出て、外の大路に立つと、道を左へ取つて歩いた。家への歸路ならば法華寺門前を右へ少しばかり往つて東西に通じてゐる大路を左へ曲る可きであるのに、然うせないのは、東大寺詣でを思立つたのである。姉を訪問れてその部屋へ這入つた時、姉が東大寺に向つて禮拜してゐたのを眼にして、暫時足を向けなかつた毘盧舍那佛を拜したいと思つたのであるし、その尊像の前に飾つて參詣の諸人に拜觀を許してゐる佛舍利を、更に心に飽く程眼にしようと思ひもした。兎角に此頃は佛舍利の噂が姦しく、誰彼と話をすれば必ず佛舍利の話が出るのに、清麿は僅に一度、其處へ飾られた當時に拜觀した限りであつた。

歩む程に清麿は今別れて來た姉と話した事柄を次ぎ／＼に頭腦の中に思回へしてゐた。姉が

法王に對する世評や自分の考へを述べたのを、素直に受納れてくれたのが悦しかつた。姉の心の純真さ、自分をいろ／＼と深く思遣つてくれる肉身の愛情に感泣する念慮ひが湧いた。然うして姉にも話した基眞禪師の家來の馬鷹が殺されたことに及ぶと、卒然として自分が基眞禪師その人に、非常に飽足らぬ思ひを抱いてゐるのを發見した。

基眞禪師の聲が皺枯れてゐるのが、その心に朗さと、善良さを缺いて、烏のやうな狡猾さを湛へてゐる表徴のやうに感ぜられ、その容貌にしても色の黒いのは兎も角として、苟且にも經文に親むものであれば、眼は信仰で澄む可きであるのに、それが然うでなく、鼻は稍扁平に賤しく、分厚な唇を持つ大きな口の邊りには、傲慢、多辯、強情らしい性情の陰影が見られるのであつた。

「法王にして心から一世の信望を博し、法王の地位を輝しいものにしようと思召してゐらるゝのであれば、先づ以てあのやうな印象を何人にも與へる基眞禪師を、御自身の左右から退けるゝのが可い。寧樂の都に住む心ある程の者は、一人として基眞禪師に好感を寄せてゐないではないか」

然うしたことが考へられた。基眞禪師が邊鄙な山科寺から、法王廳の法參議の榮職に登つた

のが、若し僧としての學識や、徳望や聰明さであつたならば、批難をする人もなからうが、よしそれは國寶に價する佛舍利を發見して獻上した功勞に依るとは云へ、何かしら不純と感ぜらるゝ阿諛、迎合、野心と云つた不徳の影と結附いてゐるやうに、諸人が目してゐるのを、清鷹は知抜いてゐた。それは法王たる道鏡禪師に對する地下に潜んで囁く妬聲や不信の聲と、縋ひ交ぜての行爲かもしれないが、事實基眞禪師は上長の人に對しては阿諛的に膝を屈し、自己より少しでも眼下の者には、爲さでも善き傲岸さを見せて、日毎に人望を失ひ、烈しく惡口する者は賣僧とさへ呼んでゐるのを、清鷹は幾度も耳にしてゐるのである。さうした基眞法師が、山科から共に伴うて來た腹心の家來を何人かに殺害されたのであるから、果してどんな處置に出るであらう。家來が殺害せられたのに就て、基眞禪師には何等の關りもないのであらうかと、云つたやうなことも考へられた。

陽はまだ高かつた。雲のない空には鳶が輪を描いてゐた。東大寺の邊りに近づくにつれて、四邊は參詣の人の姿が茂くなり、通り筋の兩側には農耕の道具や、機織りの小道具や、糸紡ぎの道具や、厨道具などを賣る露店が連つてゐて、それ／＼に客を集め、それから葭簀で圍ひをした葛湯や飴湯や酒賣る店も幾つか在つて、其處からは笑ひ聲や高調子の話聲が聞かれた。寧

樂の都人や近郊からやつて來た庶民達が、治る御代の安らかさを樂み、御佛の功德に浴して、現世の極樂に隨喜してゐる姿でなくて何であらう。

然うした人の雜沓を通抜けて清麿は境内へと足を踏入れた。寧樂の都の何處からも眺めらるる大佛殿の思切つて高い宏壯な建築は、正面に空を區劃つて仰がれ、其處へ達する迄の參道の兩側には、松樹の巨幹が聳ち、清楚と壯嚴とが四邊を支配してゐた。此處迄くると清麿は、いつでも想起することがあつた。

今から十五年以前の天平勝寶四年四月九日、寧樂の都は清々しい若葉で包まれてゐた佳き日に、女性で在す 聖上は、文武の百官を率ひて御幸せられて、大佛の開眼式は行はれたのであつた。美しく装ふた二十人の稚兒が、 聖上の御座の邊りを淨める撒華を行ふにつれて、梵鐘は鳴渡り。顆多しい數の僧侶の讀經の聲は、春風にのつて離れた街衢の上迄傳つて往き、佛前で炷かれる薰香のかほりは天空迄も罩めるやうに瀰漫してゐたし、讀經が終ると、續いて妙なる音樂が響いて來て、遅咲きの八重櫻匂ふ堂前に設けられた臺の上で、無垢の乙女とその道に堪能な者達に依て、舞踊が催されたのであつた。それを遠くからでも拜觀しようと、庶民達は遠く難波津の邊りからも押寄せて來て、寧樂は空前の賑ひを見せてゐた。

その時清麿はまだ大學寮の學生であつて、他の生徒達と一所に、すつと後方ではあつたが、兎も角も式場内の一角に立ち得る光榮を有しはしたが、餘りとは壯麗、餘りとは豪華燎亂たる光景にうたれて、男子と生れし甲斐には、我れ若し仕官したならば、今日のやうな盛儀には、天顏に咫尺して立ち得られる地位に登らずばと、若き血を沸ぎらしたものであつた。

その日も清麿はやはり然うしたことを想起して、何とはなしに微笑ましい氣もしたが、若き日の然うした野心は、一種空莫なる夢であつて、仕官して上位に昇らうとするのは、自己の才幹を盡して、國家に滅私奉公の忠誠を致すに依て、初めて人間としての意義があるのに、其處へと心附かなかつた若さと、未熟さに苦笑せらるゝのであつた。

清らけく白沙の敷かれた參道を、大佛殿の前に到り、高い敷居を超えて、殿内へと這入つたが、高さ五丈三尺五寸の結跏趺座の御像は、いつ仰いでも人間の小ささを示してゐ給ふやうに思はるゝのに、しかもそのお容貌は慈悲と愛憐に満ち溢れて、温いお優しいお眼で見降してゐ給ふのであつた。廣い殿内には二三十人程の參拜者があつたが、疎らに見られたし、急に人間が小型になつたやうに感ぜられた。數多くの燈明が奉獻せられてある前で、清麿は短い經文を唱へて禮拜し、禮拜を済すと、その前面の右方にまつられてある佛舍利の方へ歩みを移した。

折善く其處には三四人の信心者が禮拜してゐる限りであつた。高脚の臺の上に載せられた白木の箱の上部に、手が觸れられないやうに金網が張られ、その内部に更に小筥があつて、尊い佛舍利はその小筥の中に敷かれた白綿の上に安置されてあつた。

世界に佛法を擴布せられた釋尊の、以前は御内體の一部であつたのかと、敬虔の思ひに合掌一拜してから、近く眼を寄せて清鷹は覗き込んだが、以前見た時と同じやうに米粒程の大きさで、數は五つ、鈍い光りを持つてゐるのが眼に映じた。此の小さな佛舍利が、朝廷に新に法王と云ふ位を設けしめ、大政大臣であつた道鏡禪師は、一世が驚異の眼を向ける中で、法王の椅子に就いた變革を齎したのであるとの思ひが、念頭に上つて來て、功德の佛舍利よりも、威力の佛舍利の方を餘計にしのばしめた。

その時であつた、耳近く。

「清鷹殿」

と呼ぶものがあつた。回顧ると、其處には思懸けなくも左中辨侍從で河内國守護を代行してゐる藤原雄田鷹の姿が、身近う立つてゐるのであつた。

「貴方もお参拜で御座りましたか」

清鷹は自分よりは地位の高い人として、敬意を見せて雄田鷹に一禮した。

「貴方も御参拜でしたか、熱心に佛舍利を拜しておいでになるのを、先程から離れて見て居りました」

雄田鷹の聲には格別變つた調子はなかつたが、何かしら佛舍利を嘲笑するやうな響きがあるやうに清鷹には感ぜられた。

「私は一度しか佛舍利を拜して居りませぬので、今日再び拜しに参りました。貴方は之からの御参拜ですか」

「参拜はもう済ましました。明日邊り河内國へ歸任致さうと思ひますので、貴方と同じやうに毘盧舍那佛拜禮かたゞ佛舍利の拜觀に参つたのです。貴方はもう拜觀をお済しになつたやうに見受けますが、それでは其邊迄御同道いたしませう」

雄田鷹が動きだしたので、清鷹はそれに續いて大佛殿の外へ出た。自分に佛舍利のことを云つた時に嘲笑するやうな響きがあつたばかりでなく、雄田鷹自身で佛舍利と云ふ時に、嘲笑の笑みを唇邊に浮べたのが清鷹には氣になつた。

「貴方とは大學寮では同級生であつて、あの頃はお互に若く、能く議論もし、點數の競争もして、心から親み合ひしましたが、此頃では時折しかお目にかゝられず、以前のやうにしげくお話をする機會のないのを、不本意に思つて居ります」

雄田鷹の言葉は慇懃を極め、態度にしても官位の相違などを念頭に置いてゐないらしく見られた。二人は雄田鷹が述べたやうに、年少時には大學寮で同級生として机を並べて睦合つたのである。雄田鷹の方が一歳年上であつたが、清鷹と同年齢で現在朝臣として羽振りのいゝのは藤原種繼、紀黑鷹、藤原家鷹等で、みな同級生であつた。

二人は肩を並べて參道を表通りの方へ歩いて往くと、庶民の參詣人は貴人と知つて側へよけた。清鷹の方が背が高く、武官として劍を提げてゐる所爲もあつて偉丈夫に見えるのに、雄田鷹の方は色白の凜然たる容貌はしてゐるものゝ、文官らしく身體の線は細く、神經質に見られた。

「清鷹殿、貴方は此頃大學寮を訪問れになつたことがおありになりますか、私達が學んでゐた頃に較べると餘程學風が變り、専ら過激な唐朝の學説が疏述されてゐると聞いて居ります。もとより然うした傾向は、以前とて寮長が吉備眞備殿であつたので、多少はありましたが、近來はそれに輪を懸けて、本朝の根本義に適せざる堯舜の皇位交替の歴史を推稱するのは、まだしも可いとして、安祿山の事蹟をも、肯定する言説を、誰れ憚らず演舌してゐるさうです。貴方はお聴きになりませんか」

「大學寮は暫時参りません。しかしそのやうな不純な學説を高唱してゐる生徒が増え、唐から歸朝した教師達が、それを不問に附してゐるばかりか、却てそれを増長さすやうな講義を行うてゐると承つて、何とも嘆はしい次第であると思つて居ります」

「此儘に放擲して置いて、然うした學説が横行することになれば、萬世一系の大御代の尊嚴は失はれます。監督の地位にある法王初め左右の大臣方は、多分お存知でない故からであらうとは思ひますが、早くお心付きになつて、鎮壓か、譴責の處分を執行せらるゝのを望みます」

「貴方の御親戚の藤原永手卿は左大臣で被入せられます。直接貴方から左大臣にお申入れになつて、然うした處置が取らるゝやう、お運びになつては如何でしょう」

「いや、それはなりかねます。右大臣たる吉備眞備殿が今も大學寮の寮長を兼ておいでになるので、永手叔父は一階段上の同僚であつても、非を擧げて責めることになり、永手叔父としては出来難いでせう」

「それも事柄に依りけりで、國家のお爲めにならぬことであれば、進んで處置を取られるのが當然であつて、是非然うして頂きたいと、私は心からお望みいたします」

今三十間程進めば、露店の出でゐる賑はしい表の大通りに出られるのであつたが、其處に右へ曲つて行けば横門へ通ずる閑靜な小徑を眼にすると、

「清麿殿、此方から参りませう」

雄田麿は然う云つて其方へ曲つて行くのに清麿は異議を云はずに従つた。雄田麿は従者二人をつれてゐた。一人は松麿で、今一人は梅麿と云つて、やはり腹心の家來であつた。先刻から主君と清麿が参詣人の行通ふ参道を歩きながら話してゐるのに、人や偷聽くと絶えず警戒の眼を配り、五六歩隔つて後から従つてゐたが、全く人影のない小徑へ這入つたので、初めてホツトしたらしく、二人限りで微笑の眼を見交して、猶も注意の眼は怠らなかつた。

「清麿殿、大學寮が然うした學説の温床のやうになつてゐるのを、吉備右大臣は、全然お氣が

附かないのであると、貴方はお思ひになりますか」

「さあ入唐して儒學の奥儀を究め、歸朝後アイウエオの子音母音の片假名を創始された、學は日本開闢以來の人と云はれ、又古今東西獨歩と稱せらるゝ吉備右大臣のことですから、些細な思潮異變にも、お氣付きにならない筈はないと思ひはしまするが、此頃は他の政務に忙しく、大學寮の事務一切を擧げて寮主事の藤原家麿殿にお任し限りなので、或はお存知ないのではなにかとも思つて居ります」

「若し吉備右大臣が心附かずに居らるゝのであれば、寮長としての職務の怠慢であり、知つて行はしめてゐるのであれば、その罪や大なりです」

雄田麿は稍激越な口調で云つたが、直ぐ平靜な言葉に回つて、

「貴方は垂仁天皇の皇孫弟彥王をお先祖としてゐらるゝお方、大學寮在學當時、私等と屢々議論を戦はし、皇國は肇國より、神を崇敬するを以て不動の國の掟とし、よしや欽明天皇の御代に佛教は渡來して、方今は畏くも天皇御自ら法體とならせ給ふと雖も、治國泰平の要は依然として神を崇敬する念慮を基調と爲さねばならないと、貴方も私も高調したのでしたが、そのお考へは今ともお變りないと思ひますが、如何でしょう」

「仰の通り少しも變つて居りませぬ。君君たらずとも、臣は臣たる道を盡さねばならないと、大凡そ唐朝の現在持つ思想とは全く反對の學説を奉じ、皇國が他邦とは全く異なる萬世一系の皇室を頂くのは、日月の輝く如く誇る可き事柄であつて、その皇室の御祖先であらせらるゝ神こそ、皇國の守護神であらせられ、日本國民は神を崇敬し奉る心を、日常の生活に具現し奉ることに依り、初めて日本國民たり得るものであると、堅く信じて居ります」。

「有難う。然うしたお考へを、現在瀾る唐朝傳來の思想を排して、少しもお變更になつてお出でにならないのを悦びます。私の家柄に就ては改めて申述べずとも、お承知のことだらうと信じます。佛法を信奉しては居りますが、飽迄も敬神の觀念の次に位ゐさせて居ります。然うして見れば、貴方と私とは思想を同うし、主義を同うする同志なのです。同志の一人として今後お交りしたいと思ひます」。

然う云つたかと思ふと、雄田鷹はつと手を延ばし、肩を並べる清鷹の手を取り、それを堅く握りしめるのであつた。何故に急速にかうしたことを云出し、かうした舉動をするかと、清鷹は多少は怪訝の思ひを抱き、多少の警戒心も持たれたはしたが、口にしたことは不動の自分の信念なので、躊躇はらずに、同じやうに雄田鷹の掌を堅く握り回へした。

雄田鷹はつと歩速度を緩めてゐた。悠々とその邊を、漫歩するやうな足並になり、時には佇止つて話をするのであつた。清鷹としてはそれを打捨て、前へ進み得ず、雄田鷹の足の動きに習はざるを得なかつた。

「貴方は今吉備大臣は現在の大學寮の思潮を氣附かないのであらうとお話になりましたが、私は然うとは思ひませぬ。萬々承知の上のこと、ひよつとすれば吉備右大臣に然うした思想を鼓吹するお考へが、あるのではないかと疑つてゐます。私達藤原一族に吉備眞備殿を排斥する考など、毛頭ありません。あの方の學殖は飽迄も尊重いたします。只不満に思ふのは、その唐崇拜の精神なのです。吉備眞備殿は道鏡禪師に依り、初めて臺閣の大臣の地位に昇られ、道鏡禪師を徳とし、禪師の爲には履の紐も結び兼まじき恩惠を感じてお出でになるのは、推察し得らるゝのです」。

清鷹殿、法王道鏡禪師に就て、忠節貴方の如き方、破邪顯正を愛する貴方の如き方が、快く思つておいでにならないのを承知して居ります。在寮時代貴方と交際して貴方が剛毅、清節、廉潔、忠誠のお方であることを、私は深く感銘して居ります。然うした貴方の御氣質なり、精神が、道鏡法王の現在の國家を毒する放恣專横、飛ぶ鳥をも落とす權勢を、どうして快く思はれ

ませう。お互に釋然たらざる道鏡禪師に、吉備右大臣は好意を寄せ、恩恵を感じてゐらるゝのです。

殊に不思議とする一事は、此頃になつて急速に、何人が云傳へるのか判然しませぬが、道鏡禪師は畏れ多くも天智天皇の御孫皇子の第六子であると、彼處の街衢、此處の裏小路と語り交はされ出して來たのです。道鏡禪師は皇族の御血統であらせられると云ふのです。かうした云傳への出所なり、噂の聲と、大學寮にての現在の思潮との間に連繋はないものでせうか。ないと斷じて可いものでせうか。

雄田麿は清麿の顔を覗込むやうに凝視した。

三

清麿には直ぐ返辭は出来なかつた。雄田麿の新に述べ出したことは、自分としても尤も懸念する處であつて、先刻は自分が進んで姉法均尼に懸念の一端を語り聴かしたのであつたが、雄田麿はその汚濁の中に、自分は忠誠無二と平生考へてゐる吉備右大臣を播込まうとする言辭が

弄せられてゐるのであつた。雄田麿の視線をまともに受けて、少し考へる態を示してから、

「法王の血統のことが新に語りだされたことと、大學寮では唐朝崇拜の思想の間に、明に連繋があるのであれば、一大事であつて、私達腰に佩びてゐる劍を磨かねばなりません。連繋があるとも、無いとも、私としては申上げ兼ねます。判斷して申上げる何等の材料をも私は持つて居りません。しかし危機は徐々に發芽しつゝあるやうに感ぜられます。貴方のお言葉では、吉備右大臣がその危機の發芽に、肥料を施してお出でになるやうに聞かえますが、なる程吉備右大臣は法王の恩恵を感じてはゐられるでせうが、天下の法則を正しくすることを以て自己に任じ、公平無私、忠誠の念に強いお方であると私は信じて居ります。法王に恩恵は感じておいでになつても、若し法王が分を亂すやうなことがあれば、それに味方はなされないでせう。その點貴方と少しく見解を異にして居りますが、大學寮の現在の思想の動きに就ては、責任はお有りになると思ひます」

「藤原氏一族以外の氏族の人達は、何人に限らず吉備右大臣を惡しざまに批評する人はありません。忠誠の人として思込んで居り、強ひて思込まうとして居ります。藤原氏一族を嫉視する思ひの半面であつて、吉備右大臣に依て、藤原氏と拮抗する人物を得たと見てゐるのです。何

故そんな態な思ひが、他氏族の朝臣達に漲つてゐるのか。理由は私に能く解つてゐます。過去に藤原氏が餘りに政權を專斷し、專斷した擧句に、惠美押勝の叛亂を始め、藤原廣嗣の叛亂と、藤原氏一族の中に叛亂人を出したばかりでなく、勝寶八年六月に橘奈良麿が叛亂を企てたのは、當時の政府首腦者たる押勝を倒さんが爲めであつて、何れにせよ藤原氏一族に關係がない叛亂はなく、それは餘りにも藤原氏一族が政權慾が烈しいからであるとの非難を、一様に抱いてゐるからです。

清麿殿、貴方が吉備右大臣を忠誠の人とし、公平無私の人として信じておいでになるのであれば事實の證明を將來に期して、大學寮の過激な現在の思想には、大學寮長たる吉備右大臣にも責任ありとのお言葉に満足して、最早吉備右大臣に就ては語りますまい。只御了解して頂きたいのは、私が先刻から種々と申す言葉は、眞に國家を憂ふる餘りの考へであつて、私が藤原氏一族であるからと云つて、藤原氏一族の政權慾から發足した言葉ではありません。私は藤原氏一族から押勝や廣嗣のやうな叛亂者の出たのを恥ぢ、その償ひを、上、聖天子へ、次に國民へ爲さねばならないと覺悟して居ります。然う致さねば藤原氏に對する一般の信用は回復せず、私が忠誠の一念から申します言葉も、政權慾への何かの類はれであらうと誤解される恐れ

があります。特に此事を貴方にお盟ひいたします」

「私如き者に對してお盟ひ下さるとは、私の分に過ぎたる光榮です。貴方のお覺悟やお胸中の程は清麿能く了解いたしました。今後は國家の禍害と思ふことは、何處々々迄も、御協力申上げて除きたいと存じます。また腹藏なく申上げてお意嚮を承りたいと思ひます」

藤原家の嫡流である雄田麿に清麿は謙讓の態度を見せて、慇懃に述べた。

「それを承つて安心いたしました。貴方には御信任の厚い姉君法均尼殿がおありになつて、私が貴方に語ることは、法均尼殿に合せて語るやうな心地が致しまするが、之から申述べることはお姉上へもお洩らしたになつてはならない國家の重大事をお聞きに入れます」

莊重に言葉を切つて、雄田麿は四邊を盼した。小鳥の啼聲が森閑とした境内を支配して、四邊に人影はなかつた。小徑を最早二町程歩いて、稍隔つた處に、街衢へ出らるゝ横門がもう見えてゐた。雄田麿が手を振つたので、離れて従つて來た松麿も梅麿も足を佇止めた。

「國家の重大事とは」

清鷹は雄田鷹が容易に言葉を續けようとしないので、思はず彼方が語るに先立つて訊いた。「左様國家の重大事です。貴方が毘盧舍那像の前で、今御覽になつた佛舍利は、眞赤な贗せ物で、人の手で作られたものです。それを作つた者が私の館に居ります」

清鷹は大きな衝激を受けた態を、隠す處なく容貌に見せはしたが、信じ兼ねたのであらう、返辭も間回へしもせず、雄田鷹の顔を凝視した限りだつた。

「お驚きのこと、思ひます。信じ兼ねるとお思ひでせう。しかしそれは間違のない事實です」

こう前置きして雄田鷹は聲を低めて、犬鷹が河内國で盗みをして自分が捕へたこと、然うして佛舍利を基眞禪師の指圖の下に製作したことを白状したことや、それから犬鷹は法王廳の基眞禪師を脅かした上、弓削淨人の館に自訴し、幽閉されたのを自分が救出して、家に隠匿かくふてあると。逐一の次第を聲を低めて語つた後、

「あるまじきと思はるゝかうした怪事が、現存してゐるのです。それに依て道鏡禪師は法王の位に昇られたのですから、贗せ物と解れば、法王は有りの儘の事情を奏上して、法王の位から退かるゝのが先づ以て順當の處置でせう。その上詔勅迄も下るやうになつた御手許へ獻上した

責任も、お取りにならねばならぬでせう」

雄田鷹は再び足を上げて緩々と歩き出した。

「愕き入つたる次第です。仰有る通り若しそれが明白に人間の手で製造した贗せ佛舍利であると解れば、日本の政治を明るくする爲に、法王はその位からお退きになるのが、當然の處置でせう。然うして法王は既に此事を御存知でお出でになるのでせうか」

「弓削淨人の館に佛舍利製造人の犬鷹は自訴したのですから、法王のお耳に這入つてゐない筈はありません。既にお耳に這入つてゐる形跡もありますし、その以前に於て或は法王は、佛舍利は作り物であると、御承知であつたやうな形跡もないことではないのです。清鷹殿、此重大事を知つてゐるのは、今のところ、私、貴方、法王、淨人殿、それに後に従つてゐる私の家來二人、それに私が親戚の關係なり、役柄の表もありますから永手左大臣に語りましたので都合七人、その外は悪事の張本人の基眞禪師は除くとしても、淨人殿が或は御子息の廣世殿には洩らしてお出でになるでしょうから、總て七八九人、その外には絶體に在りません」

「永手左大臣にお語りになつた時、左大臣は何と仰せられましたか」

「宸襟を惱まし奉る事柄であるから、餘程慎重の態度を取らねばならないと申されました。然

うした事實が顯はれたのに、法王が少しも自分や吉備右大臣に謀らうとなさらないのは、政治の明朗性を缺いて残念であるとも語られました」

「全く宸襟を惱まし奉る事柄で、空恐ろしく感ぜられます。姉の法均尼が聞きましたなら、何と申すやら」

清鷹は佛舍利を眞實なものとして、人一倍信奉してゐる姉へと思ひを走らしたらしく、眼に憂色を湛へて唇を前齒で噛んでゐた。

「姉君には今暫時お洩らしにならぬやうに堅くお願い致します。民これを渴仰し、一目眼にすれば極樂淨土へ往生疑なしと隨喜してゐるのですから、大事な上にも大事を取つて迂濶な處置は取れません。國家の威信に關することであつて、此上事實を知る人を増加するのは、大御心に忠誠を盟はんとするものゝ所業ではないでせう。私は左右大臣にもお謀りにならない法王が、之をどうお捌きになるかを、靜に傍觀してゐる方が可いと思ひます。それに依て法王が天下の政治を私するか否やが解りますし、若し自己の利害の爲に隱蔽しようとなさるのであれば、先刻から貴方と種々と語合ひました懸念が、若し事實となつて顯はれた際には、暴露して朝野に向つて呼號し、直に粉碎し得らるゝ具に供せられます。何にしてもかゝる法王に取つては大事

な秘密が私達の手に握られ得たのは、天が私達の志を憐んで、味方して下されたのだと考へられます」

「法王は此事實を一圖に隱蔽なさるでせうか、難しいことのやうに思はれます。仰の通り民安かれと願ふ心を以てすれば、適當なる處置が取られる迄は、かゝる事柄は、一人でも餘計に知らさない方が可いのです。私は姉の法均尼には斷じて語りません、その點はお安心を願ひます」

「私は法王は隱蔽しようとなされるだらうと思ひます。既にその證據が見え出したと申しますのは、貴方は昨夜二月堂近くの枯野原の中で、甚眞禪師の家來が殺されてゐたのをお聞きになりましたでせう。殺されたのは私の館に隠匿^{かく}うてある犬鷹の對手の馬鷹です。犬鷹は淨人の館から盗み出されはしたが、今一人の生證據の馬鷹を活かして於ては、何かと後日の障りになると、淨人の手か、ひよつとすれば法王自身の意圖の下に、殘虐の手は下されたのであらうと、此推察に間違ひはないとお考へになりませんか」

「若し法王が總てを秘密の奥に隱蔽して了はふとなされるのであれば、然う云ふ手段は當然行はれる順序になります。全く以て盛代の不祥事です」

「清鷹殿、私は私の家に隠匿^{かく}うてある犬鷹に、今東大寺に飾られてあるあの佛舍利と、同じも

のを作れと命じました。何かの時に役立てやうと思ひます。出来上るのは一二ヶ月後、それが出来上りましたなら、お報知せ致しますから、閑隙を見て河内國迄お足勞でもお越し下されて、御一覽を願ひます。法王の心膽を寒からしむるには餘りある貴重品となりませう。おゝ、もう横門の側迄参りました。人通りの多い街の上ではかうした話は止すことにします。では話は之限り、私明日河内國に歸りますから、お招きしたならば、是非お越しを、また急用が出来て都へ参りますれば、必ず御目にかゝることに致します」

「河内へ御招きあらば、如何なる都合をしても、必ず参上致します」

二人は話しながら横門を通抜けて、外の街衢へ出た。雄田鷹の家來二人もその後近くに從うてゐた。

街 上

横門前から左へ曲り、築土に沿うて雄田鷹と清鷹は連立つて大通りへ出たが、荷を載せた牛車、賣物を棒で擔いで喚き歩く物賣り、それに人の通行と、いつもの賑はしい姿を見せてゐた。

然うして二人が歩を進めて往くと、彼方の町の上の人が左右に分れて片側に立寄る者もあり、土下座をする者もある間を通つて、此方へと近寄つて來る行列があつた。二人はかまはず其方へ足を運ばすと、双方の間隔が狭ばまるにつれて、それは東大寺の良辨大僧都の一行であるのが判つた。今日法王廳で法王が諸大寺の住職との接見日であるので、大方其處へ往つての歸途であらうと、雄田鷹も清鷹も察した。然うしてお互に摺れ違ふやうになつて、先供の僧二人、次に薰香の壺を振る侍童二人、その次に良辨大僧都が、僧五人を後に從へてしづくと歩んで來たのに、雄田鷹と清鷹とは面と向き合つた。雄田鷹と清鷹が良辨大僧都に敬意を示す恭々しい禮を行ふと、良辨大僧都も禮を返しながら歩みを佇止めた。

「これは御兩所、連立ちて何處へお越しで御座りましたか」

端正な慈顔に微笑を浮べて、良辨大僧都は親しい言葉を懸けた。

「明日河内國へ歸任致しますので、しばらくのお別れと毘盧舍那佛拜禮に出懸けまして、只今歸館の途中で御座ります」

「私も今日思立ちて毘盧舍那佛へ參詣に出懸け、はからずも雄田鷹殿に殿内にてお目にかゝり、連立ちて只今歸宅の途中で御座ります」

雄田鷹と清鷹は交々挨拶した。

「さて、それはお奇特なこと、雄田鷹殿にも清鷹殿にも、客殿の方へお立寄り下されましたか」

「はい、今日は法王廳の接見日であることを承知いたして居りましたし、それに参詣途中にて、大僧都が法王廳へお出向きになりましたのを耳に入れましたので、御伺ひいたしませなんだ」

「私も同様、法王廳へお出向きのことを、役所が出る時に、既に聞知つて居りましたので、御伺ひは致しませなんだ」

良辨大僧都の問ひに二人が答へると、大僧都は頷いて、

「それでもお立寄り下されば、白湯なりと獻じましたらうに。生憎くと拙僧が不在で失禮いたしました。雄田鷹殿、河内の由義宮の工事は次第に進捗してゐるやうに承つて居ります。何かと御用繁多のことで御座りませう。首尾よく工事が終りますやうに、拙僧も御佛の御加護をお祈りいたしませう。清鷹殿、姉上法均尼殿には、暫時お目に懸りませぬ。お逢ひの節はよろしくお傳へ下され。それでは御兩所、之で失禮いたします」

良辨大僧都が一禮して足を上げるのに、雄田鷹も清鷹も恭々しい答禮を行ひ、一行が過ぎて

行くのを見送つてから歩き出したが、雄田鷹は何かしら溜息を一つ洩らし、

「清鷹殿、良辨大僧都を初め寧樂の七大寺、地方の三大寺とも、總て道鏡法王の味方なのです。深き理由を知らずに、佛法弘世擁護の爲に、法王職は設けられ、僧侶の職域が一つ向上したものであるとして歓迎して居ります。深き理由を知つても、それは僧侶としては耳を閉さいてゐても可いこと、政權の移行の一つであると白眼に見て、是非の判断を下さうとしないのです。何とも嘆かましいことで、法王に取つては百萬の味方の兵を立て籠らした城塞同様であると、法王廳の役人達はいや更に僧侶の歡心を得ようとしてゐます」

「然う云ふ觀方も御座りませうが、良辨大僧都丈は、法王も師として仰いだ日もありませんので、憚りもし、遠慮もして、良辨大僧都の民生愛他、慈悲本願の精神に戻らぬやうに、細心の注意を拂つてゐらるゝと聞いてゐます。しかし現在の僧侶は總體に皇室の保護に馴れて安逸を貪り、國家の動向の外に立つを以て賢しとする傾向になつて居ります。然うした状態を改悛さす爲にも、貴方は良辨大僧都に近寄り、意見を御交換になつては如何でせう」

「私は強ひて僧侶の人達を味方にしようとは思ひませぬ。彼等はいつ何時たりとも權力の前に屈するのを知つてゐるもので、惡の權力と抗争して破壊しようとするやうな氣力は、何として

も持合してゐないので。國土安穩、衆生安樂の一念に終始してゐるのが僧侶の本分であると口賢しく云ひはしますものゝ、加持祈禱、醫術の少し、然うして民衆の無智につけ込んでの佞辯を弄するのが職分なのです。その大きな標本が道鏡禪師であると私は見て居ります」

「先刻貴方は藤原氏一族から、押勝や廣嗣のやうな叛亂者の出たのを恥ぢ、その償ひを、上聖天子へ、次に國民に爲さねばならないと仰せられました。どうぞそのお言葉を基ひとして、何事につけ御配慮あるやうにお願いいたします。然うすれば僧侶の總意である經文を以て、大御心に忠誠を抽んじ、國土安穩、民衆安樂の祈願に専心せんとの思ひにも合致いたしますので、期せずして僧侶の大衆も貴方の御味方になりませう。包まず申しますれば、僧侶階級は餘りにも藤原氏一族の政權壟斷と、謀叛の行跡に馴れ、是非の判斷を下す暇なく、無關心の状態に在るのを可しとする状態に置かれてゐます。良辨大僧都にお逢ひになれば、大僧都は種々と意見を述べられることと思ひます」

「その御忠告を私は忝く受納して、心の守護りといいたします。良辨大僧都にお逢ひすることはもう少し考へまして、先寄りにしたいと思ひます」

人通りは相變らず繁かつたが、道幅が廣いのと、それに二人の服裝で貴人と知つて、雜輩の

通行人は側へ避けるので、割合小聲で話合ふ二人の言葉は何人にも聞かれずに済んだ。然うして二人は稍早足になつて七八町歩み、聽て双方の宅へ別れて行かねばならない別れ道近くなる時、俄に其邊りの人が右往左往し初めた彼方から、威めしい警蹕の聲が聞かれた。

此警蹕の聲で雄田鷹も清鷹も直ぐ道鏡法王の通行であると知つた。急がうと思へば、直ぐ横に小路があつて曲つて往けば遇はずに済まされたのであるが、雄田鷹も清鷹も眞直ぐに歩いて、法王の行列と行遇ふやうにした。警蹕の聲は直ぐ間近に迫り、分厚い織物で四方を取圍んだ大きなお厨子のやうに見える法王の乗る輿が、聽て没しやうとする夕日を浴びて、一際麗はしく眺めらるゝのに敬意を表して、雄田鷹と清鷹は道の片側に並んで立佇り、輿が近づくとつれて、輿に向つて恭謙に頭を垂れてゐた。

左右六人の輿夫の肩に載せられた輿は、法王廳に屬する諸臣十五六人程に左右前後を守護せられて、二人の前迄來た時、輿の中から法王が指圖したらしく、輿夫はピタリと足を止めた。すると輿の前面の出入口である織物の垂れを掲げて、道鏡法王が半身を覗かして、二人へ聲をかけた。

「左中辨藤原雄田鷹、近衛少監和氣清鷹、二人連立ちて此時刻、何れへ參りつて居つた」

法王の聲は優しく響いて、親しげないつもの顔付きであつた。

「昨日は、河内國へ歸任致します別辭を申し上げますと、法王廳へ伺ひましたる處、早速御拜謁をお許し下され、その上いろ／＼と忝きお言葉を頂き、有難う存じました。今日は暫時都を去りまするので、毘盧舍那佛參詣を思立ち、参りましたるに、和氣清鷹殿にはからずも殿内にてお目にかゝり、その儘連立ちて只今之から歸館いたします途中で御座ります」

「私は今日半日の暇を得らるゝやうになりましたので、久々に姉法均尼に無沙汰の詫びを述べて参り、それより毘盧舍那佛拜禮に参りましたので御座ります。姉法均尼は毎度法王より忝き御言葉を頂くのを心から有難く思つて居りまして、私に種々と語つて聞かせまして御座ります。弟として私よりも御禮を申し上げます」

「大佛殿へ參詣にまゐつたのか、二人は官位は違つても、大學寮での同級生であつたと聽いてゐる。それで二人は昔話してでもして連立つて來たのであらう。いゝ朋友同士ぢや、私は之から參内致すのである。雄田鷹、由義宮の工事を昨日も申した通り、せい／＼早く成就するやうに骨折るが可い。清鷹其方が役向に精勵してゐるのを、私は能う知つてゐる。此上とも懈怠のないやうに。二人共に官位が上進する日が前途に待つてゐる。さらばぢや」

法王は機嫌能げに然う云ふと、垂れを掲げてゐた手を落として、輿の中へ姿を隠した。輿夫はそれと知つて直ぐ足を上げて歩き出した。二人は依然として恭謙な態度で輿を見送り、法王の従者が挨拶するのも答へ、十二三間輿が放れ去つて往くのを待つて歩出したが、互に顔と顔を對合して、云はず語らずの微笑の瞳を取交した限り、何事も語らなかつた。然うして二人は別れねばならない路の角で、挨拶を交して別れたのであつたが、恐らく雄田鷹は今日は思懸けなくも、二三日以前から心の中で考へてゐた剛直誠忠の人、和氣清鷹を、自己の味方にし得たのを喜んであらうし、清鷹はまた法王のことを考へて、此上増長慢を募らせずに居るなら安泰にして置くが、分を亂したならば、やをか其儘にはと、憂國の情を一層掻き立てたに違ひ無からう。

悩みの中の歡び

一

弓削淨人は、役所を早目に退出して法王廳に兄道鏡法王を訪問してから、邸宅へ歸つて來ると、自身の書齋としてゐる小房へ這入つた。妻の楓も姿を見せて良人を迎へ、婢達が火桶を運んで來るのに眼もくれず、淨人は不機嫌さうに沈黙してゐたが、

「廣世を此處へ來るやうにしてくれ」

と、妻に命じ、其れから廣世と話してゐる間は、妻にしても婢達も一切側に來ぬやうに嚴に命じた。

母家に續く別房に、年若なその妻と共に住む長男廣世に、父の書齋へ急いで來るやうにと、楓が良人の命令いっせけを婢に廻して立去つて往つた後、淨人は猶も額に皺を寄せて沈黙を續けてゐたが、不圖眼を上げて、壁の間に掲げられてある一幅の書へ眼をやつた。

天の原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

一首の和歌は入唐した阿部仲麿が故郷の日本を偲んで詠んだものであるが、いつぞや淨人が吉備眞備の家の月夜の宴席に招かれた節、書を乞ふと、眞備は自分の詩よりも、これをと云つて書いてくれたものであつた。眞備の落款もあつたし、眞備が入唐時に同僚の先輩として仲善くした仲麿を偲ぶ言葉書きもあつた。心の中の焦燥を紛らはす爲か、淨人がその和歌を口吟んでゐると、横肥太りに肥つて背のすんぐりした廣世が姿を見せて來た。

「お歸りなさいませ、お喚びださうで」

廣世は一禮してから、父と對向むかひつて座を構へると、淨人は直ぐ焦燥と不機嫌とを投附けるやうな調子で口を開いた。

「法王は私が思つた通り非常に御不興であつた。其方を思慮の足りないは、け者だとも仰有つた。弓削家の手で需めて傷を大きく深くしてゐるやうなものであるとも仰有つた。馬麿など放擲なげつて置いて、佛舍利が贋いせせものであるなどと、口外すれば其身が危いのであるから、金輪際他へ洩らす氣遣ひはないのに、それを殺害ころめて何の役に立つ。基眞禪師は疑心暗鬼を生じて、私に忠節を盡す心を減らさうし、世間はよしや馬麿は微臣であらうとも、法王廳の役員の人

なのであるから、やはり法王廳の忌はしい出来事と目して、何かと批評もしようし、私に解釋を求めやうとするではないか、淺慮にも程があると、きついお怒りであつた」

「父上は犬鷹が當館から何者にか、奪去られたのをお話になりましたか」

父の取次ぐ法王の言葉に不服らしい眼色を見せて、廣世は訊いた。

「順序として云はねばならないから、事の次第を悉しくお聴きに入れ申した。犬鷹を奪取つて行つた者、並びに犬鷹の行衛を探す爲に、其方は家來の者と共々に血眼となり、それから私の腹心の刑務省にゐる者にも加勢を頼んで、藤原氏一族の館はもとより、其他朝臣の是と覺しい館を一つ残らず内偵しても、一向に手懸りはなく、其方の發意で、或は基眞禪師が馬鷹から犬鷹の脅迫を聞いて身上の大事とばかりに、我が館に犬鷹が捕へられゐるを嗅附けての仕業であらうと、基眞禪師のその夜の行跡を探索する中に、其方と火鷹が馬鷹に遭遇ひ、それとなしに訊問せしに、不審の點は數々あり、のみならず何を勘違ひしてか悪口雜言を放ちしまゝ、此奴も佛舍利の作り物であるのを知る一人、亡き者にした方が法王のお爲であると、其方が誅伐を加へたのであると、残りなくお話し申上げた」

「それならば伯父法王は、私を譽めて下されてもいい、苦なのに、お怒りになつて私をたはげ者

などと仰有るのは間違つてゐると、お父上はお思ひになりませぬか。人間一人を殺すのは容易な業ではありませんぬ。私が馬鷹を手に懸けたことよりも、犬鷹が盗み出されて行衛知れずになつてゐるのを、餘計に氣をお揉みになつて、然うとは父上には直かに當たられず、私の方へお鉢が廻つたやうに思はれれます」

「それもあらうが、私もその時其方に云つたやうに、いらぬ世間へ騒ぎの種を蒔いたやうなもので、良くないのぢや。その爲に私は、犬鷹を再び私の手許へ取戻してから御耳に入れやうと考へてゐたのを、早く申上げなければならなかつたし、何もかもさんぐであつた。しかし濟んで了つた騒ぎを、今更とや角云つたところで、どうなるものでもないので、法王も諄くは仰有らなかつたものゝ、犬鷹が何人かに連出されたところからは、安心は出来ず、探索は續けねばならないのであるから、氣短者の廣世に輕率な舉動ひをせぬやう、能く考へて、眞實私の爲になるやうな處置を取るやうにしてくれとお言葉であつた。さうすれば犬鷹の行衛はやはり探さねばならないのであるから、其方は此上探索に骨を折つてくれるにしても、大事を取つた上にも大事を取つて、法王のお心が安まるやうに、私が法王から、譽められ喜ばれるやうに思慮分別を盡してくれねばならない。それが其方が私への孝行でもあるし、此家が法王から受

けた御恩に報ひる道なのぢや」

「人の噂の口に上らぬやう、大事を取つて人目につかぬやうに犬鷹を發見け出して捕へいとは、随分無理な注文で御座います。しかしそれもお父上へ孝行となり、伯父法王のお心を安める爲とあれば、随分お骨折も致しませうが、父上法王は私が基眞禪師に疑ひをかけてゐるのに、何かお話は御座りませなんだか」

「おい、それを話すのを忘れてゐた。犬鷹を若し基眞禪師が連出したのであるなら、何も心配はいらぬことであるから、基眞禪師への疑ひは疑ひとして、その館などを探すに及ばぬし、基眞禪師のその夜の行跡を突止めるにも當らぬと仰有つた」

「然うで御座りまするか。私は飽迄基眞禪師の爲業だと睨んで居りますので、今夜家來二人をあつた館へ忍び込ますやうに手筈を調べて置きましたが、それでは止すことに致します。此上は右大臣吉備眞備の館、藤原雄田鷹の館へ探索の手を延ばして見ませう。右大臣は法王と仲善しの御方、雄田鷹は此間の法王の祝賀式で昭徳表を讀んだ法王の忠義者なので、差扣へて居つたので御座ります」

「如何なことがあらうとも、あの人柄の善い眞備殿が犬鷹を盗出すなどと爲さる筈はない。雄

田鷹殿にしても河内國から上京して、滞留したのは十日に足りない日數、かうした事柄に關り合ふ理由が發見られない。それに雄田鷹殿は今朝河内國へ歸任されて了つてゐる。氣の荒い武官達か、それとも他に犬鷹と何か引懸りのある者の爲業としか外に思ひやうはない」

猶も父子がそれに就て話合はうとしてゐる處へ用人がやつて來て、中務省出仕の藤原良鷹が訪問して來たのを告げた。

「藤原良鷹殿がお越しになつたのか、客殿へお通し申してくれ、直ぐお目にかゝるとお傳へ申せ」

淨人の言葉に取次ぎの用人が立去つて往つて了うと、廣世は父の前を辭さうとしながら、

「お父上、いよ／＼美努久賣姫を良鷹殿に見合すことにお定めになりましたのですか。私は眞備殿がお媒介口である紫微少忠の難波殿に爲された方が可いと思ひます。藤原氏一族が弓削家にどんな眼を向けてゐるかお解りになつてゐるでせうに」

「よい／＼。それに就てはお前は口出しせぬが可い。法王もその方が可いと仰せになつたし、美努久賣姫も良鷹殿の方を望んでゐる。かうしたことは當人の望むまゝにした方がいゝのぢや。それよりも其方は母と美努久賣姫に、昨日から私が伝附けて置いた準備を急げと傳へてくれ」

かう云ふと、淨人は氣忙しげに立上つたので、廣世は重ねての口を利かず、一禮してから父の前を退いて往つた。

二

美しく調度の整つた客殿へ、淨人が這入つて行くと、其處には早や用人に案内せられて、藤原良麿が座してゐた。然うして淨人の姿を見ると、如何にも貴公子らしく舉措の調つた禮を行つた。

「ようこそその御入來、お待ち申して居りました」

淨人にしても息子に對してゐた時の不機嫌さを打消して、如何にも參議職にある長者らしい容貌になつて微笑さへ頬に浮べてゐた。

「昨日左大臣藤原永手公にお目に懸り、本夕御館へ參上致すやうにとのお言葉に依り、かく推參致しまして御座ります。今度は微臣私如き者に、御息女との縁組、御承知下さいまして有難う存じます」

「貴方は天智天皇の忠臣、藤原鎌足公の御血統をお引きになつてゐる藤原家嫡流の御一人、我等の家を取つては願つてもなき婚君、法王に委細の次第をお聞きに入れしに、法王には殊の外御満足で、何れ近き中に貴殿と法王廳にて面會を遂げ、何かと語るであらうとのお言葉で御座りました」

「法王よりも然うしたお言葉のありましたのを承り、猶々此身の幸福せ、冥加の至りと存じます。參議には今日永手左大臣と御役所にてお遇ひ下されましたでしょうか」

「本日御役所にて左大臣の御部屋へ罷越してお目にかゝり、貴殿のこと並に婚儀の次第に就て種々お物語り致しました。左大臣には何かと御配慮、有難く存じて居ります」

然う二人で話合つてゐると、楓が顯はれて來た。良麿へ禮を施して其處へ座すと、

「美努久賣姫の母の楓で御座ります。今夕は能うこそお越し下されました。幾久しう御懇意の程をお願い致しまする」

楓が自ら名乗つたのに應じて、良麿も名を名乗つて慇懃な初の對面の挨拶をした。

「美努久賣姫は」

「只今參ります」

淨人の言葉に楓が答へた言葉が終らぬ中に、美努久賣姫は客人への麥湯を椀に盛つたのを兩手に眼高く捧げて、緩やかな足取りで姿を見せて來た。背後には婢二人が左右に並んで同じやうに麥湯を盛つた椀を捧げてゐたが、之は主人と奥方の前に置かれるのであつた。かゝる日に相應しく美努久賣姫は盛装してゐた。兩袖に搦んだ緋色の薄絹は揺曳してゐたし、額から頸へかけて一筋の分け目をつけて、背後で束ねられた頭髮には、眼覺めるやうな麗はしい簪と瑠璃の櫛が飾られ、裾長に着た二重の下袴の表部の方には、芍薬花の模様が染出されてあつて、透ける下部の分厚い織物の下袴を奥床しいものに見せてゐた。然うして上衣は無垢の乙女を表徴する黄の單色なので、清楚と艶麗とが綯ひ交つてその身體から漂ひ出してゐるのであつた。

進み寄つて美努久賣姫は良鷹の前に一禮して麥湯の椀を置くと、それを機會に淨人が、良鷹へと姫を紹介した。

「藤原良鷹殿、娘の美努久賣で御座ります」

「左様で御座りまするか。私は藤原良鷹、今後御懇親の程をお願いいたします」

「私は當館の娘美努久賣で御座ります。幾久しうお御懇親の程を、私の方よりもお願いいたします」

姫は薄化粧を施してゐたが、流石に羞らうてか、その頬を紅く染めてゐるのが、明に見られた。然うして少し身體を後退りさして、かゝる場合に行ふ二拜の禮を行つた。良鷹も面熱りしながら、それに對して禮を回へしたが、美努久賣姫の良人としては、釣合ひの取られる端麗な風姿を備へ、稍面長な色白な顔、鼻梁の長い恰好のいゝ鼻、引締つた口元に、切れの長い澄んだ眼と、流石に堂上にあつて父祖代々巾を利かす藤原氏一族の血統であるのを、遺憾なく示してゐた。

「姫もう下つても可い」

淨人が云ふと、

「は」

微に美努久賣姫は返辭をして更に良鷹へ先に、父、母へと禮を行つてから立上り、客殿を去りかけると、それ迄に、淨人や楓の前に麥湯の椀を置き終へた婢二人は、その後に従つて來た時と同じやうに、しづく／＼と退いて往つた。

「年齢は十九歳、不束なもので御座りますが、どうぞよろしく御願ひいたします」

楓が親心の愛を見せて、泌々した調子で、良鷹に重ねて挨拶の辭を述べた。

「美努久賣姫のお美しさは、寧樂の都ではまだ見ぬ者迄も口にして響いて居ります。そのお方との縁組、私は果報者であると永手左大臣は仰せられました。私自身も然う思うて居ります。何卒淨人殿、楓様、縁組調ひました後は、私を眞實の我子とお思召されまして、お引廻しの程を願ひ上げます」

良麿は姫を目新しく見て、その端麗な容姿に魂を動揺せたらしく、述べる言葉には熱を帯びてゐた。それを淨人も楓も満足氣に微笑を浮べて受けたが、淨人は不圖心附いたやうに、

「楓、何はなくとも良麿殿に一献差上げたいと思ふ。其方は彼方へ往つて、厨の者に命令してくれ」

「は」

「私なれば何卒お構ひなく、餘り長座いたしましたしては失禮と存じまする故、これでお暇さして頂き度う存じます」

「その御斟酌には及びませぬ。一献と申したところで、ほんの有合せの肴、何も御馳走は御座らぬ、ゆる／＼お出での程をお願いいたします。今一度美努久賣姫をこれへ呼びまして、習ひ覚えさしました笛の音でもお聞きに入りたいと存じます。楓、早う」

「はい、かしこまりました御座ります。良麿殿何卒今夕はゆる／＼と遊ばしますやうお願いいたします」

楓は言葉を残して退いて往つたが、準備は調つてゐたと見え、直ぐ婢達は酒宴道具を持出し、引續いて數々の料理を大臺に載せて運び入れて來た。淨人は先に良麿に土器を取らせて婢に注がしめ、次に自身も土器を取つて、波々と注がして口にした。日は漸く暮れて來たので、いつの間にか運び込まれてゐた燈火の灯影で、客殿内は明るく、それに今宵は七日月で、閉された障子に月影がさしてゐた。酒は強い方の淨人が勧むる程に、良麿は土器の數を重ねたが、餘り嗜まぬと見えて、頬を眞赤にしてゐた。淨人が今一度美努久賣姫を呼んで笛を吹かさうと云つたのを、眞に受けて姫の顯はれて來るのを待つたが、姫は遂に姿を見せなかつた。その代りに姫の部屋邊りと覺しく、姫が吹いてゐるに違ひ無いと思はるゝ高麗笛の音が、唳々として傳つて來て、酒宴の興を添へるのであつた。

「美努久賣姫が吹いてお出でになるので御座りませうか」

「多分然うだと存じます。妹姫は笛は吹きませぬ」

「さてもお見事な藝、曲は八羽の鶴が舞ふ八仙と覺えます。今宵を祝ふ相應しい曲目、良麿嬉

う存じます。参議殿、先刻も申しましたが、私を藤原氏一族の者とお思ひなく、弓削一族とお思召し下され。今後若し弓削一族の繁昌を嫉み、仇なすやうなものが顯はれし際には、一番に走向うて打懲らす役目を、私にお命令の程を今よりお願い致し置きます。此一事を廬舎那佛を引合ひに盟ひ奉りて申上げます」

「有難う。それでこそ我家の婿君なり美努久賣姫の良人、今後は確と一族の契りを結び、家の大事身の大事、腹藏なくお語らひいたすことに致しませう。さらばその契りの爲に今一献」

淨人は又もや良鷹に土器を持たしたが、それを勢よく飲み干すと、淨人に回して、良鷹自身酌してから、

「さらば之にて私はお暇を頂戴いたします。兎ても参議殿の強酒にはお對手致兼ます。此上御酒を頂きまして失禮でも致しますれば、初にお館へ參上致しまして、不作法でもあり、我身の恥、曲けてお暇賜はり度う存じます」

両手を其處へ突いて酔うてはゐれど慇懃に別辭を述べるのを、最早淨人にしても強ひては止めず、側にゐる婢に楓を呼ぶやうに命じ、楓がやつて來ると、玄關の方へ歩んで行く良鷹を兩人で送出したが、良鷹は餘程氣を引緊めてゐるらしく足許は確であつた。然うして玄關先で今

一應の挨拶を交はした良鷹は淨人の下人が松火を灯して足許を照らし、先供をしてくれるのに伴はれて、淨人館の門を出て、程遠からぬ家路に就いた。

釋奠の日

一

大學寮の主事室に、主事の藤原家鷹と和氣清鷹とが對座して先刻から語合つてゐたが、二人の話はなか／＼盡きさうにもなかつた。それと云ふのが清鷹が、近頃の大學寮の學風に就いて非難めいた言葉を重ね、希望を述べ出したからで、それに對して家鷹が責任ある身として、種と陳辯もし、然うして大學寮の學風の趣旨を演舌したからである。

今朝大學寮では畏くも御帝が行幸まし／＼て、釋奠の盛儀が行はれたのである。總て寮長であつて右大臣である吉備眞備が専ら衝に當つて、前年から準備を爲さしめた上、今日釋奠の日に當つて滞りなく行はれたのであつた。釋奠の儀は本來は支那の儀禮であつて、上代では菜を

釋き幣を奠いて先師の靈を祀る儀式であつたのが、後漢以後は孔子及び其門人を祀る事の專稱となつたもので、つまり學問を尊重し、禮典を尊重することを意義した儀禮であつた。支那文明を崇拜し、その文明を移植するのを可しとする遣唐使の先人に依て、從來から屢々唱道されてゐた儀禮であつたが、時ならず遷延して實現しなかつたのを、二度唐朝へ使ひした吉備眞備右大臣が、極力奔走し、それにやはり唐朝歸りの學者達が相唱和し力を藉して、遂に日本では最初の、學問を尊重し禮儀を尊重する意義ある祭典を行ふ今日の佳き日となつたのである。

畏くも御帝が行幸遊ばされたのであるから、法王の太政大臣道鏡禪師初め左大臣藤原永手、大納言、中納言の位にある者、參議、非參議の職にある者、其他百官百司は召されて、祭典に連つたのである。眞に聖代の盛事であつて、期せずして朝野の間に學問崇拜、禮儀崇拜の念慮が昂まり、大御心の程を感佩したのであつた。清麿は大學寮の出身者であつたし、近衛少監の職分の上からも、召さるゝ一人となつて式場に連つたのであるが、聖上が還幸まし／＼した後、道鏡法王初め、永手左大臣その他の百司百官も退出して、寮長である吉備右大臣が残り、改めて大學寮の職員と生徒とのみで祝會が行はれた席へも、卒業生として連つたのである。然うして吉備右大臣は寮長の資格で、聖上のまします法華寺へお禮の爲め參内した間を、職員と生徒

達は祝ひの午餐を共にするやうになると、主事の家麿は歸り行かうとする清麿や他四五人の大學寮出身者を引留めて、強ひてその午餐會に連らしめたのであつた。

午餐會も目出度く済んで、生徒達は家路に就き、清麿と共に引留められた寮出身者四五人も歸り去つたのであるが、主事の家麿は後片附けの爲に居残らねばならない淋しさを、暫時かけ違つて遇はない幼な朋輩の清麿と共に物語らうとして猶も引留めたので、清麿は能き機會とばかりに家麿の主事室へ連立ち行き、然うして往時を追懷して種々と語合つた末、兼て抱懷する近來の大學寮の學風の好ましからざる點を指摘して反省を乞ふたのである。もう可なり長い時間論じ合つてゐるので、清麿の頬は赤く燃えてゐた。

「私は飽迄も大學寮の學問研究の態度は、日本國家のお爲になると云ふ點を眼目として終始す可きものであつて、貴方の云ふやうな學問の爲に學問研究してはならないと信ずるのです。それ故に大學寮で堯舜の御代變りの事蹟を論じ、研究するにしても、日本國の萬世一系の尊さ、嚴さを、少しでも傷けるやうな論じ方や研究方法であつてはならない。それは今日只今からでも直ぐ改めなければならぬものと、堅く主張したいのです。不幸にして私の耳に這入る大學寮の研究の仕方が、いつも私の杞憂を増さしめ、一體教師達の然うした學問研究方法は國家の

害毒になると云ふことに氣附かないのであらうか、寮長の吉備右大臣殿にしてもお心付きにならないのであらうか。心附かない、知らないと云つて済む可きものでない。責任がお有りになると、私はいつも考へさせられてゐるのです」

平生は寡言沈黙勝ちな清鷹ではあつたが、一旦口にした以上、かうした問題では明白な結着がつかない限り、敢て議論を曖昧の中に終らうと爲ない性質なので、執拗に家鷹へと喰下つて、家鷹に自己の意見に同意さうと力むるのであつた。

「清鷹殿、成程貴方が先刻から述べられる通り、貴方と私と一緒に此大學寮で學んでゐた頃は、御説の通り大學寮の方針は、日本國家の立場から、然うした異邦の歴史を檢討し、是非の判斷を下して我等學生であつたものは教へを受けたのでした。それが現在の學風のやうになつたのは、云はゞ學問の自由尊重なので、貴方の仰有るやうに一概に悪傾向であるとは云へないので。つまり學問がそれだけ廣汎に涉るやうになつた譯で、異邦の歴史を學ぶ時は、異邦の精神を土臺として、檢討しようとしてゐるのです。學問研究は公平を旨としなければならぬので、すから、日本國家の立場を基礎とする研究態度を取つたならば、門戸なり、視界は狭く、それだけに學問を深く攝取し得られません。學問は自由研究してこそ、その眞髓を掴み得られるも

のであつて、それが進歩した形式なのです。時代は一步進んで來たのです」

家鷹にしても自己の學問自由説を堅く取つて譲らず、清鷹の意見を反駁して、自分の方が遙に進歩した學徒であるかのやうな態度さへ見せてゐた。

「否けません。斷じて否けません。貴方の仰有ることは學問研究としては進歩した方法であつても、日本國家のお爲になる子弟を養成する大學寮としては不向きなのです。子弟達の頭腦はまだ柔いのです。教へられたことを眞理として、そのままそれを實行に移さうともしますし、教へられたまゝを標準として、社會一般の出來事を批評し、見ようともします。危険が其處にあるのです。學問の自由研究は既に精神を把握した、學問の或る階段に達した人のみに許さる可きことであつて、大學寮のやうな朝臣の子弟のみ集めてゐる所では爲す可きものではありません。大學寮は飽迄も、日本國の日本國たる國家精神を把握さす可き學問所なのです。飽迄それに終始しなければならぬのです。貴方は大學寮内に閉ぢ籠つてお出でになつて、大學寮の生徒達が社會に向つて放言し、衆生に影響を及ぼす所説を、街上又は各自の家庭内に述べてゐるのを御存知ないかもしませんが、日本の肇國よりの神への信仰を、貴方の仰有る學問自由の立場から何かと批評し、總て唐國の學問に慣つて、日本精神を忘却してゐる態度になり切

つてゐるのです。眞に國家の爲に憂へなければなりません。學問自由説の弊害が歴然として顯はれてゐます」

清麿は斷々乎として主張した。

いつの間にか寮長である吉備右大臣は宮中へ御禮言上の參内を済して、寮へ歸つて來てゐたのを、二人は意見を戦はすのに夢中になつて少しも心附かなかつた。吉備右大臣は寮長の室へ這入つても、家麿はやつて來ず、壁一重の主事室で盛に議論めいた聲が聞えるので、自身から歩を進めて其處を窺ふと、此體裁くであるのを眼にし、暫時入口に据ゑられてある几帳の蔭に足を佇止めて、二人の言葉に耳を傾けてゐたが、此時一歩歩み出て二人の前に姿を見せた。

「寮長がお歸り遊ばしてゐる」

逸早く眼にした家麿が立上り、吉備右大臣の方へ近寄つて、

「いつお歸寮で御座いました。お出迎へも致さず失禮を致しました。つい久振りでお目に懸つた清麿殿と話込んで居りましたので」

家麿は恐縮しきつて一揖した。

「今日のお目出度き日、久方振りに大學寮へ參る光榮を得、昔馴染なものですから、つい家麿

殿と話合つて居りまして、家麿殿に右大臣のお出迎へを怠らしめ、申譯が御座りませぬ。私からもお詫びを致します」

清麿にしても恐縮して詫言葉を述べた。

「二人ともその心遣ひは無用にするがよい。私はお禮言上に參内を遂げた後、一旦歸館して禮服を改め、中食をも取り、最早來すとも可いと思ふたなれど、後片附けの程を見届けたく、云はゞ不意に參つたのである。出迎へなどといらぬ手数數であらう。家麿殿、今日用ひし禮典の器具、次の年に使用する時に順序を誤らぬやう、下人達が取片附けるのに、其方一々眼を配つて置いて下され」

「はい、承りまして御座ります」

「清麿殿、私は其方に少し話したいことがある。私の室に來て下され」

吉備右大臣は然う云つて家麿が一禮して立去つて了ふと、清麿を伴うて隣合ふ寮長室へ這入つて往つた。

方二丈ばかりの巨室ではあつたが、調度としては何もなく、僅に寮長使用の机一脚に文房具、其の傍に書類入れと覺しき唐櫃一つ、其外には書籍を數多く載せた書架が壁に沿うて置かれてゐる限りであつた。吉備右大臣が机の前に座を構へたのに對き合つて清鷹は座に就いた。

「清鷹殿、私は今、其方と家鷹が議論し合つてゐたのを、中途から聞きました。その以前にどんな意見が語合されてゐたのか、判然しないが、最後に述べられた言葉に依て、大略の意は汲取り得られました。御尤なる御意見、國家の爲に憂へなければなりませんとの御一言は、眞に忠誠の士として私の眼に映じてゐる貴方の肺腑から流れ出た感慨として、私の胸に強く響きました」

吉備右大臣は其處迄云ふと、些つと言葉を切つたが、まじく清鷹をみまもつて、

「清鷹殿、其方とは同じ吉備國の出身、只に郷を同うするばかりでなく、私の娘の由利は其方の姉法均尼殿と同じやうに宮中に務めて、何かと法均尼殿の御世話を受けて居り、旁々其

方と私との因縁は深く、他の朝臣に對する考へとは違ふ、特別の關心を私は其方に持つて居ります。家鷹へ其方が述べた言葉の中に、寮長たる私に當今の大學寮の學風の總ての責任があるを申された。なる程寮長の職に就てゐる私に總ての責任はある譯であるが、其處になかく他からは窺ひ知ることの出来ない難しい政治問題が潜んでゐるのです。今大學寮職員の任命は、寮長たる私の推薦もあるが、太政大臣たる道鏡法王が自ら任命なさる方が多く、殊に此頃になつては、殆ど職員の任命、解職の總てを、太政大臣自ら司つてお出でになつてゐます。

其方も承知であらうが、隣邦唐朝の學問は、孔子、孟子、老子などと云ふ前代の大學者の遺産をそのまま受嗣いで、書籍發刊の數は日本國とは較べものにならない程多く、その他制度文物も調うてゐて、我朝は過去に於て攝取して國家の進歩文明に貢獻した如く、今後も猶攝取して國運を發達さへねばならないのです。自然と唐學の奧義を究めた者、又究めんとする學徒が、大學寮の職員に迎へらるゝのは、何としても避け難い事柄であつて、道鏡法王太政大臣が、然うした人のみを撰擇して任命される次第なのです。と云つて本來の皇國學を奉ずる人を、大學寮の教師の職に就かさないので、日本の學問を片輪にするものであつて、正しい處置とは云へないのであるが、今日日本國は佛教國となり、本地垂迹説が前朝の行基大僧正初め他の大徳の僧

侶達に依て唱道せられて確説として受納れられ、恐れ多くも天照皇大神は、光明遍照の毘盧舍那佛の顯現なりとせられて、當朝の御代には伊勢大神宮に毘盧舍那佛像が安置された上、神宮寺さへ設けられ、神官はあつてもなきが如き状態になつてゐるのですから、日本に皇學に専念する人は少く、大學寮でその人を得ようとしても、需め兼る有様になつてゐます。かうした事情からも唐學研究が大學寮の中心をなしてゐるのであつて、唐へ二度往來した私が、強ち唐學を崇拜して、唐學者のみを大學寮へ集めようと目算んでゐるのではない。私は其方が憂へてお出でになる點を憂へてゐるのです」

「右大臣のお言葉を返して恐入りますが、私は唐學を研究するのを悪いと申してゐるのでは御座りません。唐學研究に日本精神を把持して行つて頂きたいと望んでゐるのです。唐學に依て日本の制度文物が進歩しましたことは充分に認めて居ります。その唐學を攝取するに當つて、日本と唐國とは肇國の根元を異にしてゐるのですから、日本に取つては不用なもの、弊害となるものは取つてはならないと、家鷹殿に申したので御座います。唐學崇拜の餘りに、日本國に適せない學說、國民の心を亂す學說をも、無差別に合せ取り入れようとする傾向はないでせうか、私の眼には有ると映つてゐるのです」

清麿は郷國の先輩であり、且つ右大臣と云ふ尊位に對して、恭謙の態度は見せてゐたが、しかも信念は信念として、憂國の情を披瀝して敢て譲らなかつた。

「其方の考へてゐること、望んでゐらるゝことは私に能く解つてゐます。しかし其處に今も申した難しい政治問題があるのです」

言葉少なに云つて、吉備右大臣は一つ溜息を洩らして沈吟した。然うしてその容貌には國を憂ふる眞摯な感情が浸み出てゐるのを清麿は見取つた。突嗟に清麿の頭腦の中には、いっぞや雄田麿と東大寺の毘盧舍那尊佛の前で行遇ひ、連立つて歸る道すがら、雄田麿は道鏡法王の血統に就て新に世間に流布されたことに就て、

「大學寮の現在の學風と何等かの連繋はないでせうか。連繋が無いと斷じていゝでせうか」

と、云つた言葉が、颯風はつての如く蘇生よみがへつて來た。問はでも可いと思はれたが、清麿が吉備右大臣を信じる思ひは、舌に上つて來た言葉を制し兼て、覺えず口にして了つた。

「道鏡法王が私の杞憂するやうな危険な唐の學風をお許可になつてゐるのでせうか、或は鼓吹しようとなされてゐるのではないでせうか」

清麿の眼は火のやうに燃えてゐた。

「清鷹殿、然うした言葉を輕々しく口にしては否けない。然うした疑問を疑問として其方の胸の中に抱いてゐるにしても、それは深夜自分一人で靜に考へる可き事柄であつて、他に洩らす可きものではなからう。私としても其方の問ひに答へる言葉は持つてゐない。よしんば持つてゐるにしても、太政大臣たる道鏡法王と共に内閣に連る右大臣の職責に在る身として、述べ得られようか、大學寮の學風に關しては、寮長たる私に一切の責任があるのを、改めて其方に傳へ置かう」

語調は強かつたが、心地を害ねたやうな容子は少しだも見られなかつた。寧ろ清鷹に一層の頼母しさを覺えたものゝ如く、打解けきつた色を豊頬な老顔に示してゐた。眞備は、と、肅然として形容を改め、

「清鷹殿、今の世態を何と見る。朝廷に於かせられては、未だ東宮冊立の御儀行はせられず、世俗一般御佛を信じながら、唯是現世の極樂を希願つて、安逸を貪り、富貴を追ひ、歡樂を追

ひ、驕奢に身を委ねて悔ゆる處を知らず、道義地に墮ち、風紀は頹廢を極めてゐる。一面大御代の平和な姿ではあるが、しかも内に危機を孕んでゐるの知らなければならぬ。かゝる際國家の需むるのは、智畧才能の萬人に秀づる人はもとよりであるが、それよりも内豪毅の精神を包んで、外溫雅に、しかも憂國の情深く、難に當つて一死皇國に奉ぜんとする清節の人なのである。我れもし若かりせばとの思ひを抱くは屢々であるが、よしや聖上の恩寵を忝うして右大臣の職に在つても、七十三歳の老體では、兎もすれば袞龍の御袖の下に隠れんとする佞姦を、此上にも増長せしめないやうに骨折るのに精一杯なのである。私は若い人に望みを囑してゐる。その若い人の首座に私は其方を置いてゐます。郷國を同じくする懐しみ、宮中に在て誠忠を盡さる法均尼を姉としてゐる其方、其方こそ老ひし我等になり代つて、現在將來に涉つて皇國を安きに置く職責を果して貰ひたいと、恒に囑言してゐるのです。

突然かゝることを云つて其方は不思議に思ふであらう。又其方は其方の位の低いのを考へて、その身に當らずと思はるゝであらうし、猶又私が道鏡法王に依て右大臣職の推舉を受けたのであるから、一意道鏡法王の旨を迎ふるに急であると信じて、非難の思ひを抱いてゐらるゝであらうと推察しもある。藤原氏でない其方は、官位の昇進は遅くとも、例は私に見得る如く、一

族朋黨相組み相携へ、非違を遂げんとする如き煩はしさから遁れ得られて、只是自己の忠誠の一念を盡し得らるゝ自由さがある。少しく自讃に過ぎるやうだが、私は然うした心地をもつてお仕へ申して來たのである。然うした自己の至純至誠一つを便りにして生きて行くのは、神の道であり、佛の道であり、儒學の天の道なのである。藤原氏でない其方には其道が前に横はつてゐるのである。

私を藤原氏一族がどんな眼で見えてゐるか、どんな批評をしてゐるか、私は能く知つてゐる。恐らく其方の耳にも這入つてゐよう。其方が私が推察する私への非難の思ひにも、かうした藤原氏一族が私に對しての批評の言葉が少なからず影響してゐるに違ひ無からうと思ふ。しかし私は私を信じてゐる。何人が如何なる蔭口を利かうとも、忠誠の一念しか持合してゐない私を信じてゐる。然うして絶えず藤原氏に向つては警戒の眼を怠つてゐない。陰謀と策略とは尤も長所である藤原氏に何として眼が放されよう。

清鷹殿、道鏡法王には朋黨はない、法體故に兵馬の人達とは縁故は薄く、同族と云つても僅に弟の淨人殿一家あるのみなので、惠美押勝の如く劍戟を以て朝廷に向つて謀叛する如き憂ひは些少だにない。しかも若し道鏡法王を退げんか、其處へは直ぐ藤原氏一族が代つてその位置

を占めるばかりである。藤原氏一族にして祖先鎌足公の如く忠誠の一念に終始するのであれば、何等顧慮する要はないが、廣嗣顯はれ、押勝顯はれた藤原氏一族、所詮は權勢の狩獵者であつて、國家の安泰を二の次に置いてゐるのである。假に道鏡法王を前門の豺狼と見てもよし、それを追うて後門の虎である藤原氏一族を迎へて何の役に立つ、私が其方の眼には目だるく映つてゐるであらう現地位に在つて、道鏡法王太政大臣と和協してゐるのは、かゝる理由である。

今一つの理由は、道鏡法王は佛敎國となり果てた皇國の、僧侶階級の絶大の後援を有して居らるゝ。良辨大僧都、良興少僧都初めその他寧樂の七ヶ寺、地方の三大寺院、國分寺の住職並に類多の尼僧と、僧侶の中より政權の首腦者の出たるを歡喜して、飽迄道鏡法王を支援せんとした態度を取つてゐる。私は之は過去に餘りに藤原氏一族が權勢に專横だつたのに對する云はず語らずの反抗であり、諫言だと見てゐる。かうした反抗の氣勢は、藤原氏一族以外の氏族の中にも認められるのであつて、藤原一族の中でも濃厚な永手左大臣殿は、能くそれを承知してゐられ、私に然うした述懐を二三度なされたこともあつた。されば政事の諸向は當分現在のまゝで推移して行くより外に方法はあるまい。忍び得ることを忍び得ず、猥りに動き、猥りに異變を圖るのは、畏くも宸襟を惱まし奉ることであつて、臣道に缺けることになる。

清麿殿、私は私のかうした所懐を、以前から其方に話したくてならなかつたが、その折がなかつた。今日は思懸けなくもその機會に恵まれ、思ふまゝに語られて喜ばしい。其方には私の意のある處を解してくれたであらうか」

聖上が東宮で在らせられ給うた折は、補導の教官となつた後、出で、筑前守となり、次で肥前守となり、又外攻の爲に筑紫に怡土城を築き、押勝の亂には並びなき功勞を立てた老臣吉備眞備の眼は、自信と一種の氣魄に輝いてゐた。しかもその態度には淡々として從容迫らざるものがあつた。

「私如き者に對し、種々と御胸中をお語り下さいまして、清麿身に取つて有難う存じます。右大臣の私への厚き御期待は、到底及ぶ處にあらずとは存じますが、皇國のお爲めにはいつにても身命を投出さんと存じて居ります身、今後猶此上にも只管忠誠の一念を以て御奉公申上げんと存じます。廟堂のことは我等微臣伺ひ知り得ざる事柄が多々御座りませうが、只今のお言葉を承つて右大臣のお在すを以て、私は意を安じて、自己の職責のみに専念して居れば足れりと存じまして御座ります」

清麿は恭しく一禮した。

「私の心地を解つてくれて有難い。云ひ洩らしたが、複雑なる政情であるから、變に臨み、機に應ずる心構へは、いつ何時たりとも此身に持つてゐる。老ひたりと雖も分を亂し、皇國に害を及ぼさんとする者が顯はれたならば、其方と同じやうに、其時は一死御奉公申上げる覺悟である。幸ひにも宮中には忠誠無二の其方の姉の法均尼殿、未熟者であるが娘の由利もお勤め申してゐるので、私は幾分意を安うしてゐられる。清麿殿、お互に皇國の彌榮を圖る爲に生きる生命ぢや、身體を大切にしようぞ」

寮長の室の前の庭には、紅、白と梅が咲いてゐた。その薫りが室の中に迄も忍込んで来てゐて、折から何處からか飛んで來た鶯が、朗に法、法華經の轉り聲を擧げてゐた。

美努久賣姫の婚儀

一

釋奠の日に思懸けなくも吉備右大臣に逢つて、その胸中を聞かされた清麿は、吉備右大臣が

雄田麿が懸念するやうな、只管道鏡法王の意を迎へるのに急な人でなく、やはり自分が最初から信じてゐた如く、忠誠の人であつて、絶えず道鏡法王には警戒の眼をゆるがせにしてゐないのを知ると、心から安意の溜息が吐かれて嬉しかつた。しかし吉備右大臣は道鏡禪師を法王に登らしめた佛舍利が、基眞禪師が造らしめた贋せ物であるのを、まだ御存知ないのであると考へると、一抹の寂しさはあつた。それを吉備右大臣のお耳に入れて置く方が可いと思つても見だが、それは雄田麿が自分を信じて、自分に打明けてくれたのであつて、此上一人でも他に知る人を拵へるのは慎まうと、其時のお互の約束を思ふと、吉備右大臣と雖も洩らしては、雄田麿に對して裏切行爲であると思はざるを得なかつた。況して吉備右大臣は藤原氏一族には好感を持つてゐないのであるから、その人に洩らしたりしようものなら、猶更以て雄田麿は、自分を不信の人と斷ずるであらうし、自分にしても良心に恥づる行爲であると思はせられた。いつの世にも朝廷内には權力を争ふ派閥が自ら生じて、一面それが牽制し合つて、忠誠を競ひ、惡事を發き合ひもして、隱謀なども未然に防ぎ得られはするが、朋黨關係は可なり煩はしいものであると、清麿としては嗟嘆の省察に耽けられるのであつた。

感慨はそれのみでなく、今自分は藤原氏一族の雄田麿と、藤原氏一族の學動に絶えず警戒の

眼を怠つてゐない吉備右大臣と、双方からそれ／＼の朋黨でなければ容易に打明けられない機密——眞情を寄せられてゐて、その中間に立つ苦しさを味はされてゐると、思惟されたのである。微官自分の如き者に對して、かくも重大の位置にある人物のやうな仕向けをするのは、時勢の何處かに逼迫するものが秘んでゐる所爲ではあるが、之は自分の姉の法均尼が、宮中にお務めをして、絶へず聖上に咫尺し奉つてゐる因縁に目を附けてゐるからだと考へられた。つまり清麿と云ふ自身一個の存在を認めて重んずるのでなく、姉法均尼の餘光が其處に輝いてゐるのであるとは、はつきり清麿には判つてゐた。然う思ふと猶更以て派閥關係から遠距つてゐねばならないと感じはしたが、双方共に忠誠の一念から發した言葉を聞かしたのであるから、自分としては、皇國の安泰を希ふ至誠に生きて、時に臨んで善處すれば可いと、確と思ひを定めてゐた。

清麿は近頃になつて、道鏡太政大臣が法王に昇つたのに就て起つた人心の動搖が、稍鎮靜し、從てその時に聞かれた忌はしい種々な流言蜚語も、餘り人の口に上らぬやうになつたのを知つてゐた。それでも猶道鏡法王の血統のことは噂の跡を絶たず、此處彼處で囁かれてゐたが、それも以前程に高くないのを快しとしてゐた。多賀城が築城せられて以來、東北地方は安定して

ゐたし、怡土城の築造が筑紫に成就して國防は完全となり、爲に新羅國は恐れを爲して從來の無禮を謝して來たので、國の和平は保たれ、正しく紫匂ふ寧樂の都は黃金時代のやうに見られた。折柄の季節の春に酔うて、民心は治まる御代を謳歌し、東大寺の鐘の音は長閑けく緩う響き渡つて、菩薩の住める國同様な安樂淨土の觀があつた。清鷹にしても目出度いことにして、自分の職分に日毎勵んでゐた。

かゝる折柄に花の都の若人をして美望の眼を聳立たしめ、聽耳を聳立たしめることが起つた。それは道鏡法王には可愛い、姪に當る弓削淨人の娘美努久賣姫が、兼て婚約のあつた藤原良鷹の許に嫁して、花婿の家に送られた荷物の多量さ、それから花嫁が花婿の家に繰込んだ行列の華々しさ、續いては婚禮の儀式の嚴肅であつた模様、披露の宴の豪華さと、委細に涉つて過大に傳へられて、流石に今權勢並びなき道鏡法王の血縁者の結婚式であつたと、美努久賣姫が美しかつた丈に、取沙汰の渦を捲起したのである。

清鷹もその披露宴には淨人から招待を受けて、連つたのであるが、道鏡法王にしても餘程悦しかつたらしく、平生の權威振りをも忘れ、來賓の間に席を移して酒を勧めたりしたものであつた。媒約役として永手左大臣が二人の結婚の將來を祝福する言葉を述べ、續いて吉備右大臣

が來賓の總代として、新夫婦へ目出度い限りの讃辭を送り、弓削家繁榮の春を稱へたのであつた。河内守藤原雄田鷹も來賓として河内國から態々上つて來て、その宴席に姿を見せてゐたが、清鷹との座席が離れてゐたので二人は餘り語合はされず、僅に廊下で行遇つた時に雄田鷹は、

「犬鷹に作らせてゐる佛舍利は、今から十日程の後には出來上りますから、見に來てください」と、他人に聞かれるのを恐れて囁いたのみで、翌日には文の便りがあるか、それとも迎ひの使ひでも遣越すかと清鷹は心算りしてゐたのに、餘程忙しい間を切抜けてやつて來たものと見え、都に一日も佇止らずに河内へ歸つて往つたのを、清鷹は後で聞いた。

かうした弓削家の招宴に、近衛少監の職に就いてゐる者で赴いたのは、よしや押勝の亂に功勞を立てた廉で勤六等を頂いてゐるとは云へ、清鷹一人のみであつた。近衛中監や大監の地位にある人にしても、招かれなかつたのは數あつた。清鷹はこれもやはり宮中にお仕へする姉法均尼が、道鏡法王と日毎に宮中でお目に懸つてゐるので、それを基ひとした待遇であらうと思はれた。清鷹が姉法均尼への恭順、尊敬の念は強く、恐れ多くはあるが、いつ迄も聖上のお覚え目出度く忠勤を勵んで無事にその日を過すやうに希願つてゐた。

新婚の藤原良鷹と美努久賣姫は、里歸りや、双方の親戚訪問などの行事を済すと、氣候が良
いのに唆られもしたのであらう。良鷹の方から云出して、弓削家の祖先の墳墓が河内國弓削寺
にあるのに、參詣する次第となつた。美努久賣姫は弓削寺へは度々往つて、墓參りをしてゐる
のであるが、此處兩三年は往つてゐないので、之も良人が、弓削家への温い心盡しとして嬉ん
でその意に應じ、旅仕度を調べて、寧樂の都を後にしたのであつた。

美努久賣姫は四人で擔ぐ輿に乗つたが、良鷹は男のこととて徒歩であつた。その外に荷擔ぎ
も交へて供人は三人、その中の女一人は美努久賣姫が弓削家から伴うて往つた婢であつた。別
に急ぐ旅ではなかつたが朝早くに家を出て、一行は弓削寺への道を春風に吹かれながら辿つた。
道距は七里と云はれてゐたが、婢もゐるのでなか／＼はかどらず、雲雀の聲や鶯の聲、さては
美事に咲いてゐる道端の八重櫻に道草を喰つたりして、目指す弓削寺に到着したのは黄昏近い
頃であつた。

弓削寺境内の亂闘

—

「頼もう」

弓削寺の門を潜つて客殿入口の玄關前に一行が立つと良鷹の家來の一人は大聲を擧げて案内
を乞ふた。奥から雜僧が顯はれて來て、藤原良鷹殿の一行かとたづね、家來が然うであると答
へると、雜僧は聲張上げて、

「藤原良鷹殿御到着」

と、呼ば／＼つた。するとどや／＼と四五人の僧侶が其處へ姿を見せて、先づ足の濯ぎ水を盥
で運んで來たりしてから、良鷹夫婦を客殿に請じ、家來三人は次室に控へさせた。昨日使ひを
もつて、今日良鷹夫婦が弓削家の墓參に來るのを、弓削淨人の許から弓削寺へ通知されてあつ
たし、三四日乃至四五日は滞在するかも知れないとも合せ傳へられてあつたのである。

良麿夫婦が一休息した頃を見圖つて、弓削寺を預る僧の圓寛が正装して挨拶にやつて來た。弓削寺の眞實の住職は道鏡法王に仕へる法臣の圓興であつて、圓寛は圓興の弟子として、圓興に代つて弓削寺一切の切盛りをしてゐるのであつた。従て美努久賣姫に取つては菩提寺である外に、同様の家へ赴いたやうな、いとも安意なこゝろもちで宿泊も出來、滞在も出來るのであつて、良麿にしてもその次第を新妻や淨人から聞かされて、打寛いだ氣分になつてゐた。

「當寺を預る圓寛で御座ります。遠路能くこそその御入來、昨日淨人殿御館よりのお使ひもあり、又當寺住職圓興殿よりも、法王の御用繁多の爲め、罷越されぬが、法王が善くお待遇しを致すやうにとのお言葉があつた旨を、早使ひをもつて申してまゐられまして御座ります。美努久賣姫殿には既にお目に懸り居りますが、藤原良麿殿には初のお目見え、當度は先づ以てお目出度き御婚儀、良麿殿へも、美努久賣姫殿へも、千代萬代の末迄と、お祝ひの言葉を申述べます」
四十四五歳位と思はるゝ圓寛は、掌にした珠数を揉んで二人を祝福した。

「祝ひのお言葉忝う存じます。弓削家の縁に繋る身となりましたので、弓削家御先祖の御墓参りを思立ち、美努久同道で伺ひました。三四日滞留いたしたいと存じます故、何卒よろしく御願ひいたします」

良麿は慇懃な口上で述べた。

「はい、その儀は能う心得て居ります。圓興住職が當寺にある間は起臥致しまする庭に面した二間、圓興住職の指圖に依りまして、其處を御滞在中の御寢所なり、お居間として用意を調べて居ります。寺のこと故何の御馳走も御座りませぬが、お氣兼ねしに御滞在遊ばすやうにお願ひいたします」

「圓寛殿はいつもお健かに在すのを、お喜び申し上げます。今度は又突然のことに御寺へまゐりまして、お手敷を懸けますのをお氣毒に存じます」

良麿、美努久賣姫、圓寛とかうした挨拶言葉を猶も繰回した後、良麿夫婦は圓寛に導かれて、滞留中の居室となる二間積きの小房に入つたが、其處は嘗ては道鏡法王が當寺の住職であつた頃には、やはり起臥してゐたので、當時の痕跡の残りある態を圓寛は語りなどするのにな、夫婦は耳を傾けて懐しい思ひをした。供人達もそれ／＼別に室を宛はれたのであつた。然うして良麿夫婦は湯槽にも浸り、夕食をも終つて、旅先の初夜を事なく過したのであつた。

翌日は夫婦して弓削家の墓の前に立ち、美努久賣姫は婚儀の次第を墓に對して述べ、良麿も恭く花を供へ水を供へたが、其間を弓削寺の僧大勢は鈴を鳴らして讀經した。良麿は道鏡法王

の血統の話を知つてゐたが、それに觸れるのを恐れたのか、墓に就て何も尋ねたりしなかつた。更に改めて金堂の阿彌陀如來の前で、良麿夫婦を施主とし施我鬼を執行すると、最早その日の日程を恙なく終つたとして、昨日の旅の勞れもあるので、夫婦は何處へも出懸けずに休息を取つた。

三日目となると、朝の間は圓寛の案内で、寺の近傍に飛鳥朝時代の遺跡が残つてゐるのを夫婦で見物し、その他二三の名所へも足を向けたが、寺へ歸つて中食を済してふと、良麿は寺から程遠からぬ處に、もう永年逢はない昔時は親しかつた所縁の者が住んでゐる筈なので、それを訪問ねたいと云つて、自身のみで供人一人を連れて出懸けて往つた。弓削の地へ來てゐながら、此地に假の館を構へて河内國を代統治する傍ら、現に行はれつゝある弓義宮御造營を支配してゐる良麿に取つては同族の一人左中辨藤原雄田麿を訪問しないのは、儀禮に缺く次第になるから、若し訪問先から早く歸られ得られたならば、夫婦して雄田麿の館を訪問しようと言合はれてゐたのであつた。

婚儀を擧ぐる爲に良麿は、半月餘りも官廳から暇を貰つてゐるので、結婚以來殆ど片時たりとも側を離れたことのない良人が、假令暫時なりとも他人を訪問に出て往つて、側に姿を見な

いと云ふことは、不思議にも美努久賣姫に或る暢々とした心地を起さしめた。婢は恰度野庭の方で旅で汚した婢自身の衣裳の裾を洗つてゐるのを美努久賣姫は知つてゐた。何と云ふことなしに室の前の庭へ、其處にある履物を穿いて降り立つと、四邊には春の陽影が漲り渡り、あるかなきかの微風には花の薫りが籠つてゐるのに誘はれたものらしく、庭の奥に躑躅が七八株程かたまつて、紅、白、斑と色とり／＼に咲いてゐる方へ歩み寄つて往つた。

暫時躑躅花を眺めてゐたが、不圖腫を上げた途端に、其處に庭を圍ふ土塀の切れ目があつて、板戸はありはしたが、その板戸が外に向いて開き、八重櫻、山吹と咲亂れてゐる外庭がづゝと見渡された。往くともなしに開放しになつた板戸の側に立つと、外庭を越えて、本堂の邊り迄も見渡された。直ぐ足許に小徑が出來てゐたが、美努久賣姫の胸に、幼年時此寺へ父や母と共に參詣した時、確に此小徑を歩いて金堂の方へ出て往つたのが想出されて來た。いつ足を擧げたと云ふことなしに彼女は小徑を歩いてゐた。厨とは反對側なので、其處で洗濯してゐる婢の眼にもつかず、寺僧の眼にも觸れなかつた。寺の食膳に供する爲らしく小徑の兩側は蔬菜畠になつてゐた。

彼女の髮油の香を慕うてか、黄な胡蝶が行きもやらず、隠れもせず彼女の前後左右を舞ひ

廻るのであつた。それを面白いことに思つて、猶も足を進めてゐる中に、小徑は盡きて、境内の一角に出てゐた。金堂、講堂、塔、鐘樓、鼓樓と甍を並べ、然うして其等の建築の一つと、他の堂とを繋ぐ廻廊も見られた。境内にも八重櫻は咲き、三四の参詣人の姿も見られたが、寺境内が持つ寂莫がその邊りを支配してゐた。彼女はもう大膽になつて來てゐて、門近くにある五重の塔の方へ歩みを運んだ。塔内に飾られてある御佛を参拜せんと思つたのである。然うして塔の外廊下に登つて参拜を遂げ終つた時、不意に門の方で騒々しい喚き聲が起り、片肌脱ぎの男が、境内へ驅込んで來たが、その手には厨で使ふ双物を持ち、身體の何處かを怪我してゐるらしく、手は血汐に染り、顔にも血を浴びてゐた。と、その男を追ふやうに棒切れを振翳した六七人の男が、口々にわめき立てながらそれに續いて姿を見せて來た。

二

血で顔を染めた片肌脱ぎの男は、塔の前迄來ると立直つて、追うて來た男達と勝負を決しようとするらしく、双物を頭上に振翳して立向つて往く姿勢となつた。追うて來た輩合は双物持

つ男の側迄進んで來たが、その勢ひに吞まれたと見え、やあくゝと懸聲は立てゝも、各自の棒切を空に振廻す限りで、敢て近寄つて打合はうとはしなかつた。

彼女は眼前に展開したかうした凄まじい光景に心をわなゝかし、早くその場を立去りたいと願つたが、双物持つ男が餘りに塔近く立つてゐるので、大地へは降りられず、一瞬途方にくれた思ひがした。廊下を廻つて塔の背後に出ようとする、其處には往かれぬやうに竹矢來が出來てゐるので、彼女は突嗟に思ひついて、御佛を祀る塔の下層の大きな扉が外へ開かれてあつて、その背後に身體を潜ます丈けの空所のあるのを眼にすると、急いで其處へと身を隠した。扉に可なり大きな木目割れがあつたので、外の様子は残すところなく、その木目割れから覗かれた。

「下人達、俺さまを知らないのか、勿體なくも當河内國を治めてお出でになる藤原雄田鷹様の家來だぞ。俺に無禮をした何處かの奴を、ものゝ機^{はず}みで斬つたのが悪いのか」

双物持つ男が大音聲を張上げた。

「悪いとも悪いとも、人を斬つていゝことがあるか」

「左中辨様の御家來なら猶更のことだ。左中辨様は平生から他人と喧嘩口論するな、双傷沙汰

はきついお禁止はつとにしてお出になるのだ」

「さあ、その双物を放擲はなり出せい。然うでないとい痛い目をせねばならないぞ」
棒切れを持つ輩たぐひは交々に罵り回した。

「何を弱蟲共がほざきやがる」

然う云ふと双物持つ男は、最後に罵り回した男を目懸けて突進した。その男は逸早く遁れたが、横合から双物持つ男に棒を打下した男は、その棒を握られた上、無残にも肩の邊りを双物で突かれた。その男はわつと聲を立て、斬られた肩口を壓へ、棒を放して倒れると、續いて他の一人が打懸つて往つたのを、双物持つ男は軽く身を轉じて引きはずすと、その男にも肩口の邊りへ双を當てた。それでも追つて來た人達はひるまなかつた。續いて二人左右から打懸つて行き、暴れ狂ふ双物持つ男を、叩き伏せようとするのであつた。

眞日中しかも御佛を祀る寺の境内で、血を見る亂闘騒ぎなので、木目割れの間から覗いてゐる彼女は、胸はわく／＼して氣も顛倒するばかりであつた。然うして追うて來た方が遁れ去るか何とかして、寸時も早う鎮靜るやうにと、御佛の名を口にして念じてゐると、もう中門の邊りには騒ぎを知つて集つて來た物見高い近隣の見物人が十五六人も立つて居るのを振分けて、

何處かの館の家來態の男が姿を見せ、

「左中辨様がお越しになつたぞ。何人も鎮まれい」

亂闘する此方へ向つて叫んだのが彼女の耳にも聞取られた。叫んだ家來態の男が、亂闘する方へ驅出すのに續いて、衣冠正しく河内守代の役服を着けた藤原雄田鷹が姿を見せて、これは走らずに急ぎ足で、血醒い打合場へ近寄つて來るのが木目割れから覗く彼女の視線に映じたのであつた。然うした下知を傳へる叫び聲も、左中辨藤原雄田鷹の姿も、双物と棒で争闘つてゐる輩合には、聞こえもせず。眼にも映らないらしく、今しも一人の男は、双物持つ男に棒を取られた上、胸の邊りを斬られたやうだつた。

恰度その時左中辨藤原雄田鷹の到着を叫んだ雄田鷹の家來らしい男は、双物持つ男の前へ進んで來てゐた。

「犬鷹どうしたことだ、此體てい裁さいくは、酒を飲んだな。酒を飲んだ上に人を無法に斬るなど、あれ見い、殿様がお越しになつたぞ、その双物を捨てい」

「此の双物を捨てたなら、此奴等に打ちのめされて了ふ。松鷹殿、朋輩ともだちの好誼よしみで早う加勢して下されい。此奴が／＼」

松鷹の言葉など耳に入らない態で、近くに左中辨様お越しと聞いて争闘ひを止めやうとしてゐる男へと、犬鷹は双物を振上げて突懸つて行くのであつた。酒に酔ひ果て、無差別になつたのか、血を見て血逆上せに狂つたのか、最早犬鷹は常人の沙汰はなかつた。

「双物を叩落して、犬鷹を縛つて了へ」

もう側へ来てゐた雄田鷹が松鷹に烈しい聲で下知した。その顔は怒りに燃えてゐた。雄田鷹に引添うて雄田鷹の家來の梅鷹もやつて來てゐたので、松鷹が喧嘩相手の棒切れを持つ男の一人から棒を受取つて、犬鷹の方へ進み寄つて行くと、梅鷹も同じやうに、うろく／＼してゐる喧嘩相手の男から棒を受取り、棒をしごいて松鷹に加勢した。然うして松鷹と梅鷹の手で見える見ると、犬鷹は手にした双物を打落され、二つ三つ打ちのめされて地上に倒れたところを、喧嘩相手の男達はもう大丈夫と見て取つて最初から用意して來たらしい繩をもつて近寄り、一同で犬鷹を身動きならぬやうに縛上げて了つた。

「何だつて俺を縛るんだ。俺様は殿様に取つては功名者なんだぞ、佛舍利を作る名人の犬鷹なんだ。縛ると云ふ法があるか」

犬鷹は大聲を上げてわめいた。それを聞くと雄田鷹の頬はビクリと動いて、

「こりや喧嘩相手の下人達、一刻も早く此場を立去れい。沙汰は此方から後でしてやる。立去れい。愚圖／＼してゐると、同じやうに縛つて牢獄へぶち込んで了ふぞ」

三

河内國代守護の左中辨藤原雄田鷹の殿しい命令聲は、喧嘩相手の下人達の耳には、雷が眼前に落ちたとも響いたことであらう。互に顔を見合して、犬鷹に傷付けられたものを負背つて、匆々に足音を亂して引上げて行つた。その間にも犬鷹はほさき聲を止めなかつた。

「繩を解いてくれ。繩を解け、苦しうてならぬわ。佛舍利の罰が當るぞ。俺を縛つてどうするのだ」

犬鷹が縛られて地上に轉つてゐる場所は、塔の直ぐ前なので、塔の下層の扉の背後に身を潜ましてゐる美努久賣姫の耳には、犬鷹の悶え聲も、雄田鷹の命令聲も能く聞取れた。犬鷹と最初松鷹が口走つた時に、父や兄や家來の口から屢々聞かされた名なので、はてなと思ひ、それに犬鷹が館に捕へられてゐた間に、一度庭先まで顔を合したことがあるので、篤と見ると間違

ひもなくその男であつた。父や兄がどう云ふ譯で犬鷹を捕へて米倉へ閉込めたか知らなかつたが、曲者が忍込んで盗出して往つたのは知つてゐたし、その後父や兄が法王の仰せで、懸命に行衛を探してゐるのをも聞知つてゐるので、その男が前刻からの様子で、雄田鷹の身近う潜んでゐたのだと判ると、合點のいかない思ひが湧上つて來てゐた。

雄田鷹は喧嘩相手の下人達が引上げて往つて了ふと、歩みを移して塔へ上る踏石の上へと腰を降した。縛られた犬鷹は五尺と放れてゐない土の上に轉がつてゐるのである。

「犬鷹、其方はあれ程誠めて置いた酒を飲みおつたのだな。酒に酔ひしれて居酒屋の器物を毀し、人を斬り、此境内へやつて來ても又二三人の手傷を負はしてもまだ酒の酔ひは醒めぬのか、言語同斷の悪行、縛られるのは自業自得だ」

その聲に犬鷹は自由の利かぬ身體を藻掻いて、漸く顔を雄田鷹の方へ振り向けると、初めて其處に雄田鷹の居るのに心附いた様子で、

「おゝ、殿様、犬鷹の此繩を解いて下さりませ。犬鷹は何も悪いことは致しませぬ。彼奴等が先に私を渡り者などと悪口したので御座ります。早う繩を解いて下さりませ」

「其方の酒癖の悪いのを自分自身で知つて居り、大事の御役目には必ず酒を飲みませぬ。飲み

まする時はお許宥しを得た後でと、堅く盟ひの言葉を立て、置きながら、漸く命ぜしものが昨日出來上りし今日は早や此始末、見下げ果てた奴だ」

怒るよりも雄田鷹は情けないらしい言葉附きであつた。

「殿様、私が作つた東大寺へ納められてゐるあの佛舍利と、同じものを作れいとお仰せに従ひまして、昨日漸く東大寺のと見分けのつかない佛舍利をこしらへ上げて、犬鷹はお手元へ差出しましたので御座ります。それを作り上げる爲に、永い間殿様にお盟ひして斷つて居りました酒では御座りますが、今日久し振りでのび／＼此邊を歩き、酒の匂ひを嗅ぎますると、もう如何うにも我慢が出來ず、仕事が出來上つた嬉しさに、つい飲過ぎましたので御座ります。どうぞお許宥しの程を願上げます」

犬鷹の酒はどうやら醒めて來て、平心を取戻したらしかつた。

扉の背後で然うと聞いた美努久賣姫は、何と云ふ恐ろしい秘密が此世にあるのであらうと、聞いたのが情なく恐ろしく、胸はわく／＼して來て、思はず踏躑めかうとしたのを、ならじと直つた機みに、身體を扉にうちつけて物音を立てたばかりか、頭髮も扉へ觸れたと覺ぼしく、頭髮に髣してゐた木櫛が脱けて、下の縁に轉がり出た。と、雄田鷹は身體を振り向けたが、眼前

に轉つてゐる木櫛を眼にすると、立上つて身忙しく塔の縁に上り、木櫛を拾上げて檢分した後、歩を進めて扉の背後に潜んでゐる彼女を發見けた。

「何者だ。此方へ出い」

雄田鷹の聲は鋭く厳しかつた。彼女は最早隠れ果すことが出来ないとも木櫛を落した時に覺悟してゐたので、悪怯れずに扉の背後から脱け出して雄田鷹の前に立つた。

「おゝ、貴方は美努久賣殿、今度御婚儀を挙げられし良鷹殿と連立ちて、當寺に御滞留になつてゐるのを聞いては居りましたが、かゝる場所でお目にかゝらうとは、思ひも寄りませなんだ」雄田鷹は早口に云つて、心の動搖を隠さうとつとむるやうだつた。

「先刻一人で此塔へ參詣いたしましたのに、降つて湧いて來たやうな先刻からの騒ぎ、最初犬鷹とか申すその男が刃物を振廻してゐるのが恐ろしう御座いましたので、此の扉の背後に隠れたまゝで居りました」

彼女は少しでも取亂したやうな容子はなく、言葉は慇懃を極めてゐた。

然うと聽くと雄田鷹は振返つて、思はぬ彼女の出現に愕いてゐる家來二人の方に向ひ、

「松鷹、梅鷹、犬鷹奴を繩を少しく緩めて館へ連れ歸るがよい。それから彼處に寺僧達が立つ

てゐらるゝのが見える。雄田鷹後程お挨拶致すに依て、匆々寺中へお引取りあるやうにと傳へ、屹度その邊にゐないやうに致せ」

松鷹と梅鷹は主人の命令に従つて、犬鷹の繩を緩めて立上らせ、一人は彼方に立つ寺僧の方へ走つて往つたが、その旨を傳へたと見え、寺僧達の姿は直ぐ見えなくなつて了つた。然うして犬鷹は松鷹梅鷹に連れられて、立去つて往つたが、松鷹は主人一人として置くのを氣遣つたのであらう。門の邊りで握つてゐた犬鷹の繩尖を梅鷹に渡して連れ歸らしめ、自己は残つて最早人影のない境内に警戒の眼を配つてゐた。

四

「藤原良鷹殿の奥方、其處に立つてお在はさず之へお腰を降しなされては如何で御座ります」雄田鷹は塔内の佛前へ進む時に超える闕しきの塵を拂つて彼女を請じた。それに應じて彼女が素直に其處へ腰を降すと、自身は塔の縁へと、恰も彼女が立去らうにも立去り難いやうに道を塞いで腰を降した。

境内は森閑として小鳥の囀る聲が聞こえるばかりであつた。

「良鷹殿の奥方、それでは私があのだ鷹に申した言葉、又だ鷹が私に申しました言葉を、残らずお聴きで御座りましたらうか」

「はい。残らず耳に入れました。然うして世にも恐ろしい秘密があるものと、空恐ろしく思ひました。併し雄田鷹殿、お心遣ひ遊ばすに及びませぬ。私は胸に浮ぶ不審の數々を何事も問はうとは致しませぬ。私は藤原良鷹の許へ縁付きまして、藤原一族の一人で御座ります」

「何と仰せられる」

「藤原一族の一人となつた若妻が、嫁入り匆々、何として藤原一族に苦痛を與へ、害になるやうなことを致しましょう。私は最初から藤原一族に嫁入した上は、弓削一族と藤原一族との間に掘られてある溝を、安易に行通ひの出来るやう、埋めねばならないと思つて居りました。伯父道鏡法王に依て榮えるやうになつた弓削家の今日の繁昌を、藤原一族の方々が快う思つてお出でにならないのを、私は能う知つて居ります。惠美押勝の謀叛にしても伯父法王を退けやうとしたのが發端、その時に藤原家の人々は大勢殺されました。何で藤原一族の人が、伯父法王を快く思はれませうや。然うして私は今は藤原一族の一人で御座ります」

美努久賣姫は風が吹出して、頬に懸つて來た頭髮を小指の尖で搔上げた。

「良鷹殿の奥方はそのやうなお心構へで御座りましたか」

雄田鷹は溜息を洩らすやうに云つた。

「然うは申しまするものゝ、私は弓削淨人の娘、藤原一族で快う思はぬ道鏡法王は伯父、切つても切れぬ弓削一族の血縁の身で御座ります。弓削家の害になるやうなことを見遁したくは御座りませぬ。よしや此地で新しく佛舍利が造られてゐること、だ鷹が貴方のお館に潜んでゐたことを、伯父法王や、父淨人に金輪際告口致さぬことにしても、何うかうした事柄を捌いて行けばいゝかと、些と私の思案になり兼ねます。何ぞいゝ考へを貴方様のお胸にお思ひ浮べて下されませうやうにお願ひ致します」

「御立派な良鷹殿の奥方のお言葉、雄田鷹ほと／＼感心いたしましたして御座ります。私に直ぐ奥方の仰有るやうな考へも胸に浮び上りも致しませぬが」

雄田鷹は些つと考へる態に言葉を切つたが、彼女の顔を見て、澄んだ美しい瞳の色を見ると、急に思附いたやうに、

「美努久賣姫殿のお心地は能く解りました。私は何もだ鷹に法王の害になるやうに、又姫のお

父上の淨人殿に害を加へる爲に、犬鷹に偽せの佛舍利を造らせたのでは御座りませぬが、犬鷹が作つた贋がまひものはそのまゝ河へ捨てるか、粉微塵に壞いて了ふかに致したいと存じます。私の此言葉を御信用下さいまして、贋がませ佛舍利のことは、見ざる聞かざるお前様の以前のお心にお回りの程をお願い致します。それでもお疑ひあらばその偽せ佛舎利の破却に、お前様御自身でお立會ひ下されてもよろしう御座ります」

「そのお言葉を聞けば、私は何事も聞かなかつた以前もとの心に回へられます。假にも左中辨侍従であらせられて、由義宮御造營と河内國守護代行とを兼てお出で遊ばす貴方様を、女の私が疑うてなりませうか。藤原一族の者は同じ藤原一族の者をお欺きになる筈は御座りませぬ。然うして此事は良人良鷹にも申述べずと置かうと存じます」

「良鷹殿は此場に居合はされず、何事もお存知ないのに、強いてお愕きを與へるにも及びますまい。やはり見ざる聞かざるお心に回へられた奥方は、お口外なされぬ方がおよろしいと存じます」

「それでは之でお話は済みました。餘り此處に長居してゐては、寺僧達にも怪しまれます程に、私は之でお暇をいたしたいと存じます」

言葉靜に云つて、彼女はもう身を立てゝゐた。

「それでは良鷹の奥方殿、屹と言葉をお番ばんへ致しました。見ざる聞かざるお心に回つて、私方とも仲善くお心易く、私の館へもお足をお運び下さいまして、私の妻ともお交際くわいひ下さいませやうにお願いいたします」

雄田鷹は念を押すやうに云ふと、彼女の歩む道を開くやうに、身を動かして塔の縁から地上へ降り立つた。もう歩き出してゐた彼女はいとも落附いた態度で、塔の階段を踏んで地上へ降りて雄田鷹と對向ふと、足を佇止め、

「良人は只今他行中で、早く歸つて参つたならば、お館へ私同道でお伺ひ致すと申して居りました。今日お伺ひが出来なければ、明朝は必ずお伺ひ致します程に、奥方様にもお紹介おまはせせをお願いいたします。それでは之で失禮さして頂きます」

町重に禮を施したのに雄田鷹も慇懃に禮を回し、彼女が以前境内へやつて來た小徑の方へ歸つて行くのを見送る眼色は、最初は感謝の思ひを見せてゐたが、漸次に無念らしい色に變つていつた。

太宰主神中臣習宜阿曾鷹

一

美努久賣姫の姿が見えなくなつて了ふと、雄田鷹も足を上げて門の方へ歩き出したが、それと見た松鷹は進み寄つて主君の背後に従つた。雄田鷹の胸中には一種複雑な感情が動いてゐた。國家の害毒であると同時に、藤原家繁昌の前途を阻む道鏡法王を退けんとする企畫の一つが、脆くも根底から覆された残念さで、胸は沸え繰り返つてゐたが、それと一緒に、都合よく濟んで大事ともなる難を遁れ得たと、吐息がつかれるやうな安心した思ひもあつた。

「弓削の娘としては能く出来た感心な婦女である」

彼女のことを考へて、然う心の中で呟かれたが、犬鷹のことに思及ぼすと、齒軋りせられるやうな怒りが湧いて來るのであつた。自分が由義宮の御造營見廻りに往つた歸り道、折善く弓削寺の近傍を通りかゝつたからいゝやうなものゝ、若し然うでなかつたならば、酔ひ強れた犬

鷹は野放圖に暨せ佛舍利を作つたことを廣言して、諸人の耳に入れたのを知らずにあねばならなかつたのであると、下人の放埒無残さを憎まれもした。

館へ歸り着くと途々考へて來た犬鷹の無法な舉動に對する處置として、居酒屋の器物破損に賠償をしてやり、手傷を受けた者には心を和め得らるゝやうな方法を取り、境内を騒がした弓削寺へも音物を贈るやうに、松鷹に命じた。蟻の穴からも千丈の堤が崩れる譬へ言葉を遵奉して、總てを護つて人の口を塞ぐ方策を行つたのであつた。

犬鷹は繩を解いて、外へ出られぬやう錠の下りる室に閉込めてあるが、今は前後不覺に寢入つてゐる旨の報告を、梅鷹から受けると、領いた限りで、怒り言葉も問ひ言葉も出さなかつた。妻が側へやつて來て白湯一碗を勧めたのを取上げて、咽喉の渴きを癒すと、その妻にも退いてゐるやうに命じて、自身の書齋に座して切に考へ込んでゐるのは、美努久賣姫に盟つた暨せ佛舍利を破却する方法と、破却した後、近く見に來てくれいと美努久賣姫結婚の披露の宴で、清鷹に云つた言葉を、何うした態に取消したらいいかとの思案に外ならなかつた。其處へ用人がやつて來て、筑紫太宰主神中臣習宜阿曾鷹が、訪問して來たのを告げた。

「阿曾鷹殿がお越しか、客殿へお通し申してくれい」

雄田鷹は用人に命じて、猶も思案に耽つてゐたが、阿曾鷹が客殿へ通つた頃を見圖つて立上つた。

阿曾鷹は四十三歳の壯年者で、筑紫中の御社を統轄する太宰主神と云ふ役目の外に豊前介の役名を持つてゐた。二年以前に宇佐八幡比咩神の神願を朝廷に以聞して、効果が歴然顯はれた功勞に依て、去年六月從五位下に叙せられた筑紫太宰府中の利け者であつたし、才物でもあつた。藤原家一族は總體に筑紫の太宰府とは縁故深く、太宰帥を初め太宰大貳や少貳の役柄は父祖代々藤原氏が位置を占めてゐて、天平十二年に筑紫で反亂を起した藤原廣嗣にしても、都から貶せられて太宰少貳の役に就てゐたのであつた。そんな理由で雄田鷹は父とも懇意であつた阿曾鷹を疾くから知り、阿曾鷹は都へ登つて來ると、必ず雄田鷹の兄の良繼の許や雄田鷹の館へ姿を見せて、時には宿泊つて往くことさへあつた。

「能くこそお越し、先頃都へ登つてお出でになつたことは、都からの言傳で聞いて居りましたが、此河内國迄訪ねてお越し下さるとは思ひも懸けませなんだ。先づは御壯健でお祝ひ申し上げる」

雄田鷹は客殿へ出て阿曾鷹と對座すると、對手が普通の役柄でなく神官と云ふ特種階級でも

るので叮嚀な口を利いた。

「左中辨侍從雄田鷹殿にもいつも御壯健で祝着の至りで御座ります。都へ参りまして雄田鷹殿にお拜顔を得ませぬと、都へ登つたやうな氣も致しませず、殊に筑紫へ迄響き渡つてゐる由義宮の御造營のお宰領を遊ばして被入ること承はり、由義宮御造營の模様も拜觀したく、恰度私身寄りの者が此弓削の里近くに居りますので、昨日は都から其家迄辿りつき、今日かうしてお目にかゝりに推參致しまして御座ります」

身體の大きい骨組の頑丈な阿曾鷹は眞實然うと感じてゐるらしく、楽しさに堪へない眼色を見せてゐた。

「他處外へお泊りなさらずに、我館にお泊りあらば宜ろしかつたのに、どうぞ今日はお緩然りとあらせられい。然うして今度筑紫から都へお上りになつた御用向きは、何か緊急な事件でも御座りましたか」

「太宰府に出仕致しまする主神に、緊急の事件なぞありやうは御座りませぬ。筑紫に鎮座します数多くの御社の中、御二社の御修繕、其他二三件の用向きを持ちまして、中務省へ打合せにまゐりました外、私が去年叙位に預かりましたお禮言上の爲で御座ります。一年か二年の間

に一度、かうして都へ登つてまゐりますのは、云はゞ役徳、都の風に當つて見聞も擴まり、日頃筑紫の果てに蟄居致して居らねばならぬ憂さも晴れまする」

「筑紫からの長い船旅、泊り／＼の港では面白い事柄にもお遭遇なされ、珍らしい話も聞かれませう。それも御役徳の一つで御座りませうな」

然う云つて雄田鷹が笑ふのに和して、阿曾鷹も大きな眼を細うして笑つた。

「都へお登りあつて、何か變つたことがお目につきましたか、私もかうして河内國に引込んで居りますので、此頃は一向に都の消息に通ぜず、田舎者になり果てました」

「それでも此河内國から都は近く、何かと都の容子はお耳に這入りましようが、私のやうな一年か二年目に登つてまゐります者には、いやはや來る度毎に都の姿、人心の變り方に魂消て了ひます。何様都は衆智の集るところ、學問研究の盛んなお膝元、筑紫にゐては時代に遅れるとつく／＼と感じさせられました」

「何がそのやうに阿曾鷹殿を魂消させましたな、筑紫から出てお越しになると、それ程都の人心の變り方などが眼につきますか」

「眼につきます段ではお座りませぬ。先づ第一には道鏡法王の御威勢の盛んなこと、私は都で法王の御通行に朱雀大路でお遭遇ひ致しましたが、守護する人の大勢なのは兎も角として、警蹕の聲が懸るのには驚きました。通行人の誰もが右往左往して唯是れ恐れ恭ひ、土下座してお迎へ申します。恐れ多い言葉で御座りますが、まるで御皇族様の御通行遊ばしますやうな有様で、誠に恐れ多い次第だと感じさせられました。雄田鷹殿、一體あれでいゝので御座りませうか」

「なる程。筑紫から都へお越しになつて、先づ然うした事が、珍らしくお目につきましたか。阿曾鷹殿、今道鏡法王の御威勢は、天に二つの日なきに、今一つ日が加はつたやうな有様で御座ります。道鏡様と云へば泣く兒も鎮まり、空飛ぶ鳥も墜ちる程なので、お前様がお通行に行遇うてお驚きになるのは尤な次第、恐らく前代末聞。惠美押勝にしてもあれ丈の威勢は持ちませなんだ。思うてならざるはなく、行うて爲し遂げざるはなく、それを都の人々、朝廷に仕へる人達も最早不思議と思ふ人は一人もなく、馴れ切つて居ります。お前様は筑紫にゐて、それを御承知になりませんでしたか。筑紫迄も聞えて居りましように」

「何様、太政大臣のお位とお一緒に假にも王と名のつく法王の位にお昇りになつたので、お威勢は盛んだとは誰人も思つて居りますが、あゝ迄には私にしても考へ及びませなんだ。それに

藤原家でもお家柄の雄田鷹殿迄が、道鏡法王を、思うてならざるはなく、行ふて爲遂げざるはなしと、取澄してお出でになるのには、何更以て愕かされました。それ程迄の御威勢に道鏡法王はなつてお出でになるのでしたか」

阿曾鷹は呻り聲を立て、感じ入つてゐた。

二

「その外に何ぞ都で變つたことがお目につきましたか」

雄田鷹は餘りと阿曾鷹の驚き方の烈しいのに、地方人の迂濶さが偲ばれて、頬に微笑の陰影を漂はせてゐた。

「まだ／＼ありました。大學寮へは一日、筑紫に長くお出でになつた吉備右大臣殿の御紹介で見學にまゐりましたが、其處で行はれてゐる唐學の盛んなのに愕かされました。此處は日本國でなく唐國のやうな氣がいたしました。恰度或る教室で堯舜の御代變りの講義が初つてゐましたのを拜聴致しましたが、まるで朝廷の御代變りは、堯が舜に繼がしたやうに、徳のある人を

立て、往くのが、進歩した御代變りのやうに説かれ居りましたので、益々以て驚かされました。日本國は萬世一系、皇統連綿として變りなきを國是として萬民は歡び、異邦へ誇つて居りますのに、之は何たることであらうと、雄田鷹殿、ほんに筑紫にゐてはお時世に遅れます。それにしても餘りとは異説、私の驚きますのに無理は御座りますまい」

「大學寮の學説は近頃變つてまゐりました。それも今迄にない法王と云ふ王の名が臣下の人につけられた影響だと思ひます。その外にまだ何かお驚きになつたことがありましたか」

「之は愕いたのではなくて、不思議なやうな氣がいたしました。道鏡法王は私と同じやうに饒速日命の御子孫と思つて居りましたのに、都では法王は思れ多くも天智天皇の御孫王子の第六子で御在らせらるゝと、専ら噂してゐるので御座ります。之迄には聞かなかつたことで、定めし雄田鷹殿のお耳にも這入つて居りましょうが、法王は然うした尊いお血統でゐらせらるるので御座りますか」

「然うした噂は私も聽いてゐますが、それが眞實やら偽りやら、私は調べたこともない故、何ともお返辭は致し兼ねます。それが若し法王のお口から出たのだとすれば、然うと信ぜねばならないかも知れませぬ」

「法王がお自身然うと仰せになつたので御座りませうか」

「法王御自身がお語りなく、それを聞いた人が吹聴しなければ、然うした噂が立つ筈がないと思はねばなりません。私は唯それを申した迄のこと、法王が自分お語りになつたか、ならないか、それは一向に存じません」

「雄田鷹殿、之は大事で御座ります。かゝる大事の事柄が、お言葉のやうに疑問のまゝに打捨てゝあるのは、私には一圓合點がまゐり兼ねます。中務省で能く取調べて噂の根元を取糺すなり、眞實であれば眞實であるやうに、外ならぬ權威並びなき法王のお身に關してのことなれば、諸民の得心のいくやうに、判然とさせて置いた方が可いと思ひますが、中務省は何故それをしないので御座りませう」

「それも私には解らぬこと、國の政治には裏、表があり、不都合と思はるゝ事件も取糺さず放擲つて置くこともあり、さでもなき事柄を大業に取扱ふこともあり、時と世につれて執り行ふのが動く政治の正體、何ともお答へが致し兼ねます。阿曾鷹殿、お前様の驚きと不思議さはそれでお終了ひで御座りますか」

「いや、まだ御座ります。如何に佛教國になり果てたとは申して、諸民が日本國の神々に對し

奉りて、崇敬心を失ひたる有様、誠にいやはや言語道斷、沙汰の限りで御座ります。一例を取つて申上げますと、私がかうして身の神官たるを示す白衣を着けて、都の町を歩いて居りますのを私の癖目かも知れませぬが、都の町人は何の事はない流人が歩いてゐるやうに、蔑みの眼で見るので御座ります。腹が立つのを通り越して情なく、日本は神の國であるぞ、日本國八百萬の神々を崇め奉る心を忘れてはならない。神にお仕へ奉る者に、そのやうな眼色を見せるとは何事であるぞと、四辻に立つて怒鳴りたくなつたことが幾度も御座りました」

「それはお尤のお感慨で御座ると、雄田鷹お察しが出来ます。法王の職が設けられてより、僧侶の光りは急に増し、時には朝臣をも凌ぐ世の中、僧侶でなくば人でないかのやうに諸民は思ふて居ります。然うして禮拜するのは御佛ばかり、神々の御神威、御神徳を信仰せぬのではなけれども、薄うなつて居りますのを、私は嘆かましいことに此日頃考へて居ります。神佛は混淆せられて、神も佛の示現なりと見られてゐるので御座ります」

「雄田鷹殿、私がかうした都の人達が、神への崇め心を失つてゐるのが残念でなりません。何とかして皇國の神の御神威、御神徳を、都の人に示して、日本國民の本來の心に立回へるやうにせねばならないと、都の町を歩いてゐる中に、いろ／＼と考へまして御座ります」

「然うして何かいゝお思案がつかまして御座りますか」

「然う直ぐ思ひつきも致しませんが、今の世の有様では先づ第一に道鏡法王のお心からして、皇國の諸々の大神は御佛の示現ではないと、眞實の崇め心を昂められるやうに仕向けねばならないと、それだけは確と思ひ定めました」

「義淵僧正や行基大僧正がお説きになつた本地垂迹説を覆へさうとするお前様の大望、それに道鏡法王はもとからの僧侶で、葛城山に籠つて如意輪の法を修め、此地の弓削寺にも住職としてお出であつた御方、そのお方に改めて、皇國の大神の御神徳の程を知らしめやうとするのは、些と難しいことのやうに考へられます。しかしその考へは悪いとは思ひませぬ。道鏡法王が日本の神々を深く崇め奉られるやうにおなりになつて、神職に在る人達に僧侶同様の威光をお附けになれば、都の人が白衣の神官の人達に、失禮な眼を送ることなど、直ぐ止つて了ひませう。阿曾鷹殿には随分共に骨折つて、道鏡法王にお働きかけになるのをお勧めいたします」

然うした話をしてゐる中に、婢達は先刻白湯の椀を捧げ持つて來た時に命令（いひ）けられた酒を運んで來た。阿曾鷹は酒が好物であつた。雄田鷹に勧められて一獻二獻三獻と重ねてゐたが、その頬にはもう酔ひの色を見せてゐた。雄田鷹も對手して土器を重ねてゐる中に、不圖その頭腦

に犬鷹に就ての考へが浮んで來た。犬鷹を此儘にして置くのは危険なので、寧ろ亡き者にした方が可いと思はれもしたが、それも殘酷な處置と思回されてゐた際とて、阿曾鷹に托して一二年筑紫の地に忍ばした方が可いと、早くも思案を纏めたのであつた。

「阿曾鷹殿一つお頼みが御座るが、何とお聞入れ下さるまゐるか。私の家來ではなく、少し縁故のある犬鷹と申す下人一人、筑紫の地へお連れ下さる譯にはまゐりますまいか。少々酒癖が悪く、今日も酒故に此處の里人と喧嘩口論致しまして、何としても手許へ置き難く相成り、追放しようとも思ひましたなれど、それも不憫と存ぜられし折柄、貴殿がお越し下され、之は神々が貴殿に、犬鷹を托せよとの御告げのやうに存ぜられた。先刻からそのことを考へてゐたので御座ります」

雄田鷹は阿曾鷹が才人である丈けに、心措き難い節もあり、自身の地位の昇進の爲には、どんな手段をも取兼ねない佞人型の人物ではあるが、從來からの關係で藤原一族、殊に自分に對して背くやうなことを爲ないのを信じてゐた。犬鷹の口から偽せ佛舍利を作つた一條を口外する氣遣ひはなく、よしんば口を滑らした處で、阿曾鷹であれば、憂ふるに足りないとも思つたのである。

「雄田鷹殿のお頼みとあれば、如何なる難しい事柄でもお引受け致す心構へで居ります私、そのやうな下人一人お預り致すのは、何でもないので御座ります。確にお引受け致します。筑紫へ連れ歸り、みつちり神々の御神徳の程を語り聞かせ、酒癖の悪いのも治癒してやります。と申して私も餘り酒癖のいゝ方ではありませぬが」

阿會鷹は聲を立て、笑つた。

「早速のお承知忝う存じます。それでは只今之へ呼びましてお引合せ致しませう程に、お遇ひ下されい」

「その儀ならば今日は私少々酔ひ過ぎてゐるやうにも思はれますから、次に御館へ參上致しました節に願ひしたいと存じます。此邊りの名所舊蹟も見物したく、それに先刻も申ました由義宮御造營を、明日は拜觀いたす心組にて、三四日逗留致し、お館へは猶一二回はお伺ひ致すことと存じます」

「それならば犬鷹お引合せは次の折に致しませう。さあ今一獻」

雄田鷹は機嫌能げに又酒を勧めたが、阿會鷹は次第に膝を崩す程になつて、聽て歸つて往つた。

阿會鷹が歸つて了ふと、雄田鷹は又も今日の弓削寺の破綻の次第が思ひに上つて來たが、阿會鷹が種々に語つた言葉も考へられ、法王に神の威徳を示すやうに仕向けるとの一條が、殊更印象深く心に残つてゐて、一體何うしたことを、どんな方法で仕向けてかゝるであらうと、自分が勧めたことも想出して、脊筋の痒い思ひをしたのであつた。

道鏡法王と圓興

法王廳の法王の私室に、道鏡法王が座してゐるのに、五尺程離れて法臣の圓興が對向つて座してゐた。圓興は脊を圓うして畏まり、顔も擧げ得ぬやうな敬意を見せてゐたが、しかも道鏡法王は腹心の者に對する緩然たる態度を示してゐたし、圓興法臣にしても、何處かに恰も同僚であるかのやうな親みを漂はしてゐた。

「基眞禪師は犬鷹の行衛が知れないのにも、格別心を勞しませんし、馬鷹が殺害されたことも餘り苦に病んで居りません。下人の放埒さで、犬鷹は何處か他國を氣任せに漂浪してゐるも

のと思ひ、馬麿は酒故に何人かに恨みを買つたのであらう位に、心得てゐるので御座ります。うつけ者としては、少々法王の威光を笠に着過ぎて面倒で御座りまするが、あれはあれであの儘そつとして置いた方がよろしう御座ります」

圓興の言葉には基眞禪師を嘲ける調子が響いてゐた。

「其方は犬麿の行衛知れぬのを重大事として、自分の手でも探すやうに申して居つたが、何も手懸りはないか」

「はい。私は飽迄も犬麿を盗出したのは、法王は仇しようとする者がある證據だと、今でも重大事に心得て居ります。私は淨人殿が都の内の館一軒残らず刑務省の間諜を入れはしたが、かいくれ手懸りがないと仰せらるゝので、國々の方を私の手の者で探し廻らせました。近頃になつて河内國の藤原雄田麿の館に怪しい仕事場が設けられ、下人一人立籠つて仕事に専念してゐたが、今はその下人の姿も見えず、仕事場も取潰されたとの報告を受けました。私は初から申上げました通りに、犬麿を盗出したのは、佛舍利が贋せ物である生證據を押へて置く爲であり、ひよつとすれば犬麿の手で今一つ偽せ佛舍利をこしらへさせて、法王に對し何か企謀たくらむのではないかと思つて居ります。雄田麿館のかうした消息に怪む可き點は數々御座りますが、その

後の雄田麿の容子は、至つてもの靜かで、何人も訪ひ寄る者もありませんし、雄田麿の方から都の何人かと打合せをすると云ふやうな形跡もないさうで御座います」

「其方は雄田麿に疑ひを懸けたか。そんな形跡があつたとすれば無理もないが、私はあの男を二とない者と思ふてゐる。先頃弓削寺へ墓參に參つた美努久賣が歸つて參つての話にも、雄田麿は任務に精根を打込んでゐるので、人民に悦服せられ、美努久賣にも善美を盡した待遇しを爲てくれたと、美努久賣は悦んでゐた。あの男が私に對して叛き心を抱いてゐるとは私には思ひつかれない」

「それは然うかも知れませぬ。何にしても雄田麿は今藤原一族中での智恵者、年は若くて勇氣もあり、私は無から有を生み出す策士だとも睨んで居ります。餘りお油斷あつてはなりません」
「其方や淨人が手を盡しても探し出されぬ犬麿の行衛、恐らく遠國へ旅立つて往つたのであらう。よしや其方の云ふやうな心配があつても、今の朝臣連の間で、何が私に出來やう。一揉みに揉潰してやるばかりぢや、寧ろ今の中に佛舍利の作り物であつたのを世間へ發表しては如何なものであらう」

道鏡法王には相變らず人を人とも思はぬ傲り切つた容體が見られた。

「今の法王のお威勢では、出来るやうにも思へませんが、危険は飽迄も伴ひませう。それならば佛舍利の出現に依て法王になられたのであるから、法王の地位をお退きになるやうにとの聲は起らないでせうか。佛舍利を眞物として上奏し奉つた責任を問はないでせうか。いつも申上げますやう、佛舍利が偽物であるのを世間へ發表する場合は、何か事件が起り、朝臣、庶民と其方へ心を取られてゐるとさくさ騒ぎにつけこんで、するりと事を運んだ方がよろしう御座ります。先づそれ迄は佛舍利のことはあのみ、そつとしてお置きになつた方がよろしいと存じます。然うして之から後暫時は、何事に依らず餘りに積極的に働き懸けずに、只管法王の權威の高まるやう、朝臣なり、庶民の心を得るのを、第一の務めとするのが、策の得たるものと私は考へて居ります。さすれば犬鷹奴が隠れてゐても、佛舍利を今一つ作る者があつても、朝臣庶民を味方にして、負けを取る恐れは御座りません」

「然うした方が可いと其方が云ふなら、然う云ふことにしよう。私は之迄其方の云ひなり次第に動いて來た。私の血統を世間へ云ひ觸らすことも、大學寮の講義の方針を今のやうにするとも、皆其方の獻策であつた」

さう云ふと道鏡法王はぶつりと言葉を切つたが、次の話はもう然うしたことでなく、外の方面へと移してゐた。

宇佐八幡宮の御神託

一

天平神護三年は八月になると、神護景雲と改元せられたが、道鏡法王は法臣圓興禪師の獻策を納れて、一意朝臣並に民衆の心を收攬するやうに力めてゐたので、何等の破綻を示さず、以前通りにその勢威は盛んであつた。雄田鷹は美努久賣姫に發見けられて、止むを得ず犬鷹に作らした贋せ佛舍利は破却せねばならないやうになつた一條を、清鷹へと悉しく通じたので、それは何うにもならない次第であると清鷹も了承して、今後は一層道鏡法王の舉動に警戒心を緩めず、萬一怪しい動きを見せたその時はと、お互の間には申合せが出来てゐた。

その年もいつしか暮れて神護景雲二年となつたが、治る御代は安らげく、寧樂の都は東大寺の鐘に明け暮れて、朝臣庶民と太平を謳歌して、事なきその日／＼を過してゐた。十月になる